
魔法少女リリカルなのは ～宝石の海～（仮）

人好きで人嫌いな人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～宝石の海～ （仮）

【Nコード】

N 2 4 6 3 W

【作者名】

人好きで人嫌いな人間

【あらすじ】

M市の事件から4年…青年は新たな任務によって海鳴市へと向かう。しかし、愛する妹はこの任務には参加できなかった。魔石とわずかに分け与えられた運気だけで海鳴市へと赴く。

一方、青年が海鳴市を見下ろしている最中。一人の男が今一度の生を受け、少女と出会う。

全ては力を持った宝石が降り注いだ海鳴市でおこる。

ジュエルスオーシャンと魔法少女リリカルなのは クロスオーバー

注意 この作品は作者の妄想とオリ設定と都合でまとめられています。他原作のキャラクターや設定もでています。（主にF a t a）色々と駄目な方はターンしてください。駄文。処女作。

プロローグ（前書き）

こんにちは。 やつと念願の二次創作小説が書けました！

尚、この小説が削除されたときは……。1年以上更新されないときは作者になにかあったとお考えください。

では魔法少女リリカルなのは ー 宝石の海 ー （仮） 始まります。

プロローグ

「???」ここが海鳴市か……」

遙か上空。少ない雲の割れ目から漏れる人口の光が煌く町並みを見つめ青年は呟く。

「???」梅ちゃん…やっぱりこの光は汚いね」

青年は語りかけるが回りには自分の相棒のみ。しかし、この言葉を語る相手ではない。

語られた言葉は風になり、虚空へと消える。

「???」…愚痴言ってもしょうがないか。とっとと仕事終わらせて愛しの妹の下へ帰るか」

その言葉には自分にこの任務を与えた上司への怒りと、今回は傍にいない妹への恋しさが混ざっていた。

「???」じゃあ行こうか。相棒」

「???」ふん。せいぜい落ちるなよ!」

青年を乗せた龍は市街に向けて降下する。
数多の宝石が落ちた町へ。

「???」つぐ!」

落下により生じた背中への衝撃で激痛が走る。

「……なぜだ?!」

その言葉には明らかな驚きがあった。

それはそうだ。自分は死んだはずなのだから。

「……（確かに彼女の腕の中で息を引き取ったはず）。
「……」

痛みが和らいだのを見て自分の体を見る。そして、確かめるように手足を動かし、拳を閉じたり開いたり、腹部を触るなどして自分の存在を確認する。

「……」

今だに信じられないのか。わずかに伸びた爪で腕の皮膚を裂く。

「……赤い血……」

そこには生きている物に流れる赤い液体があった。

「……俺は……また生を受けたのか?」

だが、なぜ私は生前の最後の姿でいる?
なぜ存在できる?

記憶とは受け継がれて生を受けられるのか

「……ここは日本か?」

辺りに見える風景はまさしく日本の一角だ。

「……！」

ふと目の前でなにかが光った。存在を示すように。
その物体が視認できるほど近づいた。

「……！これは……」

それは、自分が生前自らの武器として、最後に愛した少女より託され所持した神剣。

「……グラム……」

これだけではない。なんと、三つの窪みにそれぞれに自分が使用していた魔石がはめられていた。

この神剣からみて、疑問を思い浮かべる。

「……黄泉、君が僕を生き返らせたのか？」

自分の最後に愛した少女へと疑問を投げる。
だが、届かぬはずの疑問を肯定するように風が吹いた。

「……黄泉」

がさ

「……！」

鍛えられた本能が働く。

自らの人を超えた運動能力によって瞬時に対象の喉へ刃を当てる。

「???」「っひ！」

「???」「動くな」

悲鳴からして対象は女性、少女だろう。

そして、雲に隠れてた月がその場を照らす。

「???」（！黄泉）

そう思わせたのは彼女を思い出させる金髪がなびいていたからだ。
だが、よく見れば彼女と重なるのは金髪と幼い顔だけ。あとは似ても似つかなかった。

「???」「す、すみません； 驚かせるつもりじゃなかったんです。
さつき木から落ちたみたいなんで大丈夫かなと思ひまして」
「???」（木？）

先ほど自分が存在を認識した場所を見る。その場所のちょうど真上に太い木の枝があった。
なるほど、どうやら自分は木に重なるようにして現れたようだ。

「???」「そうか、それはすまなかった」

グラムを降ろし上着にしまう。

「???」「なにぶん、こういう世界で生きてきたものでね
「???」「そうでしたか。いきなり剣を出してきたからびっくりしちゃいましたよ。でもそうゆう剣。持っているところの世界じゃあ銃刀法違反で捕まってしまうですよ?」

???（！　今、この子は“この世界”と言ったのか!?!）

“この国”ではなく“この世界”と言った。だとしたらこの子はこの世の存在ではないのか？

フェイト「あ、自己紹介がまだでしたね。私フェイト、フェイト・テストロッサです」

???「!?!」

先ほどの疑問を聞こうとした瞬間、いきなり名前をいわれた。自分の喉に剣を押し付けてきた相手に自己紹介などまるで意味がわからないが、名乗られたからには名乗るのが自分の礼儀だ。

疑問の答えは後ほど聞こう。

八尋「俺は八尋。叢神^{むらかみ}　八尋^{やひろ}だ」

ブログ（後書き）

これからもがんばっていききたいと思います。
次の更新は早いと思います。

1 話（前書き）

というわけで1話目GO！

1話

青年「…なさけね…」

本当に情けない。相棒に落ちるなよって言われたのに落ちちまうなんて…いつもはこんなことはないのに。バク転やアクロバティックやってもおちないのに…恥ずかしい！ 穴があったら入りたい！

黒い龍『大丈夫か？』

おっと、自らサイズを小さくして相棒が降りてきてくれたよ。

青年「ああ、大丈夫だ。枝とかに刺さらなかったのも奇跡だな」

まったく、この大木が無かったら一夜ずうつと再生待ちの体で過ごすはめだったぜ。

黒い龍『これからどうする』

青年「まずは資金集めだな。どんくらいこっちにいるかわかったもんじゃあないからな。どっかに泊まるにしても金が必要だ。まあ、今日は遅いから下見だけにしとくよ」

まずは荷物を隠すか。あれを持って歩くのは目立つ。

青年「俺の鞆は？」

黒い龍『ほれ』

と言いながら横長に長い、作りが頑丈のケースを投げられる。って

青年「うを！」

ナイスキャッチ俺。

青年「じゃなくて、投げるな！　いくら俺でも危ねえよ！」

振り回せば人の頭蓋を砕けるほどの質量を持つケースを投げられたら俺でも危ない。まあ、骨折してもすぐ直るんだがな。

青年「ふう、ありがとな。ゆっくり休んでくれ」

右手の義手に仕込んである使い慣れた魔石を取り出す。それを相棒に向けると、家に帰るサラリーマンのごとくぬるりが入ってきた。

青年「夜中だからな……寝床はここでいいか」

周囲に生物の気配もないし取って置きの隠れ家。森の中の大樹の根元である。

ケースを大樹のちょうどいい窪みに隠し結界を張る。これで大樹の一部だと、俺以外の生物には見分けが付かなくなる。

青年「んじゃあちよっくら街を下見してきますか」

時刻は夜の9時ほど。山から海鳴市へと足を運ぶ。

青年「なんもねえな」

見渡す限りのコンクリートジャングルと少ない緑。遠くに海が見える程度。

わずかに残っていた資金で“翠屋”という喫茶店でクレープを買った。閉店時の残った物を処分するところだったらしく、格安でクレープ3つを売ってもらった。

それを食べながら街を巡回する。うん、うまい。

青年「こんなにうまいクレープを食うのも久々だな。あいつらにも土産としてもって帰ろう」

生き残った愛する者たちのことを考えながら歩いていく。
残ったゴミはちゃんとゴミ箱に捨てたぞ。

????1「何すんのよ!!!」

????2「うるさい。だまらせろ」

なんだなんだ？

折り角の向こうから子供の声と複数の男の声が聞こえた。

誘拐かな？

変わったプレイと間違えたら大変だから…ちら見。

金髪少女「離しなさいよ!!」

誘拐犯A「っち、うるせえな。とっとと入れ!」

栗色髪少女「やめて!二人を放して! 放して!」

愉快犯B「ええい、黙ってる」

誘拐でした。廃ビルの下で少女三人が男6人に車に入れられようとしてるところだ。

青年「見逃すわけにはいかないな」

存在がばれる前にダッシュで接近！

青年「ほ」

ツガ

誘拐犯C「ツブ」

黒髪少女「え？」

一番手前にいた黒髪のロングの子を掴んでいた男の顔面に拳を入れる。もちろん手加減。やらなきゃ粉碎してるからな。

誘拐犯D「だれ…」

ツゴ

誘拐犯D「ぐへ」

つづいて二番目に手前にいたフリーの男が何か言い終える前に顔面に拳を入れる。

誘拐犯E「あ、あに…」

バキ

がしゃん

誘拐犯E「あが」

もう説明いいでしょ？ え、いる？ じゃあ…

次の、栗色髪少女を掴んでいた男を殴り飛ばす。

栗色髪少女「あ、ありが…」

栗色髪少女がお礼を言っているようだが今は無視。

その後、殴ったけどまだ意識があった奴や金髪少女を掴んでいる男、残りのフリーなどを30秒もしないで片付けた。

青年「大丈夫か？」

少女二人「は、はい。ありがとうございました」

金髪少女「ありがとう…」

栗色髪少女と黒髪少女は素直にお礼をいつてくれたが、金髪少女はしぶしぶといった感じた。

後ろでは電話で呼んだ警察や野次馬でいっぱいだ。もう少しで少女達の保護者が迎えに来るようだ。

この場にいる警察の中で多分一番偉い人「君、この子達を助けてくれたみたいね。詳しいことを署で聞きたいんだけどいいかしら？」

別にかまわないんだが今日はもう休みたい気分だ。歪みもないみたいだしな。

というわけで、組織の証を見せることにした。

青年「これで」

(省略)偉い人「！これは失礼。ご協力ありがとうございます」
少女達「……？」

正体ばらしちゃったけど、報告は組織から聞いているはずだ。
ついでに任務のことも聞いとこ。

青年「すまないんだが、聞きたいことがあるんだ」

(全省略)「はい、なんででしょう?」

青年「最近変わった形の宝石が届いていたり、変死体があったこと
はないか?」

(省略)「いえ、そのようなことはありません」

青年「そうか、ありがとう」

(略)「いえ、おきおつけて」

警察の人が向こうに行くのを見て送る。

俺も帰ろう。(大樹の元に)

栗色髪少女「あ、あの」

青年「なんだい? 迎えなら保護者の人たちがもうすぐくるよ」

栗色髪少女「そ、そうじゃなくて…お名前は?」

青年「ああ…」

本名でいいかな?

武流「武流、あしわら葦原 たける武流だ」

1話（後書き）

やっと武流の名前だせた（汗）

まあ、そんなに時間かかってないですけどね。

ついでに3人の少女の正体わかりましたか？

え、黒髪少女だけ納得いかない？

あの髪色は黒髪というオリ設定で。文章中だけです。

次回も早いうちに出しますノシ

2話（前書き）

さて、いよいよ武流となのはが会います。（正確にはお互いのことを知り始めるです）

では2話目、始まります。

2話

チュチュン ピーチク ピピピピ チュ

武流「…鳥の鳴き声だよな？」

黒い龍『起きたか』

右手の義手に仕込まれた“スター・オブ・シエラレオーネ”から相棒、黒龍王の声が聞こえた。

武流「ん？ あの泣き声はおまえか？ だとしたらちよっときついぞ？」

黒龍王『なわけあるか。普通に鳥の鳴き声だ』

と、そんなどうでもいいことを講義してもなんにもならない。

現在海鳴市を一望できる山の森の大樹の根元。昨日はここで野宿したのだ。

4月なのでちょうどよい気温だった。まあ、夜はさすがに冷えたが森の動物が寄ってきてたので添い寝してもらった。毛皮暖かったしもふもふしてたぜ。

黒龍王『それで、今日はどうする？ 下見はすんだのだろうか？』

武流「それなりにね。今日は商売だ。いい場所を見つけといた。」

翠屋の前がいいかと思ったが、商店街の近くに大きな橋があったのだ。歩道も広がったから問題ないだろ。

武流「というわけで、お前さんはもう少し休んでな」

黒龍王『M市の時みたいにな数個しか売れないとかは簡便だからな。』

待っている時間が長い何の…』

相棒にはいつも暇を作らせちゃう。歪みを見つけたら真っ先に出してやろう。

現在午前8時 日曜日だから結構通行人多いかもしれないな。

—●—

がやがや

お客さん 男「ぼったくりじゃねえのか！ これ」

武流「いえいえ、全て本物ですから。品の前のネームプレートに書かれていますおりに置かれています。お客様の選ぼうとしているルビーのネックレスももちろん本物、小さいながらもかなりの光沢をもっております。そんじょそこらに売られている物よりずっと安いんですよ？ ここで買わなきやそんな。宝石言葉は情熱。彼女に送るにしてもまったくもって文句なし。どうです？」

お客さん男「…そうか。じゃあこれ1つくれ」

武流「まいど！」

お客さんの背中を見送る。

よし！ これで合計20万ちょいの売り上げ。装飾も全て手作りだがプロに負けないほどの腕だぜ。

最初のお客さんに「偽物だ！」とかいって因縁つけられそうだったが近くを通ってくれた鑑定士さんのおかげで難なく回避。ありがとう！ 鑑定士さん。

昨日助けた栗色髪少女「あ、武流さんだ」

ん？ あれは…

武流「おお、昨日の栗色ちゃんか」

なのは「栗色ちゃんじゃないです！ 私にはちゃんとなのはっていう名前があるんです」

武流「悪い悪い、昨日は名前聞かなかったからな。で今日はどうしたんだ？」

なのは「今日はね、家族とお買い物なんだ。それより武流さんここで商売してたの？ ここ結構通るんだけど知らなかった」

武流「いや、旅をしていてね。しばらくこのへんで過ごそうかと思つてね。滞在のための資金を集めているんだ」

なのは「へえ」

「???」どうしたんだなのは。そんなにあわてて」

おや、どうやらなのはのご家族みたいだな。ん？あの人はい…

なのは「あ、お父さん。昨日助けてもらった武流さんだよ」

士郎「そうだったのか。始めまして、高町 士郎です。昨日は娘を助けていただいてありがとうございます」

桃子「桃子です。なのはを助けてもらってありがとうございます。つてあら？」

恭也「恭也です。妹をありがとうございます」

美由希「美由希です。同じく妹を助けてもらってありがとうございます」

武流「いえいえ、困ったときはお互い様です。それとお姉さん。昨日はクレープごちそうさまです。」

桃子「あらやつぱり、昨日のお客さんだったのね」

士郎「桃子、知り合いなのか？」

桃子「ええ、昨日残ったクレープを処分しようとしたらこの人が買ってくれたの」

士郎「そうだったのか。娘だけでなく店の経営も助けてもらってあ

りがとうございます」

武流「いえいえ、俺もあんなにおいしいクレープを食べれたの久しぶりなんで。それにしても翠屋の方々だったとは」

士郎「まったくですな」

わはははははh h

なのは「うわゝ、すごい。綺麗だねこれ」

恭也「すげゝ数のアクセサリーだな」

美由希「この宝石全部本物？」

武流「そうだよ、見ていくといい」

士郎「安いな、こんなに安くて利益あるんですか？」

武流「知り合いに採掘場を持っている奴がいましてね。掘らせてもらってるんですよ」

士郎「ということは、自分で磨いてるんですか？！」

武流「そんなところですね」

桃子「装飾もこってますね。これも手作りですか？」

武流「ええ、シルバーも知り合いからもらってるんで安く売れるんです」

なのは「すごい、お父さん、誕生日プレゼントこれがいい」

士郎「別にいいんだが…なのは； 安いといっても高いものは高いぞ？；」

武流「ん？ なのはちゃんは今誕生日なのか？」

桃子「そうなんです。この買い物もなのはのプレゼント探しです」

武流「そうですか。じゃあなのはちゃん、これは俺からのプレゼントだ」

そういつて今日一番高い値段のダイヤモンドのネックレスを差し出す。

なのは「え、いいの？」

士郎（ひゃ、160万！？……）

武流「いいのいいの。なのはちゃんが大事にしてくれたらこの宝石も喜ぶよ」

なのは「きれい……。ありがと！ 武流さん！！」

恭也「よかったな。なのは」

美由希「よかったね。なのは」

桃子「よかったわね。なのは」

喜んでくれてよかったよかった。さすがに痛手だが、この子になら文句なしに渡せる。そんじょそこらの金持ちより気持ちよく渡せるってもんだ。

士郎「あの…武流さん。そこまで所持金が…」

武流「ああ、いいんですいいんです。そこらの金持ちに渡すより気持ちいいですから。誕生日プレゼントということで御代は結構です」

士郎「ですが、さすがにこれほどの物をいただくわけには。なにかお礼を」

武流「では、お昼を御馳走してもらっていいですか？」

士郎「それだけでは…」

なのは「え?! 武流さんもいつしよにくるの?」

桃子「あら、それはいいわね」

恭也「なのはの恩人なら文句なしだ」

美由希「よかったね。なのは」

なのは「うん！」

なにがよかったのかわからんが、地元の人ならおいしい所ぐらい知ってるだろ。それが160万分なら文句なしだ。

士郎さんはなんか「それだけで恩返しにならない…」と言って落ち込んでいる。別にいいのに^^；

武流「じゃあ店を畳むので離れてください」
なのは「はい」

なのは達が離れたので出してあったアクセサリをすぐにケースの仕掛け棚に入れ、シートをしまい閉じる。この間3秒。

高町家「……おおう」「……」

武流「じゃあ、いきましようか」

—●—

武流「ごちそうさまでした」

桃子「いえいえ。気に入ってもらってよかったです」

士郎「あの程度では……」

さて、もう少しあの橋で儲けてから夜を待つか。

なのは「武流さん、行っちゃうの？」

武流「ん、まあね。もう少し滞在金を稼いでおかなくちゃ」

なのは「そう……」

あきらかな悲しみ方だな。おいおい、あの橋を通るんなら会える
だろ？ そんな顔するなよ；

美由希「そういえば武流さんは今どこで寝泊りしてるんですか？」

武流「ん？ はは、恥ずかしながら野宿さ。風呂は銭湯ですませている」

この時、なのはと士郎さんの眼が光る。

なのはと士郎「じゃあ家に泊まっていくといい!」「よ!」

うおう　びつくり。

武流「え?　でも迷惑じゃ…」

士郎「そんなことはない。しばらく滞在するのなら家に泊まるという。客室を使うといい」

なのは「それにお母さんの作るご飯おいしいんだよ!」

武流「そうですか? ;　ではお言葉に甘えさせていただきますよ。でももう少し商売をしてから行きます」

桃子「わかりました。では6時までに店のほうへきてください。そこから案内します」

武流「わかりました。じゃあまたあとで」

高町家の方々といったん別れて橋へと向かう。

部下「警部どうしたんですか?　なぜ彼を帰らせたんですか?」

昨日、少女達を助けた男。普通なら事情聴取するはずなのになぜ帰らせたのか、疑問を警部に聞く。

昨日の警察の偉い人（警部）「…彼はカルテルの一員だ」

部下「え!?!　カルテルってあのカルテルですか!?!」

部下2「どのカルテルですか?」

警部「我がカルテル」…なにこともなければいいのだがな」

からん

閉店の掛け軸がある翠屋の扉を開ける。扉につけた鈴が心地よい音を鳴らす。

桃子「あ、来ましたか」

武流「ええ、お願いします」

桃子と外にでる。桃子が店の鍵を掛けたのを確認して歩き出す。

武流「しかし、すごいな。ご両親の手伝か」

桃子「いえ、そんなことを言うなら武流さんの方がすごいじゃないですか。旅をしながら商売だなんて。ロマンがあって羨ましいです。それと、父と母は亡くなってます」

武流「え？　だってお昼に土郎さんと一緒だったじゃないか？」

桃子「え？　土郎さんは夫ですよ？」

武流「え？」

てことは…

武流「なのはちゃん達のお母さん？」

桃子「当たり前じゃないですか」ぶんぶん

嘘だろ！！？　20前後にしか見えんぞ！

でも恭也が19歳ぐらいだとして少なくとも30前半！

若すぎるだろ？　見た目。

まさか緋石ひせきがん眼所持者！？

だとしたらなのはちゃん達も…

武流「失礼、余りにも若々しかったので…」

桃子「あら、上手なんですね」

警戒しながら高町家を目指す。

—●—

なのは「おかえり！ 武流さん！ お母さん！」

高町家のドアをくぐった瞬間なのはが突撃してきたのをキャッチ。
お父さんになった気分だよ。

桃子「ただいま。なのは」

武流「た、ただいま； だがなのはちゃん。ただいまっていうのは
家族に言うもんだろ？」

なのは「なにいつてるの！ しばらくだけだけど武流さんも家族じ
ゃん。あと呼び捨てでいいから」

どうやらなのはにとって、俺はもう家族の一員のような。あいつ
は時間かかったのに…。

桃子「それじゃあご飯作っちゃうからまっててくださいね」

—●—

武流「うまい！」

このうまさ！ あいつに負けず劣らずだな。

なのは「でしょう。お母さんの料理は世界一なんだから」

桃子「そんなに喜んでいただいて…作った甲斐がありました」

残り「「「うん、うまい！」「」

そんなこんなで夜は更ける。

—●—

士郎「あれ？　こんな夜に出かけるんですか？」

なのは「え？」

武流「ええ、食後の散歩です。いつてきます」

なのは「あ」

なのはがなんかいいたそうだったが今はかまっていられない。

黒龍王「歪みか？」

武流「ああ、おまぢかねの出番だぜ？」

黒龍王「くくく、久々に暴れるか」

武流「暴れすぎるなよ；　近所の人たちにばれるからな」

反応はどうやら少し遠くの公園のようだ。被害者が出る前に片付けなければ。

武流「あそこか」

眼前に見えたのはもう人気の無い、緑が多い自然公園だ。この広さなら黒龍王もそれなりのサイズで出せそうだな。

武流「いた！」

ジュエルガイスト「『『キエエエエエエエ——』』」

成人の男性ほどの大きな海老を思わせるジュエルガイスト、トリ

血の匂いがしないことから今日はまだ、被害者はでていないのだらう。

魔術で結界を瞬時に張ってから……

がしやしやん

武流「そんでもって、コール！ 黒龍王シグルトバルム！」

相棒を自身の3倍ほどの大きさで召喚！

黒龍王 「ゆくぞ!!」

お互いの陣営が同時に駆け出す。

一体のレギオンがその突進を盾で防ぎふんばる。トリオツプスは潰せなかったことに驚いたのか、隙ができた。そこにもう一体のレギオンが懷に飛び込み殻ごと切り付ける。地しぶきをふくが見た目ほどよりは傷が浅かったのか、ひるんだだけだったが突進を防いで

いたレギオンが縦に両断する。派手に血しぶきと臓物を撒き散らし血の水溜りに沈む。

仲間があっけなくやられたのに驚いたのか、残りのトリオップス達も動きが鈍くなる。そこに黒龍王が急接近する。

黒龍王『遅いぞ』

見た目以上に鍛え上げられたその腕を振り上げ一体に向けて力いっぱいに振り下ろす！ 地面のコンクリートを砕き甲羅ごとひき肉にする。

残った一体は黒龍王の脇を通り抜け俺へと向かってくる。

確かにいい判断だ。だが…

ツドドシュ

トリオップス『！』

レギオン達のことを忘れるなよ？

黒龍王が戻ってくる。

黒龍王『残念だったな。あの世から出直してくるんだな』

腕を振り上げ力いっぱいに振り下ろす！ レギオンは即座に退避！残ったのは先ほどのトリオップスと同じく、砕けたコンクリートにへばりついたひき肉だけだった。

武流「ごくろうさん、お前達。戻ってくれ」

黒龍王『久々に気持ちよかったぜ』

そう言いながら黒龍王が魔石の中に戻る。

レギオン達も照れくさそうに戻る。かわいい奴らめw

武流「そんじゃあ、コール。魍魎鬼 アビスモール」

呼び声と共に俺と同じほどの大きさの黒い靄が出る。正確には指先程度のサイズのアビスモールがうじゃうじゃしているだけである。アビスモールは常に団体行動のためかなりの速度で繁殖する。だから琴代ちゃんから分けて貰ったのだ。

だだの肉塊になったトリオップス達に群がると肉塊はじょじょに縮んでいく。まあ、アビスモール達が猛烈な速度で食べてるんだけどな。

血の水溜りも飲み干して戻ってくる。

あ、またちよつと増えてる。まあ、戦闘に参加させるといつきに減るんだがな。ピ。ミンみたい。

武流「戻っていいよ」

ずるりとアビスモール達も魔石の中に戻る。

武流「それじゃあ後は頼むね」

そう虚空に話かけると近くの木々から青いロープを被った三人組が表れた。

“我がカルテル”の一員だ。騎士の称号を持たない者達は普段はスリーマンセルで騎士の仕事のサポートをする。主に戦闘後の片付けなど。

一人が残りの二人に指示。支持された二人は砕けたコンクリートをせっせと元の位置に戻す。終わったら特殊なジュエルガイストで割れ目を直すのだろう。

コンクリートを必死に戻そうとする姿は微笑ましい。

支持した一人も作業しようとした所を呼び止める。聞きたい事が

あるのだ。

武流「すまないが、ちょっといいかい？」
カルテルの一員「？　なんでしょう？」

声からして若い女の子のようだ。

緋石眼を持つている者には冷たい言葉を発するやつが多いがこの子は違うようだ。

だがこの声、どこかで聞いたような？

武流「高町家を知っているか？」

カルテルの一員「はい、桃子さんのことですね？　私たちも氣になつて調べたんですが、どうやら緋石眼所持者ではないそうです。もちろんご家族の方々も違うようです。一般人の方々は少し違うようですが、そこまではわかりませんでした。オッペンハイマ―卿や上部の方々なら知っているかも知れませんが、もうしわけありません。」

武流「いや、いいんだ。ありがとうな。作業がんばってくれ」
カルテルの一員「はい、お気おつけて」

どうやら高町家には緋石眼所持者はいなかったようだ。だとしたら桃子さんはなぜあんなに若いんだ？　謎だ。

その場を後にして高町家を目指す。

2 話（後書き）

いまさらですが見にくいですか？
でしたらスペースをもっと増やします

翠屋ケーキ屋ですがクレープはオリ設定です

あとなのはの誕生日ですが…わからないので勝手につけました
ファンの方々ごめんなさい；

次の更新も近いうちに出しますノシ

キャラクター設定（前書き）

ジュエルスオーシャンを知らない人が多いので、武流と八尋の設定を書きます。

（自分で調べた範囲）

キャラクター設定

あしわら たける
葦原 武流

見た目年齢20歳前後

“ 緋石眼 ” 所持者

ジエムマスター

身長190cmくさい

無駄肉無し

イケメン

両手が義手（かなりの高度な技術で製作された“我がカルテル”の特別製。ハンドガン程度では傷すらつかない。現代の一般科学では精製不可）

髪は黒（絵では藍色？）で顎辺りまで伸ばしているがギザギザ刈り（耳あたりから）

眼は緋石眼が原因で茶色に近い赤色 第一印象ハーフ

普段着は黒の長袖（生地が薄い）

ズボンは灰色の長ズボン

性格は自己中、女たらし、etc...だったが4年前の任務時に性格が直り基本、優しい
本当の「強さ」を知っている

“我がカルテル”のダイヤモンドナイツ（部隊）の生き残り。

使用魔石

『スター・オブ・シエラオーネ』

武流の手のひらほどの星型の金の装飾の中心にディスパーション（

虹色に光るほどの光沢。最上級）の、子供の拳ほどの大きさのダイヤがあり、装飾のそれぞれの頭に小さなダイヤが埋められている。
“黒龍王 シングルバルム”が主。
ほかの魔石より多くのジュエルガイストを入れられる。（これはオリ設定）

叢神 八尋

見た目年齢30歳前後
“緋石眼”所持者
ハイマスター
身長186cm
無駄肉無し
ハンサム

髪は銀髪の長髪

眼は基本閉じている 音や空気の感じ、気配で周りを把握
服装はタキシードを思わせる白服

性格は基本紳士だが目的のためなら女、子供でも容赦はしない。

武流にとっては師匠であり先輩であり相棒（元）であり仇。

元は“我がカルテル”のダイヤモンドナイトの隊長。

しかし、とあることをきっかけに武流を除く全メンバーを惨殺。同士とともに多くの魔石を強奪し行方をくらます。

使用魔石

『クイーン・オブ・ニーベルング』

ビジョンブラッドのルビー（PS2コントローラのスティックほどの大きさ）が埋め込まれた指輪。

元々、彼が最後に愛した少女、黄泉がフィアンセより譲り受けた代物。八尋が使っているのは“我がカルテル”を裏切った際に黄泉から借りたものである。

4年前の事件で黄泉に返還。

主は“白龍王 サバンテイル”。

説明にあるとおり、今、八尋はもっていない。

『神剣グラム』（魔石ではない）

黄泉から譲り受けた神剣。剣というより短剣に近い。

刀身、鍔、柄にそれぞれ魔石をはめる窪みがある。

魔石をはめる際に窪みはその魔石にあった形へと変化する。（これはオリ設定かな？）

特殊な金属でできているため刃こぼれもせず、錆もしない。

ジェムマスターにとって接近戦は弱点であるが、これはそれを補い且つ魔石を取り出すロスタイムを消している。

現在ではめられている魔石

『オーガスジェム』

掴んでも余るほどの大きさのパイロップ・ガーネット。

ただし、主は別の魔石に…

『ワンドロップオブブラッド』

主は“紅武天 マルドウーク”

『ブルーティア』

主は“蒼武天 スサノオ”

キャラクター設定（後書き）

以上です。

最後の魔石二つは情報がまったくなかったためほぼ手抜き（おい！）
申し訳ない；

他にも「知らない単語がある！」「もっと教えろ！」

というのは勘弁してください；

ジュエルスオーシャンを知っている人はともかく、知らない人には
ネタばらしになってしまいます；

今後の話で出しますので待っていて下さい；

次回は八尋とフェイトの話です。

3話（前書き）

夏休みが終わってしまったので執筆速度が落ちました；

知ってる人は「え？」な3話、始まります。

3話

八尋「…すまないがフェイト、聞きたいことがある」

フェイト「なんでしよう？」

八尋「…ここはどこだ？」

そう、俺は今、不思議な場所に立っている。

地面と思えるが明らかに人工のものだ。砂粒1つ見当たらない。

フェイト「“時の庭園”。私達の家です」

家というのは…わからなくもない。だが、それが建築されている場所がおかしい。

数多の色が混ざり合い溶けていくような景色が永遠と広がる。

時の庭園もおかしな形だ。アニメや漫画にでてくる浮遊城を思わせる。

そして俺は、時の庭園のでっばりの部分に立っている。

八尋(どのような構造でこの家は存在しているのだ？ 地面といえるものがない。それ以前にこの空間は？ 明らかに地球上には存在しない。神の世界とも思えるが…違うだろうな。それに、ここに移動した際のあの光は？ 魔術の一種か？)

フェイト「どうぞこちらです。リニス、アルフ、ただいま。」

アルフ「おかえり〜フェイト」

リニス「おかえりなさいフェイト。あら、そちらの方は？」

扉をくぐった先にメイドと思われる女性とオレンジ色のロングヘアの女性がいた。オレンジの髪は染めたかこの世界の種族の遺伝のどちらかだろう。犬耳が生えているのは気にしないことにしよう。

ふむ、どうやら俺は歓迎されてないようだ。殺気を抑えているようだがまだまだだな。

フェイト「“次元漂流者”の人。魔法とは違う不思議な力を持っているの。お母さんの病気を治せるかもしれない」

リニスとアルフ「！」

八尋「始めまして。叢神 八尋と申します。彼女が言った通り、私は病気を治す手段を持っています。が、どのような病気かまだわからないので診察をしてからでなければ何もできません。よければこの子の母親を診てもよろしいですか？」

フェイトとあつた時に“力”の一部を教えた結果、案内された。

彼女がこのような空間に住んでいるのなら世界は複数あるかもしれないと仮説を立てた。

それが本当ならばあの世界が俺の知る世界なら、“あのこと”が歴史に残っているはずだ。情報収集のためにここへ来たが、人助けが先か…。

リニス「…わかりました。主の下へ案内します。フェイトは部屋でまっついていて」

フェイト「わかった。八尋さん」

八尋「なにか？」

フェイト「お母さんをお願いします」

八尋「…善処しよう」

リニス「ではこちらへ」

—●—

フェイトとアルフという女性と別れ、リニスと呼ばれたメイドに付いてゆく。

しばらくすると王の座を思わせるイスが置かれた部屋へとついた。
イスに隠れるように後ろに扉があった。

リニス「主プレシアはこの先にいます」

八尋「わかりました」

ノックをして返事を待つ。

???1「入りなさい」

返事が来る。声からして女性、プレシアというフェイトの母親だろう。

八尋「失礼する」

部屋の中は床の上をコードが無数に走り壁には機械やモニターが埋まっており、人が簡単に入りそうなカプセルが置かれている。

中央のデスクに眼鏡を掛けた白衣の女性がイスに座っていた。

プレシア「?! あなた誰？」

八尋「始めまして。叢神 八尋と申します。フェイトに頼まれあなたの病を治しに来ました」

プレシア「あの子、また余計なことを…。帰って頂戴、私の病は治せないわ」

八尋「試されましたか？」

プレシア「え？」

八尋「無限にも等しい数多の世界の全ての医術を試されましたか？」

プレシア「そんなことは不可能だわ。全ての世界を特定するなんて“管理局”にも無理だわ」

数多の世界につつまないとこを見て、俺の仮定は正しかったようだ。

“あの世界”を調べる前に今の状況を終わらせてしまつか。
上着から神剣グラムを取り出す。

八尋「コール！ 水神ロードピラード！」

目の前に子供ほどの大きなマリモが現れる。普通のマリモと違うのはその大きさと宙に浮き、カー。イのような顔があり、周りを公式野球ボール並みの大きさのマリモが4つ宙に浮いていることだ。

プレシア「な！ なに？！ それは？！」

八尋「これは私がいた世界のジュエルガイストと呼ばれる人の感情から生まれた魔物です。魔石と呼ばれる宝石に封印し、操る事ができます。中にはこの子のように自分から協力してくれるものもいます。」

プレシア「…初めて知ったわ」

八尋「そうでなくては私が困る。そして、これが重要なこと。この子はジュエルガイストの中でも数少ない治癒能力をもっております。人にも例外なく効きます」

プレシア「…治るの？」

八尋「治るかどうかは病の種類によって変わります」

まあ、死に直面するような病には大抵効かないが、試してみる価値はある。

プレシア「…わかったわ。お願い」

八尋「わかりました。ロードピラード！ 【キュアルズ】！」

ロードピラードの周りを4つの球体が光を纏って旋回し上昇。頭

部を超えて交差する。その瞬間、光がプレシアを包み霧散する。

八尋「どうですか？」

プレシア「体が軽くなったわ！ でも…完治ではないよね」

八尋「一時しのぎ、というところですか…。力になれず申し訳ない」

プレシア「いえ、十分だね。…あなた、行くあてがないのかしら？」

八尋「ええ」

プレシア「なら、しばらくここに住むといいわ。あなたの欲しい情報があれば提供するわ。どうせ、そのためにきたのでしょ？」

八尋「お気づきでしたか」

プレシア「ええ。あなたのようなのがここにくるとしたら情報収集ぐらいでしょうね。でも、あの治療は毎日やって頂戴」

八尋「そのくらいならお安い御用です」

プレシア「それと」

八尋「？」

プレシア「敬語はいいわ。疲れるでしょ？」

八尋「そうだな。そうさせてもらおう」

—●—

八尋「というわけだ。どのくらいの期間になるかわからんがよろしく頼む」

あの後、またリニスに案内され食堂にいる。

フェイト達もここで食事の用意をしていたようだ。

フェイト「よろしくね、八尋さん」

リニス「はい、よろしくお願いします」

アルフ「・・・」

フェイトとアルフの反応はよかったが、アルフは反対のようだ。

アルフ「あんた」

八尋「なんだ？」

アルフ「フェイトやリニスに手を出したらただじゃおかないからな！ 八つ裂きにして適当な次元に捨ててやるからな！」

フェイト「アルフ……！」

八尋「肝に銘じておこう」

ふむ、どうやら彼女にとって家族は命より大事なようだ。
しかし、なぜプレシアが入っていない？

リニス「では、いただきますしょう」

一同「……いただきます」「……」

—●—

………

八尋「……寝覚ましもないのは静かすぎるな」

昨日の晩、食事を終えたあと風呂をいただき（寝巻きはピンクのパジャマだった。アルフに笑われてしまった）、用意された寝室であの世界のことをパソコンのような機械で調べ……そのまま寝てしまったな。

デスクから体を起こすと背中からなにかが落ちた。
掛け布団か。リニスだな。

八尋「！」

ベットのの上に俺の服と籠が置いてあった。パジャマはそこに入れるということか。

着替えた後、とりあえず屋敷(?)内をぶらついてみた。

八尋「…広いな」

思った以上に屋敷は広がった。時の庭園に比較して大きいな。

――

外に出られるであろうドアを開けてみた。

八尋「…なぜだ?」

そこには数多の色が混じり溶けていくような光景などなく、空いっぱいの青と地面を覆う緑がそこにあった。

八尋「…これは…」

どごん

八尋「!」

爆発音が響くと同時に遠くに煙があがった。

八尋「…いたい」

煙が上がったところへいくと金色の閃光が踊っていた。

よく見ればそれは、黒い装飾の服を着たフェイトが黄金の大鎌を振るい、飛んでいた…。

八尋「…魔術…か？　しかし空を飛ぶ魔術など聞いたことが…」
フェイト「！　八尋さん、おはようございます」

こちらに気づいたフェイトが降りてくる。

八尋「おはよう、フェイト。何をしてたんだ？」

フェイト「魔法の訓練です。まだまだお母さんには届かないけど、いつか私が皆を守るんだ」

魔法…、魔術とは違うのか？

八尋「…魔法とは？」

フェイト「あ、説明してませんでしたね。魔法は魔力というエネルギーを消費して行使する現象です」

魔術は魔力を触媒に通して行使するが…触媒の存在無くして発動するのか？　いや、あの大鎌が触媒だろう。

八尋「誰でもできるのか？」

フェイト「いえ、魔力を持つ人しかできないんです」

魔力が私の知^しってるものであればできるかもしれん。
試してみるか。

八尋「なら、教えてくれないか？　もしかしたらできるかもしれない」

フェイト「…わかりました。バルディッシュ、聞いてのとおり、お願いね」

黄金の大鎌『了解、マスター』

な！ 大鎌が喋った！？ これも魔法というものか？

フェイト「あ、驚かせちゃいましたね。この子はデバイスと呼ばれる、魔法を使うときにサポートしてくれる私達、魔道士の杖です。この子のようにAIを搭載したデバイスは声を出せるんです。デバイスがなければ基本、魔道士は魔法を使えません。あつてた？ バルディッシュ？」

バルディッシュ『肯定。しかし、魔道士は我々が無くとも魔法は行使できます。ただ、詠唱に時間がかかり、トリガーを発動させなければなりません』

なるほど。言うなれば魔道士のパートナー、私達で言う魔石か。

AIを搭載しているものと言っていたな。科学も取り入れているのか？

八尋「そうか。すまない、驚いてしまつて…」

バルディッシュ『いえ、気にしておりません。お気になさらず』

AIといていたようだが、かなりの高度な技術で作られたのだろう。

フェイト「じゃあやってみましょう」

そう言つて、フェイトがバルディッシュを渡してくる。思ったより大分軽い。

八尋「どうすればいいんだ？」

バルディッシュ『雷を落とす魔法を準備しています。発動させる場所を視認し、念じてください』

念じるだけで発動してくれるとは…サポートの割合が大きいな。
前方の野原に放ってみるか。（そこしかない）

八尋「では、やらせてもらおう」

眼を見開き、強く念じる。スサノオが放つ雷を…

八尋「…!!!」

視界が染まった。

――

八尋さんが眼を開いた。

私と同じ赤い瞳だ。でも、あの眼はもっと赤かった。まるで血のよう
うに。

そして、次の瞬間

ズ、ツガ――――――

フェイト「!!」

耳を劈く轟音が轟くのと視界が真っ白になるのは同時だった。

あまりにも眩しくて眼を閉じる。

あまりにも強い音に耳を塞ぐ。

ガ――――――――――

まだ轟音が続く…やんだ？

眼をゆっくりと開く。

フェイト「！これって…」

野原の一部にクレーターができていた。

八尋「…バルディッシュ、強すぎないか？」

バルディッシュ「いえ、本来このような威力の魔術ではないのです
が」

そうだ。あの魔法はあれほどの威力を持たない。

ツバン

後ろから扉を強く開ける音がした。

プレシア「何事！？」

アルフ「フェイト！大丈夫かい！？」

リニス「！これは…」

お母さん達が心配して来てくれたみたい。

でも、この威力は…

八尋「すまない、プレシア。フェイトに魔法を教えてもらってね。

行使してみたのだが少々出力が大きかったみたいだ」

リニス「え？でもこんな魔術は…」

プレシア「…フェイト。八尋になんの魔法を教えたの？」

フェイト「…初歩の雷撃魔法です…」

プレシア「！なんですって！」

そうだ、この魔術は小さな電気を走らせる程度のはず。こんな威力になるなんて誰も思わない。

プレシア「…リニス、バルディッシュを調べなさい。八尋、付ついてらっしゃい」

リニス「は、はい」

八尋「わかった」

私は八尋さんが気になったけど…リニスについていった。お母さんの邪魔はしたくない。

――

八尋「どうだ？」

プレシア「…予想以上よ」

八尋をカプセルに入れ、体と魔力量を調べていた。体のほうはなぜか結果がでず、魔力量はフェイトや私が足元にすらならなかった。

プレシア「こんな数値始めて見たわ。一度消費しているのにまだこんなに残っているなんて」

八尋「そうか、やはり人ではないからかな？」

プレシア「！ ということ？…」

八尋「先日、ジュエルガイストの話をしたな？ 俺もやつらと同じ化け物なのさ」

プレシア「化け物…ね。じゃあ、人として検査したのがいけなかったのかしら？」

八尋「眼を調べてみるといい。おそらくそれが一番の原因だ」
プレシア「わかったわ」

言われたとおりに眼を調べる。

！これは…

プレシア「…その眼、なんなの？」

八尋「緋石眼といってな、条件をそろえれば誰にでも現れるものだ。所持すれば超人的な身体能力が身につく。まあ、文字通りの化け物さ」

なるほど、この魔力量はこれが原因ね。

プレシア「あなたの世界では当たり前のものなの？」

八尋「いや、ごく一部の者だけだ。いっておくがおすすめはしないぞ」

あら、見抜かれてたわね。

プレシア「あら、なぜかしら？」

八尋「発動条件にも何種類があつてな。普通の人間が緋石眼所持者になる場合はジュエルガイストの血を混ぜるのだが…適合しなければ死ぬ」

プレシア「…他に方法はないの？」

八尋「ジュエルガイストに取り込まれれば確実に緋石眼を持つが…生還は難しいな」

プレシア「そう…」

この魔力量だったら…と思ったみたいだけどもめみたいね。

フェイトかりニス辺りで試してみようかと思っただけで、死なれてはまだこまるわ。

プレシア「ありがとう、あがってきて」

カプセルの開閉スイッチを押す。

八尋「…1つ聞きたいのだが」

プレシア「なにかしら？」

八尋「あのとき庭（さつき教えてもらった）にきたのはフェイトを心配してのことではないのだろうか？」

そのことが。

プレシア「当たり前よ。今死なれたら困るけど、あの子がどうなったって知らないわ」

八尋「そうか。その怒りは、あのカプセルの中の少女が原因か？」

な！

八尋「実は朝にな、偶然開けた部屋の奥に置いてあったのだよ」

プレシア「…いいわ。緋石眼のことを教えてくれたお礼に教えてあげるわ」

――

八尋「なるほど…。君も大変だったな」

プレシア「ええ、だから私はこの研究をつづけてるの」

彼女もまた、運気を失い不幸へと陥ったのか。

…今の私にはどのくらいの運気があるかな？ いや、少なかったとしてもやるつもりだ。

八尋「プレシア」

デスクに向いている彼女へと近づき声を掛ける。

プレシア「なにか…ん！」

彼女が振り向くと同時に半場強引に唇を奪う。

プレシア「うん…ぐ…っ…くう！」

ぱん

頬を叩く、乾いた音が部屋に響く。

予想どおりではあるが…痛いな。

プレシア「ハア…ハア…なにをするの」

八尋「なに、この方法でしか運気を分けられなくてね」

はたかれた頬を摩りながら返答する。

プレシア「…運氣？」

八尋「まあなに、方法が見つかりやすくなると思ってね」

プレシア「？」

八尋「唇を奪ったことには謝罪しよう。それと、今日の分の治療だ。コール！ 水神ロードピラード」

掛け声と共にロードピラードが出現する。

プレシア「…お願い」

八尋「ロードピラード、キュアルズ」

キュアルズを発動するための動作とエフェクトが起こる。

プレシア「ん…ありがとう」

八尋「では失礼するよ」

デスクへ向かうプレシアを残し、部屋を出る。

3話（後書き）

リニスが生きている設定です。

「契約内容は？」という人、もちろん変更しています。まだ秘密（秘密にすることでもない）

自分の頭の中ではプレシアは25歳前後で白衣姿です。

なんかもつと若くてよくない？ と思って妄想。

白衣は、あの黒服はちとな〜と思って。

眼鏡は技術者的な感じをだして。

バルディッシュは…すみません。

作者に英語能力は皆無です；

疲れてしまったのでここで一旦投稿。

次回も少し八尋サイドが続きます。

同時に武流サイドも進展！

でも原作介入はまだ先。（ぼそ） え？

今更ですが誤字、脱字、文章や言葉の間違いがあつたら教えてくだ
さい。

ではノシ

4話（前書き）

…小説を書く大変さがわかってきたこのごろ…
4話、始まります。

4話

彼女の部屋を後にし、バルディッシュのことがきになっていたの
で、リニスの部屋へと向かう。

八尋「プレシアの話では、あの魔術の原因は俺の予想外の魔力量らしいからな。バルディッシュに負担がかかってなければいいのだが……」

そんな独り言をしているとすぐに目的地の目の前についた。
ノックをしながら……

八尋「リニス、入るぞ」

リニス「どうぞ」

扉を開けるとそこには……

杖の先端部分に白布を被せたバルディッシュが横になってた。

八尋「うを！？ リニス、これは！」

リニス「冷却です」

冷却？

リニス「あまりにも八尋さんの魔力が大きかったため、放熱システムが間に合わないんです。ですからあのように濡れタオルで冷やしてるんです」

八尋「そうか。だが、あれは雰囲気かですぎてないか？」

リニス「まあ、いいじゃないですか。おもしろいですし」

…メイドがおもしろがつて好き勝手していいのだろうか？
まあ、あたふたしているフェイト達を見るのはおもしろいかな。

—●—
そして一週間がすぎて昼食中

リニス「そうだフェイト」

フェイト「な、なに？ リニス」

食事中にいきなりリニスがフェイトを呼びかけた。
食事中にリニスが喋りだすなど初めて見たな。

リニス「八尋さんに相手してもらいなさい」

八尋とアルフ「つぶ！」

フェイト「？」

な、なにをいきなり。

フェイト「どうゆうこと？」

アルフ「リ、リニス！ いきなりな、何を言ってるんだい！ フェイトに八尋のあ、相手なんて！ そもそもフェイトにはまだ早すぎるよ！」

フェイト「？」

同感だ。アルフの言うとおり、フェイトには早すぎる。なにより、ほんの一週間前に会った男に任せるものか？

リニス「なに言ってるの。戦闘訓練の相手なら八尋さんが一番じゃない」

八尋とアルフ「…ああ」

先日、鈍ると困るので、庭を借りてシャドー相手に修練をしたたのをフェイト達に見つけたのだったな。

リニス「それとも、ナニを考えていたのかしら？（笑顔）」

八尋とアルフ「…申し訳ない…」

フェイト「？」

――

八尋「は！」

フェイト「つつぐ」

八尋さんの剣とサイズフォームのバルディッシュがぶつかり火花が散る。

八尋「どうした、フェイト！ 遅いぞ！」

フェイト「あう」

訓練の相手をしてくれることになった八尋さんと庭で模擬戦しているんだけど…。（手加減はなし）

八尋さんが使っている剣、最初はただの装飾剣かと思ってたけど…見かけだけの剣じゃなかった。バルディッシュの魔力刃を衝突の度に削っていく。一度は完全に切断された。出力を上げて切断だけは回避できるようにはなった。

接近戦じゃあ分が悪い。一度離れよう。

空中に退避しようと浮遊魔法をかける。

八尋「！ させんよ」

ジャンプをした瞬間足を掴まれた！
そのまま地面に叩きつけられる。

フェイト「あぐ！」
アルフ「フェイト！」

観戦しているアルフが心配してくれる。
目の前に刃が迫る。転がって回避する。剣が野草ごと地面を裂く。
体制を立て直してすぐに真後ろへ距離を取る。
八尋さんが追いかけてくる。でも、これが狙い。

フェイト「フォトンランサー！」

フォトンランサーを目の前に3発出現させ発射する。
この移動速度の中でまっすぐに突っ込んでくる八尋さんにこれは
よけられないはず。

でも、八尋さんの実力はさらに私の予想の上をいく。
フォトンランサーを剣で叩き落した！
デバイスでもないのに、ただの剣でフォトンランサーを叩き落す
なんて。

さらにつっこんでくる。この移動速度じゃあバインドでは捕らえ
られない。

気づいたらもう目の前にいた。フォトンランサーを放ったときに
左腕を前に突き出していたのを掴まれた。右手のバルディッシュで
迎撃しようとしたら、引っぱられた。

その勢いが無くなる前に左脇腹に剣の柄の部分を叩きつけられる。
フェイト「っあ」

そして、叩きつけられた勢いで私は吹き飛ばされて倒れる。
完敗だ。脇腹に叩き込まれたのが柄ではなく刃だったら死んでい
た。それに、魔法をまともに1つも使わせてくれなかった。

フェイト「ハア…ハア…、負け…ました…」

八尋さんが近づいてきて、手を伸ばしてくれる。

八尋「すまなかったね。立てるかい？」
フェイト「…はい」

手を借りてその場に立つ。

八尋「ふむ、接近戦は大抵の者が相手なら問題ないが、熟練した相
手、主に短剣などの小回りの利く武器を使う者が相手だとすぐに殺
されるな。空中に退避するのなら隙を突かねば先ほどのように落と
されるぞ」

フェイト「わかりました」

これが本物の戦士（戦闘経験的な意味）。確かに、魔道士相手な
ら火力の差で勝敗が決まるけど、戦士や騎士が相手だとそれだけで
は勝てない。

八尋「では、今日はこのくらいにしよう。模擬戦ならいつでも相手
になるよ」

フェイト「はい、ありがとうございました」

リニスとアルフが駆け寄ってきて手当てをしてくれる。
八尋さんは家の中に戻っていった。

―
―
プレシア「ジュエルガイズトを召喚しないで剣だけでフェイトを倒すなんてね。これが緋石眼所持者の力？」

デスク上の機械から眼を離して話しかけてくる。
先ほどの模擬戦はカメラなどを使って見ていたのだろう。

八尋「そうだ。だが、緋石眼の力はこの程度ではない」
プレシア「そう…。まったく、期待を裏切らない力ね」

八尋「では、始めるか？」
プレシア「ええ、お願いするわ」

1週間ともなるとお互い無駄に心配しなくてすむようになった。

八尋「コール！ 水神ロードピラード」

いつものようにロードピラードを出現させる。

八尋「ロードピラード。【キュアルズ】」

プレシアを光が包み霧散する。

プレシア「ん…ありがとう」

八尋「どうだ？ 方法は見つかったか？」

プレシア「ええ、アルハザードの存在がわかったのだけど…行きかたがわからないの」

八尋「アルハザード？」

プレシア「忘れられた都。数多の技術や魔法が眠っている滅んだ世界よ。死者復活の魔法もあるかもしれない。ただ、管理局でも特定

できていない世界なの」

八尋「次は場所の特定か」

プレシア「ええ。まあ、気長にやるわ」

八尋「！」

プレシア「どうしたの？」

八尋「いや、なんでもない」

あれほどまでにフェイトを嫌い、彼女の復活を願っていたものが
“気長にやる”とは……。変わったな。一緒にフェイトを風呂に入れたのが原因かな？」

テストロッサ家の時間が変わろうとしていた。

高町家 + α 団欒中

士郎「王手飛車取り」

武流「ふふ、甘いな。呼んでいましたよ。カウンターで王手摘み」

士郎「な！ し、しまった。く、もう一局」

武流「ええ、かまいませんよ」

なのは「武流さんの番だよ」

武流「ん、はいよ」

ただいまの状況、俺は士郎さんと将棋をやりながら（もちろん全局全勝）なのは達と桃。をやっている。マ。パと違って選択だけで
すむからね、将棋と同時進行できる。

俺が高町家にお世話になってから1週間がたった。

今では大分、本来の自分の性格がでてきた。（んだと思う）

桃子「お風呂できたから、なのは入っちゃって」
なのは「はい。じゃあ武流さん、一緒に入る」
武流「つぶ！」

…なんでだよ。

武流「なのは、まずはおちついて話をしよう」
なのは「？ うん」

武流「確かに小さいころならお父さんやお兄ちゃんとも入っても問題はないが、他人や居候と入るのはまずいぞ」

なのは「なんで？」

武流「それは…（いったら言っただけ問題だ）」

どうするどうするどうする！？

桃子「あら、武流さんなら心配しないで任せられるわ」

美由紀「それとも武流さんはあっちの人かな？」

武流「なわけあるか。餓鬼の裸なら妹で慣れてるが…これはやばいだろ」

恭也「妹がいるのか？」

武流「おう、すせりっていうかわいい妹がいるんだZEE！」
なのは「むっ」

なのはよ、なぜ俺の頬を抓る？；

士郎「その子は今、どこに？」

将棋をやりながら話が進む。

武流「M市の知り合いの家で皆と暮らしてますよ。いつもなら一緒

に旅に行くんですが、ちと拾い子がいましたね」

美由紀「拾い子？ 猫ですか？」

武流「いや、れっきとした人間だよ。声がだせない子だから、すせりにまかせてるんだ」

桃子「あら、関心しませんね。妹さんに全部押し付けてきたんですか？」

その質問がきたか； 対処法対処法。

武流「それを言われると痛いですが、ちゃんと仕送りしてるんですよ？ 売り上げのほとんどは仕送り行きですよ（嘘ではない）」

士郎「まあ、早く風呂に入ってくるといい。なのはに関しては、信頼していますから」

武流「負けそうだからってそれはねえだろ；」

士郎「さあ、なんのことかな？；」

なのは「将棋のことはいいから早く入ろうよ（＃）」

引つ張られていくおれ；

士郎「M市…か」

美由紀「M市ってたしか4年前に大事件があつたんだっけ？」

恭也「大量神隠し事件、だっけ？」

士郎「ああ、人口の3分の2が一夜にして行方不明、遺体は1つもでなかったそうだ。残っていた人たちもその晩の記憶が一切ないときた」

桃子「でも、その大事件の前にもいくつか事件があつたんでしょ？」

士郎「いくつかな、何人も行方不明者がでたりなんてしてたな。」

その中で一番大きかったのが電車の転倒、乗組員は全員死亡」

恭也「だけど、死因の理由が未だに謎。全員、外傷が少ないのに死亡だったんだろ？」

士郎「そんなところに知り合いに頼んで家を借りるか？」

美由紀「貧乏すぎて他に場所がなかったんじゃない？」

桃子「まあ、今は居候で家族よ」

士郎「そうだな」

なのは「いい湯ですね」

武流「爺くさいぞ」

なのは「風呂は日本の誇りです。だからいいんです」

どんな理屈だ；

自分の体を洗いながら心でツッコミ。

もちろん腰にはタオルを巻いているぞ。

なのは「…その義手、水に付けてもいいの？」

武流「いいみたいだぞ。じゃなきゃつけていねえよ」

なのは「そうだね」

武流「・・・」

なのは「・・・」

お、重い； 空気が；

さっき服を脱いだときになのはに悲鳴を上げられた。下は即座にタオルを巻いたから見られてないはずだから原因は義手だな。…そういうや教えていなかったから驚かせちゃったな。義手と教えたとき、なのはがものすごく悲しい顔をしていた。

ざば

突如、なのはが湯船から上がった。

そして俺のとなりに座ると左の義手に手を添えてきた。

なのは「痛かった？」

武流「…物凄く…な」

そのまま少し、ほんの少し沈黙が続いて…。

なのはが義手を撫でて、

なのは「…だいじょうぶ。もう、だいじょうぶだから」

その姿が、俺を愛してくれた彼女達と重なる。

その姿が真珠と重なり、こはくと重なり、るりと重なり、琴代ちやんと重なり、すせりと重なる。

そして、マリーと、シェーラと、ひかる洸が重なった。

武流「っ」

なのは「…！ ど、どうしたの！？ 武流さん」

なのはが俺を呼んだ。

眼に何かが溢れてた。

武流「…！ 俺、泣いてるのか」

なのは「どうしたの？！ どこか痛いのか？」

武流「いや…違うんだ。なんでも、ないんだ。」

隠すように右手を顔に被せ、泣いた。長く泣いた。

武流「情けねえ」

女の子の前で、しかもバスルームで泣くなんてな。
入りたい！ 穴があつたら入りたい！

武流「…寝よう。とっとと寝て忘れよう」

そういつて薄い掛け布団を頭まで被る。

こんこん

扉からノックが聞こえた。

武流「寝てます。明日の朝にどうぞ」
なのは「起きてるじゃないですか」

と、言いながらなのはが入ってくる。
まったく。

ベットから顔を出して応答してやる。

武流「なんだ、なのは」

なのは「その、また一緒に寝ていい？」

武流「…どうぞ」

ベットの奥に移動すると枕を置く音と潜ってくる音が聞こえた。
そういえば、最初に泊まったときも来たな。

あとで士郎さんに聞いたところ、誘拐されそうになったことがまだ頭から離れなかったらしく、その晩は二人の所に一緒に寝に来たらしい。

初日に来たのは俺が泊まりにきたことで安心したから、だそうだ。
…今日は俺のためかな？

武流「なのは」

なのは「なに？」

武流「…ありがとうな」

なのは「…うん」

夜は更けていく。

4話（後書き）

途中に出てきた名前がわからない人へ
察してくれたら助かるなゝ；

次回もできるだけ早くだします。

5話（前書き）

やっと5話目です；

小説書くの大変ですけど楽しくなってきました。

ちょっと遅れての5話、始まります。

5話

武流「ん？ あ、あの黒髪のロング少女の姉が俺を家に招待したい？」

なのは「もう、すずかちゃんの名前、今教えたじゃん」

頬を膨らませたのはを撫でながら考える。

昨日（４話）の昼に友達の家で誕生日のお祝いをしてもらったとき、俺の話をしたそうだが、誘おうとしているのはすずかの姉らしい。なぜだ？　っは！　まさか、妹を救ってくれたお礼に、あんなことやこんなことを！　いや、だめだ！　俺には愛する者達が！　etc…

なのは「でも酷いよね。私は仲間はずれなんて……。ぷう」

武流「まあ、いろいろ話があるんだろ」

なのは「納得いきません！」
ぷい

武流「ま、すぐ帰ってくると思うから。それまで勉強してなさい。あとで遊んでやつから」

なのは「はい」

—●—

警備口乎？ 侵入者発見 排除

武流「なんでじゃ――――！！」

月村家（豪邸でした）の庭でマシンガン装備の高性能ロボット（空中浮遊してます）に追っかけられ中。

なぜだ！招待されてるはずなのになぜ狙われる！？

それともあれか？ 俺を誘拐犯の仲間だと思つてのことか！？
ヘンタイとおもつてのことか！？

だとしても空中浮遊してるロボットなんて聞いたことねえぞ！？
日本の技術、限界超えてんだろ、これ！

武流「ちきしょー！ 壊していいのか！？ 自己防衛に入るよね、
これ！？ 月村さん！ 誤作動なら止めてーーーーー！」

返事なし。うん、やっちゃおう♪

と、前から警備ロボが出現。同時に前後の警備ロボがマシンガ
ンの標準を終えた。

武流「なら、お約束で！」

弾丸発射と同時に横へ飛ぶ。映画みたいに2機の警備ロボが、お
互いの弾丸を食らって沈黙する。

武流「あと3機」

もう一度同じ用途で2機を沈黙させる。

武流「ラスト！」

沈黙した警備ロボからマシンガンの弾丸一発と長い棒(?)を瞬
間的に剥ぎ取る。

剥ぎ取った時に標準を合わせたのであろう、最後の警備ロボが弾
丸を撃ち出す。

ま、もうそこに俺はいないんだけどね。

剥ぎ取った弾丸を無造作に宙に投げ、落ちてきた瞬間、長い棒(。
?)で底を叩く！

武流「ホームラン！」

ダン

弾丸の射出音と警備ロボに穴が穿ったのは同時だった。

武流「いよつし！ どうよ!？」

????1「流石ですね」

うを！ いつのまにか玄関前にメイドと思わしき人が立っていて拍手していた。

武流「あのー、これって大丈夫ですか? ;」

メイドさん「大丈夫です。あなた様のためにご用意しましたから」

武流「うーん、用意する物まちがっていませんか? ;」

メイドさん「間違っておりません。あなた様なら大丈夫とのことです」

誰だ！ マシングンを装備した空中浮遊で高速で追ってくる警備ロボに勝てる生物が存在すると思った奴！ ここに勝った奴いるけどさ！

メイドさん「どうぞ、このパーティーを考案した方々がお待ちです」

…付いていくほかなさそうだな。

—●—

武流「…なんで士郎さんと恭也がいるんだ?」

恭也「忍とは高校からの付き合いだね。今日はお茶会に誘われてたんだ」

士郎「私は…なりゆきだ」

物騒なお茶会でしたよ。士郎さん。

さて、丸テーブルを挟んでイスに座ってる女性がすずかのお姉さんかな？

すずかも同席しているが…なんか緊張しているのかな？ 落ち込んでるように見えるな。

忍「始めまして、武流さん。私がすずかの姉、忍です。すずかを助けていただいてありがとうございます。立ちっぱなしもなんですからどうぞ、お座りください」

武流「うむ、座りたいのは山々だが…その前に空を飛んでたロボットについて話聞きたい」

？ なぜか、すずかが驚いたように瞳孔が開いている。まさか、すずかが犯人？；

忍「そうですね。ではお話の前に…ノエル」

メイドさん「はい、お嬢様」

武流「！」

首筋に金属のひんやり感が伝わる。

ナイフか。てか、俺に気づかれないように動くな…なにmond？

武流「いや、自己防衛にしては物騒な物をお持ちで。； なんなんだい？ メイドさん；」

ノエル「月村家のメイド長を勤めさせていただいております、ノエルです。ご安心を。その気になれば石ころも弾丸にできます」

安心できねー！ 怖さ増したよ！？ 石ころ弾丸にできるってどうよ！？（俺もできる）

忍「さて、先程の質問にお答えするわ。警備口ボをあなたに仕向けたのはあなたが赤眼かどうかを確認するためよ」

赤眼？ 緋石眼のことか！？

武流「おいおい、赤眼なんてときたまにいるでしょ？ カラーコンタクトでもできるし。赤眼になにか恨みでも？： というか赤眼確認にあれば度がすぎてるでしょ？：」

忍「…先程の答えを訂正するわ。私達が知っている赤眼かどうかを確認したかったの。そしてあなたは該当者」

武流「俺はあんた達のこととは知らないぜ？ 一度見た女性は忘れなishina。大体どうやってあんた達が知る赤眼と該当するんだ？；」
忍「あなたが知らなくて当然。私達だってあなたのことは知らないわ。赤眼かどうか判断したのは、その身体能力を見てのことよ。特に最後の攻撃なんて人間には不可能よ？」

ああ、やっぱり最後のあれはやばかったか。てか、知らない俺に危害加えるってどうよ！？

緋石眼所持者になんかやられたか？ 誰かが殺されたとか；

忍「数十年前、月村家の一人が何者かから負傷を負わされたわ。手術も意味が無く数刻後、亡くなったわ。ただ、死の寸前に『赤眼にやられた』と言い残したわ」

納得。ジュエルガイストとの戦闘でも見られたから口封じされたのか。まったく、記憶だけ消せばいいのに#

忍「それ以降、私達一族は赤眼の人間を探したわ。殺すために」
武流「それはわからなくもないが…俺が殺される覚えなんてないぜ？」

忍「あら、天敵を見つけたら早めに潰しとくものでしょ？」

こわ…；

どうにかして敵意がないことを示さねば、俺の命がない！（いや、簡単に逃げられるけどさ）

すずか「やめて！ お姉ちゃん！」

忍「すずか！」

恭也「すずかちゃん…」

すずか「…なんて優しい子。」

すずか「確かに武流さんは小さい女の子も襲いそうだけど、でも私を助けてくれた！ 私達を助けてくれたんだよ！？」

ごは！

ひでえ、何気にひでえこと言うな…；すずか；

確かに中学生を相手にしたことあるけど…；今すせりと一緒に住んでるけど…；痛い；

ノエル「おやおや、どうやらすずかお嬢様の言葉が効いてるようですね。もっと言ってあげましょうか？ ロリコン#」

ぐは！

なぜ怒りの感情がでてるんですか、ノエルさん！？

ノエル「私だって…」

え？　これは、まさかのツンデレ！？

武流「…今晚いかが？（食事的な意味）」（さわやかに）
ノエル「屍姦しろと？」

死ぬこと確定！？　そして誤解されてる！

すずか「だから！　もういいでしょう？　武流さんがヴァンパイアハンターならあの時、私を助けないで殺してるよ？」

？　ヴァンパイアハンター？

忍「私達の正体を知らなかったただけかもしれないわ」
すずか「…」

武流「あの〜」

忍「死体は喋らないで」

ひでえ！　こっちでも死体扱い！？

でも、緋石眼のこと喋っちゃっていいのかな？

『お兄様メールですわ。メールのご確認をしてくださいまし』

一同「……………」

俺のメールだ…

ノエル「…最低ですね」

武流「妹が勝手に設定したんだよ！　頼むからメールぐらい見させて！　ていうか、これ10分間リピートするんだよ！」

すずか「…直せばいいじゃないですか」
武流「…暗証番号も変えられたんだ…」
一同「」「」「」「」「」「」

『お兄様メールですわ。メールのご確認をしてくださいまし』

虚しく流れる…

忍「…見ていいわよ…」

武流「…おう…」

ええと、なにになに………これは！

武流「上から許可が下りた。俺のことを喋ってやるよ」

忍「…許可をもらえなきゃ喋れなかったの？」

武流「そういうとこにいるんだよ。俺は」

ほんと、めんどくさい組織だな。

しかし、なぜ『月村家に組織の説明をしろ』と？

武流「まず、俺のことだが…あんたらが言う赤眼だ」
すずか「！」

忍「！ やっぱり！」

武流「！ま、まで！ 数十年前のは俺じゃない！」

忍「だとしても、赤眼には変わらない！」

恭也「落ち着け忍！ まずは武流さんの話を聞こう。どうやら僕達の疑問を解決してくれるみたいだから」

忍「恭也…わかったわ、続けて」

武流「お、おう」

やっぱこの二人できてるな。

武流「赤眼と言ったが、ヴァンパイアハンターじゃないぞ？」

士郎と恭也とすずかとノエル「！」

忍「な、なんですって！？」

武流「というか、吸血鬼の存在すら知らなかったぐらいだ。…お前さんたちは吸血鬼なのか？」

すずか「…」

忍「…ええ、私とすずかがそうよ。恭也達には協力してもらってるだけ」

武流「ふうん、ノエルさんも？」

ノエル「いえ、私は…」

違うのかな？

あ、ナイフ外してくれた。信用されたかな？

忍「でも、伝説のような伝染能力はないわ。貧血を起こさせる程度。あとは、せいぜい身体能力がそこらへんの生物より高いだけよ」

緋石眼の劣化版みたいな感じか？ まあ、殺害衝動が出ない分、俺達よりはずっと人間っぽいな。

武流「そうか。じゃあよかったな」

すずか「！」

忍「…なぜかしら」

武流「さすがに吸血衝動つてのはどうしようもないだろうけど、別に人を殺すとかってわけじゃないんだろ？」

すずか「・・・」

忍「それは、そうだけど…」

武流「ま、化け物ならここにいるけどな」

その他全員「……え?」「……」

武流「さて、話の続きだが…まず、お前さんたちがいう赤眼は緋石眼っていうんだ。これは訂正しておいてくれ」

忍「…わかったわ」

武流「そんなもって、うちの組織は“我がカルテル”っていったな、ジュエルガイズトっていう魔物と魔石に対して動いている」

忍「ジュエルガイズト? 魔石?」

武流「ジュエルガイズトは人を含めた生物の感情から生まれる魔物だ。歪み呼ばれる空間の裂け目から夜に出現する。滅多に現れないがな。食事は感情がもつとも高いと思われる人間を食う」

士郎と恭也とすずかとノエル「……;」「……」

忍「なるほど、人の天敵ね;」

武流「魔石はジュエルガイズトを封印して、操る事ができる特別な宝石だ」

忍「普通の宝石との見分け方は?」

武流「わかりにくいんだが…2つある。1つは呪いや曰く^{いわ}つきのものは魔石と思っ^いていい」

忍「…例えば?」

武流「…【キューピット・ペドロス】っていう宝石を知らないか?」

忍「…そういう名称のオパールがあるって聞いたことがあるけど…詳細は知らないわ」

武流「これも魔石の1つだ。3年で持ち主が5人も代わってな、その全員が早死にしている。中には処女懐妊した女の子もいたとか…」

忍「…ひどい物ね。も1つは?」

武流「もう1つは、バカみたいにでかい」

忍「…は?」

義手からスター・オブ・シェラネオーネを取り出し見せる。

すずか「!」

武流「これぐらいのものは魔石だと思っていい」

士郎と恭也とノエル「……！」

忍「！　な、そんな大きいダイヤ、聞いたことも無いわ！」

武流「ま、以外だと思っ宝石は魔石だと思ってくれ」

忍「……わかったわ」

武流「本題に戻るぜ。“我がカルテル”の仕事は魔石の回収、及び
ジュエルガイストの駆除と、存在を世間から隠すことだ」

忍「隠す？」

武流「もうおまえさん達の疑問も晴れる答えが出てるんだがな」

忍「隠す……まさか！　口封じ？」

武流「正解」

すずか「！」

忍「そのために殺されたというの！？　私達の祖先は！」

武流「そうゆうことになるな。ジュエルガイストとの戦闘でも見
ちったんだろ」

忍「そんな……」

恭也「まで、ということとは、見られた度に口封じをするのか！？」

武流「そうだ。俺みたいに魔石を使っ記憶だけを消せるんだが、
大抵のやつらはめんどくさがっ口封じを選択するがな」

恭也「ツ……」

武流「最後に、緋石眼所持者はジュエルガイストの血を混ぜられた
人間、いわば実験動物だ」

その他全員「……！！！！」

武流「ジュエルガイストを操るにはそれなりのリスクが出る。その
リスクを軽減するために強靱な人間を作ろうとして、生まれたのが
緋石眼所持者と呼ばれる化物だ」

士郎と恭也とすずかとノエル「……な！！！！」

忍「……どのような能力が？」

武流「身体能力の異常なほどの向上と高速再生能力だ。ただ、血が
強ければ強い程、能力も強くなるんだが……大抵が発狂するか死ぬ」

その他全員「……………」

こんなところだな。あ、忘れてた。

武流「そうそう、ジュエルガイストは外見が明らかにファンタジーだからわかるよ。ただ、手出ししようと思うなよ？ 生まれたてならともかく、熟練した奴は緋石眼所持者以外手が出せないほどの力を持つてる。ま、見つけたら俺の携帯に連絡してくれ」

連絡先を書いたメモをテーブルに置く。

武流「あと、この事はくれぐれも他言無用で頼むぜ？ あんたらもまだ、死にたくないだろ？」
忍「承知してるわよ」

さて、恭也達はまだ話がありそうだから残るんだろうな。てか、士郎さん…あんま喋んなかったな；

ノエルさんに見送られて月村家を出る。2階から降りてくる途中にノエルさんに似ている女の子メイドに挨拶されたけど…妹かな？

すずか「武流さん！」

武流「うを！」

びっくりした。すぐ後ろから大声で呼ばれたらびっくりするぜ！？

てかいつのまに追いついたんだ？ あ、2階の窓開いてる…すごい身体能力； さすがは吸血鬼；

武流「どうしたんだ？ すずか」
すずか「あの…その腕、義手ですか？」

それを聞くために追っかけてきたわけではなさそうだな。本題は別だな。

武流「ああ、こういう仕事やってると四肢の欠陥は珍しくないよ。

“我がカルテル”特製の義手だから、鉄の。インバレルの主人公の友達の義手の進化系だと思ってくれ」

すずか「それはむしろわかりにくいです；」

な、なんんだと！？ これ以上は無いと思うほどの簡単な説明だと思っただが…。

武流「ま、それは置いといて。なにが聞きたいんだい？」

すずか「…うれしかったです」

武流「？」

すずか「さっき、吸血鬼だと知った私のことを…そのことを否定しないで私の存在を肯定してくれたのが、とっても嬉しかったです！」

（極上の笑顔）

ぐは！ なんて一撃だ…緋石眼所持者でなければ死んでいた！
なんてことわない。

武流「そか。でも、すずかの存在を肯定してくれる人間は他にもいるだろ？」

すずか「？」

武流「なのは達だよ。あいつらは、すずかのことをちゃんと、肯定してくるてるだろ？」

すずか「それは…私の正体を知らないだけで…」

武流「いや、正体を知ってもきつというも通りの友達でいてくれるはずだ」

すずか「…はい！」

頭を撫でてやると「うにゅ〜」と鳴きました。…癒されたぜ。

すずか「あの、武流さん。さっきいつた『化物ならここにいる』って…」

やっぱ、本題はそっちか；

武流「…ああ、俺が化物さ」

すずか「違います！ 武流さんは私達を助けてくれました！ 化物なんかじゃありません！」

武流「…俺はもう人を殺してるんだ。数え切れないくらいな」
すずか「！ 嘘です！」

武流「いや、本当だ。仕事以外でも散々な…。だから、俺は人間から見れば立派な化物さ」
すずか「違います…武流さんは…」

やさしいな。あいつらみたいだ。

武流「じゃあ、すずか。約束だ。ずっと友達でいてくれ」
すずか「！ …はい。ずっと友達です」

うんうん。やっぱ、女の子は笑顔が一番だな。

武流「じゃあ、また今度な。すずか」
すずか「はい、またいつか」

武流「ただいま」

任務目的を探してたらすっかり遅くなった。しかも見つかなかつたし；

桃子「あ、お帰りなさい。武流さん」

あれ？ いつもトリオップスのごとく突撃してくるなのはのお出迎えがない？

他にも、美由紀や土郎さんや恭也までいない。

武流「桃子さん。なのはは？」

桃子「それが…いないのよ」

武流「はい？」

え？ だってお昼前（出かける前）は居たし、門限はとつくにすぎてるし…。

また誘拐？；

桃子「土郎さん達に探してもらいにいつてるんですが、いまだに見つからないみたいで…」

武流「わかりました。俺も探してきて見ます」

桃子「お願いします」

というわけで、閉めた玄関のドアをまた開けて飛び出す。いくらか心当たりを探してみたが見つからない。そこに…

武流「！ この感覚、歪みか！」

黒竜王「もしかしたら、あのちびっ子が巻き込まれてるかもしれないな」

っち。だが、他に心当たりもないし、ほっとくわけにもいかない。

武流「まってるよ。なのは！」

5 話（後書き）

ジュエルスオーシャンの設定を少しだけですが載せることができました。

あと、オリジナルのジュエルガイスト（魔物）を応募します。設定や名前を感想に書いていただければ、採用するかもしれません。使わなくてもジュエルガイスト一覧みたいな話を作って載せます。絵も描いていただけると大助かりです。

次はバトルで行きます！
近いうちに出します！ 多分^{ほそ}

6話（前書き）

また時間掛かった；

最近、執筆に時間取れません；

でもがんばります！

それっぽくなってきた6話、始まります。

6話

あう；

武流さんに『勉強してろ』って言われたからではなく、普通に宿題をやるために図書館にきてます。断じて最後に言ってた『遊んでやるよ』を期待してるわけではないんです！

なのは「あ、そろそろ帰らなきゃ」

気がついたらもう門限の週十分前でした。

本を元の場所に戻そうとしたら、車椅子の子が本棚の上に手を伸ばしていました。

借りる本を取ろうとしてるのかな？

なのは「これでいいの？」

本棚の一番上の一冊を取って上げる。

車椅子の子「あ、うんそれや。おおきにな」

ま、まさかの関西弁！？ … あつてた？

なのは「きにしないで。じゃ、私急いでいるから」

手を振って、その場を後にします。

—●—

なのは「にゃ~~~~~！」

やばいやばいの。門限過ぎちゃったの；

あう、早く帰らなきゃ。

それに、ここって公園？ 道間違えたかな？；

キイイ！

なのは「うひゃー！」

び、びつくりなの；

夜にもいろんな動物さんがいるんですね

なのは「は、お父さん達になんて言われるかな…」

辺り真っ暗。

ぶる

なのは「は、早く帰ろうと…」

走り始めた瞬間。

なのは「あ、痛」

あわわ、誰かにぶつかっちゃった。

通行人A「うを！ なんだ？」

なのは「す、すみません； 急いでいたので」

通行人A「あ、いいのいいの。俺と遊んでくれたら許してやるから」

え？

遊ぶ？

通行人B「お、なにこれ？ 小学生？」

通行人C「おいおい、流石にやばくね？」

通行人A「大丈夫だって。ぶつかったお礼だってよ。な？」

え？ え？ な、なにこれ。なんかいきなり囲まれて。

ぶつかったお礼なんてし、知らないの！

それに、なんでこの人達笑ってるの。ぶ、不気味。

い、息が…できない。こ、怖いよ；

通行人AもといヘンタイA「お、なに？ 怯えてんの？」

通行人BもといヘンタイB「はあ、かわいいね」

通行人CもといヘンタイC「はいはい、じゃ脱ぎ脱ぎしよっか？」

なのは「あ、あぐ…」

怖い怖い怖い怖い怖い…周りに人気がないから助けが呼べないし、
息も苦しくなってきたし…；

武流さん、助けて！

首に掛けていたダイヤのネックレスが光ったのは誰も気づかなかった。

ヘンタイA「大丈夫大丈夫。すぐに気持ちよくギャチャ！」

ツバン！ ブシャー——————

!!!!

なのは「え？」

いきなり目の前の人の顔が無くなって…頬に暖かいものがついて…。

ヘンタイB「え？ な、なに？ どうしたツガ！」

ツドパン！ びちゃびちゃびちゃ

少し離れたた人の胴体が無くなったと思ったらなにかが辺りに飛び散った。内臓？；

ヘンタイC「うわ、うわああああッグア！」

ツボ ぐちゃ

奥にいた人の体が縦に潰れた。なんだがわからない物が辺りに飛び散って私の服を真っ赤にする。

なのは「え、な…」

血霧が晴れたそこには、海老さんを成人男性みたいに大きくしたような生物が2匹と人並みの大きさの小さな赤い竜（足がない）が2匹いた。もつと驚くのはその全てが音も無く宙に浮いていた。

鳴き声のようなものをだしたらいきなり人だった物を食べ始めた。助けてくれたんじゃない。食事だ。

あ、に、逃げ、なきや；

大きい海老？ A「キイ？」

眼が合った。

なのは「ああああああああああ！」

走った、気がついたら公園の近くの森に逃げ込んでいた。
むこうも私を追ってくる。
怖い怖い怖い怖い！
眼から涙が溢れる。足が震えて止まろうとする。でも走る。
走らなきゃ殺される！

大きい海老？A「キイイ！」

車ほどの速度で追ってくる。

目の前に木があつたのを右に避ける。

ドカン

避けた瞬間、その木が吹き飛んだ！
また走る。走らなきゃ死んじゃう！

なのは「ハア、ハア…っぐ！」

止まりそうになる足に鞭打って走る。
あ！

ぐしゃ

転んじやった。

ツヒユ

風を切る音がした。

ツドカン

即座に転がる。さっきまでいた場所に大きな海老がいた。
もう、逃げられない。眼が合う。

なのは「あ…」

恐怖で涙が溢れる。
終わった。でも…

???「なのは!」

希望が聞こえた。

――

武流「なのは!」

なのはの目の前にいたトリオップスに力の限りのジャンプキック
をお見舞いした。

ツズドン

見事に吹っ飛んでくれたぜ。あ、甲羅が吹き飛んで中身が見えて
る。グロ；

それはさて置き、なのはの無事を確認する。

武流「なのは! 大丈夫か?」

なのは「う、うん…。ありがとう、信じてたよ?」

武流「おう、その信用に答えに来たぜ」

お姫様抱っこをして、さらに森の奥を目指す。

なのは「？　なんで奥に行くの！？」

武流「他人さんをああゆう風にしたくないだろ？」

なのは「う、うん…。でも！」

武流「大丈夫。お前さんも助かるよ」

なのは「？」

後ろから茂み音が聞こえる。

うわ！　すぐ速度；　結構生きてるほうだな。1年ぐらい。

仕方ない。家の子達を使いますか。

なのはに見られちまうが、魔石の力で記憶消せばすむな。

武流「さてと、どっかになのはを置ける場所っわ！」

なのは「つきゃ！」

ツズガン

すぐ脇を光が走った。奥の岩を粉碎したみたいだ。

まてまて！　今のビームか！？

トリオツプスは確実に使えないが…アルテミオス一（小さい赤い竜）も使えなかったろ！？

どいつが放ったんだ？

ツジユン

武流「うを！」

なのは「あ、あれってビーム！？」

どいつだ！？　他にもジュエルガイストがいるのか！？

特定できないままなのはを降ろしたら打ち抜かれるだろうし…か
といって、両手塞がったままじゃ魔石取り出せないし…。あれ？
これってピンチ？；

片手で担ぐと…担げばいいじゃん。

武流「なのは、ちよつとごめん」

なのは「ふえ？　にやあー！」

うん、傍から見ると人攫いにしか見えんな；

なのは「た、武流さん！　スカートが…！」

うん、ごめん；　顔のすぐ隣だから見えてます；　ほんとごめん
なさい；

ま、これで右腕が使えるな。

右腕を一振りし、仕込まれていたスター・オブ・シェラレオーネ
をその手に収める。

武流「コール！　騎魔　レギノス！」

なのは「え？」

ついでに、なのはは頭が後ろになるように担いでいるので俺が何
をしているのかはまったくわからない。呼び声もなんのことかわか
らんだろう。

ガシャン

レギオンと同じ鎧を着た子供サイズのジュエルガイストが出現す
る。唯一違うのは、持っている武器が剣ではなくランスだといふこ
とだ。

レギオンを“技”のスキルを伸ばさせたのに対し、レギノスは“速度”のスキルを上げている。（もちろん他のステータスも）
茂みからビームがレギオンに向かって射出される。

武流「行け！ レギノス！」

ツバ

ビームは虚空を飲み込んで夜の闇へと消えていく。
レギノスはビームを数センチ単位で避け、駆け出す。
次の瞬間、ビームが出てきた茂みにランスを突き刺す。

ツド ツブシュ

辺りに血が散乱する。
レギノスから、魔術で眼を通して敵を確認する。顔が無くなった口
ードピラードだった。
おそらく、ビームの正体は“ふぁんねる”だったのだろう。
後ろからはトリオップス達が追ってくる。

武流「迎撃しろ！ レギノス！」

ツバ

レギノスがトリオップス達の方に向かったのを見てその場を離れる。

あの程度の奴等ならあいっただけで十分だろう。
ちようどいい所に洞窟の入り口発見！…中は小さかった。

武流「ここでいいかな？ よっこいしょ」

なのは「ん、ありがとう。武流さん…」

ショックな事の連続だからな。元気が無いのは仕方ない。あ、顔に血が付いてる。

ポッケからハンカチを取り出して拭いてやる。

なのは「あ、ん…んん…ふう、ありがとう」

武流「よく走ったな。偉いぞ」

よしよし

なのは「えへへ…」

さて、向こうは終わったかな？ 魔術を使って見ようとすると…

ツブシュ

武流「！ ツグ」

なのは「！ いやー！ 武流さん！ 武流さん！」

つぐ…。

額から血が噴き出した！

骨や脳に異常はなさそうだが…なぜだ！？

いや、原因はわかる。だが、なぜだ！ なぜレギノスがやられた！？

なのは「武流さん！ いや！ 死なないで！」

武流「大丈夫。この程度なら死なないよ。」

やばいな…。うちのレギノスがやられたとなると、緋石眼所持者が強力な長生きのジューエルガイストの2択だな。

どちらにしろ、なのはを守りながらだときついつてこった。

武流「…仕方ない」

左腕の義手から仕込んである魔石、キャッツアイ・ダイオプサイドを取り出す。

すせりが、自分が行けないからと俺に返してくれただ魔石だ。本当なら、相棒と一緒に戦いたいんだが…。

武流「コール！ 破邪鬼 絶影！」

なのは「っひ！」

骸骨を思わせる黒いその姿に巨大な黒マントを羽織った3メートルほどの大きさのジュエルガイストが出現する。

すせりが妹になったとき渡した俺の元相棒。すせりを守ってほしくて渡したんだが、俺を心配して返してくれたんだ。もちろん、任務が終わったら渡すがな！

武流「大丈夫だ、なのは。絶影、すまないがなのはを守っていてくれないか？」

絶影がこくりと顔を動かしたと思ったらなのはを抱き寄せる。

なのは「っきゃ」

武流「大丈夫だよ。こいつは紳士だからな」

なのはを抱えたままマントを自分に被せ、影に沈んだ。これでなのはに危害は無い。

武流「さて、とっとと終わらせるか」

敵を倒すために表に出る。

あ、あう…。

失礼だと思うけど…怖い；

なのは「あ、あの」

ぐるりと絶影さんがその首をこちらに向ける。

うひゃ

うう、やっぱり怖い；

武流さんが紳士とかつて言ってたけど…怖い者は怖いよう；

手だって、強靱な刃を思わせるような指だし…体は細いのに鉄の
ように硬い。いや、鉄より硬いかもしれない。

…武流さん大丈夫かな？；

そう思ったとき…

グルルル

絶影さんが呼んだ気がした。

その手が虚空（地中かな？）を指差すと…

なのは「あ、武流さん！」

武流さんとその周りが見えた。

—●—

ツズガン

武流「うを！」

飛びのいた所が決れる。

武流「こいつは始めて見るな……」

目の前には4メートルほどの大きさの2足歩行のロボットが拳を放っていた。(フルメタ！のベヘモスの極小版だと思ってくれ)
本当にロボットに思えるが、れっきとしたジュエルガイストだ。
…なぜわかったかは…フアンタジーだからだ！

武流「ま、とつとと片付けないとな。お姫様が退屈で眠っちまう前にな！」

右腕の義手からスター・オブ・シエラレオーネを取り出す。

武流「コール！ 兵魔 レギオン！ 水神 ロードピラード！」

レギオン3体とロードピラード3体が出現する。

リンクをしていなかったせいでレギノスがやられた理由がわからない。あの腕力だけが原因じゃないだろうな。

まずは様子見。ま、さっきとは違って俺の視界内での戦闘だ。ちゃんと指示も出せるから、こいつらだけで終わるかもしれないな。
ロボットが拳を振り上げる。

くる！

その拳が振り下ろさようとする瞬間…

武流「！ 全員回避！」

俺の命令でレギオン達がその場を離れる。俺も移動するぜ？

ツズガガがガガガガン

さっきまで俺達が居た場所が陥没する。

なんじゃそりゃー！

明らかに数メートル離れてるのってのに…どんな手品だ？ 指向

性思念攻撃か？

そんな考えをしていたらロボットがさらに拳を振り上げる。

武流「全員回避！ 後、散開してからの全方攻撃！」

指示を出してから俺もその場から避ける。

ツズガガがガガガガン

攻撃が止んだと同時にレギオン達が駆け出し、ロードピラード達が球体を飛ばす。

レギオン達の剣がロボットの体を切り刻む！ …はずなんだが；
硬い； 物凄く硬い； 剣先がちょこつと刺さった程度でびくともしねえ；

レギオン達が即座にその場を離脱。そこにロードピラード達の球体、計12機がくる。

ロードピラード達の唯一の攻撃手段、“ふぁんねる”。本来は球体4機を合わせて1発の魔弾を発射する程度だが、うちの子達は特別修行させてるからな。球体1機だけで極太レーザー（半径10センチぐらい）を打ち出すぜ！ 威力はレギオン達の斬撃の比じゃないぜ！

レーザーが発射されロボットは蜂の巣！ …のはずなんだ；

止められてる； やつに届く1メートル手前で； しかも12発全部；

武流「いやーーーーー！」

うちの子達もいやいやと首を振ってる。

なんだよそれ！ 向こうは離れてても攻撃できて、こっちの攻撃は一切聞かないだって！？ ふざけんな！ このチートゲームだよ！ くそ、どうにかして突破口開かなきゃまずいな；

やつがジェルマスターに使われてるんなら術者を倒せばおしまいなんだが…。だがやつは野良だ。いわば直接やつを倒さなきゃいけない。

：こんなことならグラム借りてくるんだっとな； マルドウークの“不可視の炎”で倒せたんだろぅが； ショック；

黒龍王「なにしょぼくてやがるんだ！」

武流「うお！ びっくりすんな； なんだよ」

黒龍王「よく考える。あれほどの障壁はつてんなら魔力の消費も激しいはずだ。あの攻撃も魔力によるものだと考えればすぐに残量が尽きるはず。短期決戦なら、出し惜しみしなければ障壁も抜ける。

勝機はある」

武流「そりゃあわかってる。だが、あれを逃げ続けんの骨だぜ？」

黒龍王「やつはノロマだ。ランクも高いはずだが、あの障壁に頼ってまるで動こうとしねえ。こっちが本気だせば瞬殺だ」

そうなんだけどな。あれって結構疲れるんだが…。仕方ねえ。いっちょやりますか！

武流「わかったぜ相棒。だが、おまえはおやすみだ」

黒龍王「じゃあとつと勝て。でなければ勝手にやるぞ？」

武流「ノープロブレム！　じゃ、おまえら！　本気出すぞ！」

レギオン達の雰囲気が変わる。

俺も、あれを使うか。

眼を閉じて集中する。

これから行うのはただの殺戮。想像しろ。血の海にたたずむ自分を！

眼を開けたそこには…

ツギン

赤く発光した眼をした自分とレギオン達だった。

光だ。

あのロボットさんを光が包んだ。

そして、光が晴れたときには立っていたのは武流さん達だけだった。

なのは「な、なんだったの？　あれ…」

絶影さんに話しかけようとしたら、視界が明るくなった。

ふう、終わった。

レギオン達も『やつふー！　やつふー！』と、喜んでいる。

武流「ごくろうさん。お前達」

レギオン達を魔石に戻す。

武流「絶影、出てきていいぞ」

影からなのは抱えた絶影が出てくる。

なのは「武流さん！」

武流「おっと」

いきなり突撃してきたよ。よっぽど怖かったのかな？

なのは「大丈夫なの？ 血があんなに出てたから……」

心配してくれてたみたいだ；

武流「大丈夫だ。問題ねえ」

なのは「よかった。武流さん、絶影さん達は一体なんなの？」

武流「そうだな。その前に、絶影、ごくろうさん。戻ってくれ」
なのは「あ、ありがとうございます。絶影さん」

こくりと絶影が首を振って魔石に戻ってきた。

下っ端？「終わりましたな」

なのは「！」

武流「いつもごくろうさん。後片付けよろしく」

下っ端？「はい、わかりました」

森の奥から出てきたこの前の三人組のリーダー格に後を頼む。

下っ端？2「っわ！」

！ 見ればあのロボットが立ち上がろうとしていた。

武流「まだ余力があったか！」

スター・オブ・シエラネオーネを構えようとしたら…。

きい

茂みから動物達が、わんさかでてきた。

ロボットを心配そうに見つめている。

ロボットはその動物達を守るように前に出てくる。

そういうことが。

武流「いいか？」

下っ端？1「問題ないです」

武流「すまなかった。あんた達の住処を荒らしに来たわけじゃないんだ。今から後始末をして帰るから。もう戦う気はない」

…通じたか？；

そう思ったらロボットと動物達は森の奥へと消えていった。

下っ端1「自然を愛している人達の感情から生まれたのでしょうかね」

武流「だろうな。あ、あの死体片付けなきゃ」

下っ端1「それだったら大丈夫です」。もう片付けときましたから。もちろんジュエルガイストの死体も。あとは戦闘の爪痕とその子です」

なのは「！；」

ずっと俺の後ろに隠れてたなのはが俺に対して『助けて』と眼差しを送ってくる。

武流「大丈夫だよ、なのは。ちょっと記憶消すだけ」
なのは「あ…」

なんか、残念そうな顔してるな。ま、嫌な記憶はとっとと消すに限るな。

僕はここに居る♪ 今を生きている♪ 星の…
ツピ

武流「はい、こちら金剛」

???1『久しぶりね、金剛』

武流「今回はメールじゃねえのな； で、何用ですか？」

???1『高町なのはに対しての情報提供を許可するわ』

武流「…おいおい、いいのか？； 一応秘密組織だろ？； この前といい、気前がいいレベルじゃないな」

???1『利用価値があるからよ。もちろん、この前もね』

武流「何に巻き込むつもりだ？」

???1『危なくない程度に巻き込むのよ。それに、その子に死なれたら困るだけ。知識ぐらいいは与えるわ。ただし…』

武流「わかってる； 釘は刺しとくよ」

???1『それはなににより。あなた、うれしそうね？』

武流「ん？ そうか？ ま、なんにせよ、ありがとな」

???1『…』

武流「ん？ どうした？」

???1『！ なんでもないわ。じゃ、切るわね』

武流「？ おう」

ツピ

ふう、いきなり携帯鳴るとかびっくりするわ；

なのは「？；？；？」

あ、怯えていますよ。…かわいいな、子猫みたいで♪

武流「大丈夫。上司の許可下りたから記憶消去はなしだ。帰ったら教えるよ」

なのは「？…うん！」

さて、それじゃあ帰りますか。

下っ端？「あ、まってください」

武流「なんだ？」

下っ端？「そのまま帰すんですか？」

…あ

なのはの服は血で真っ赤だった。

なのは「・・・」

武流「どうすつかない； たしかに、このまま帰したら大変だ；」

下っ端？「と、いうわけで、これなんかいかがですか？」

！　そ、それは！！

なのはの服！（現在と同種にて使われたような懐かしさを思わせる服！）

武流「どうしたの？； それ」

下っ端？1「こんなこともあるつと、用意しておきました」

まじか；

下っ端？2「こちらへどうぞ」

声からしてあの子も女か。

武流「着替えてきな、なのは」
なのは「うん」

とてとてとてとて

猫みたい。

武流「ありがとうな。助かるよ」

下っ端？1「いえいえ、ではこれにて。着替え終わったら帰っていいですよ」

上から目線； そう、それは役立たずを追いつがごとく；
なのはが戻ってきたので、その手を取って帰る。

――

まったく。お礼を言われるとは思ってもしなかったわ；

???1「でも、うれしかったな」

・・・

「???1」？ ああ、ちゃんと言っておいたわ。でも、なんであの子なの？」

・・・

「???1」そう、まだ時間が掛かるのね」

「くり

「???1」全ては、この世界のために」

6話（後書き）

ふう、無事に終わったぜ。

いろいろオリ設定ぶち込んだわ。

質問は感想に書いてください。

ネタバレすれすれで答えます。

ではまた次回ノシ

7話（前書き）

やっと書けた；

よし、

とくに見せ場はないけどプロローグ編最終回の7話、始まります。

7話

7話

武流+なのは「ただいま」

桃子「なのは！」

なのは「みゃ！」

玄関をくぐると、桃子さんがなのはに突撃してきた。

桃子「なのは！ なのは！ なのは！」

なのは「んんん！ 苦しいよ、お母さん！」

桃子さんに胸ホールドを食らって苦しそうなのは。…うらやましいと思ったのは内緒だ。

桃子「だって、物凄く心配したのよ！？ よかった、無事で本当によかった」

なのは「お母さん…心配させてごめんなさいなの」

うんうん、よかったよかった。

桃子「さ、ご飯にしましょ。士郎さん達も戻っているから」

なのは「はい。行こう、武流さん」

武流「おう」

—●—

食事後。リビングで、なのはについてのお話。

士郎「さて、なのは。どうして門限に帰らなかった」

なのは「えっと、図書館で宿題してたの」

恭也「だったら門限前に帰れたろ？　そもそもなんで図書館まで行ったんだ？」

なのは「だって、わからないところがあったから…。皆出かけてていなかったし…」

一同「……………」

ああ、そうだな。桃子さんと美由希は買い物。俺と恭也と士郎さんは月村家にいったから…。うん、なのは以外誰もいないな；

士郎「家族会議終了」

武流「はや！」

士郎「まあ、今回はなのはを1人にした俺らも悪いんだ。各自反省以上」

…いいのか？　それで；

—●—

なのは「じゃあ、お話聞かせてくれますか？」

武流「OK。で、まずは何から聞きたい」

なのは「えとね…」

に
少女説明中・・・

なのは「そうなの…。ジュエルガイストさん達も生きるために人を襲っているんだね」

武流「そうなるな」

ジュエルガイストの存在を否定しないなんて珍しいな； 根元が
らやさしいな。

なのは「じゃあ、さっき言ってた武流さんの子達は人を襲わなくて
いいの？」

武流「ああ、魔石に入っていると、主に持ち主のなんだが、自然と
周りの生物の感情が流れてくるんだ。ジュエルガイストはあくまで
感情が食料だ。だから食事の必要はない」

なのは「…魔石つてのを見てもいいかな？」

武流「ん？ おお」

右手の義手からスター・オブ・シエラレオーネを取り出し、なの
はに見せる。

なのは「うわゝ、きれいだねゝ。でも、この大きさは始めてみるな
ゝゝ」

武流「だろうな。ざっと350カラットはあるぜ」

なのは「・・・？ とにかくすごく大きいってのわかったの」

ああ、カラットの意味がわからなかったか。

武流「ま、こんなところかな？ 説明は」

なのは「信じられないことばかりだけど…あれは夢じゃないんだ
よね？」

武流「まあな。怖くなったか？ 俺達のこと」

なのは「そんなことはない…って言えば嘘になるな。でも、いつぱ
いお話すればきっと、怖いって感情もなくなると思うんだ」

…きっと、物事を中心になるだろうな。この子は。

武流「そうだな。じゃあ、俺の武勇伝でも聞くか？」
なのは「うん！」

その晩は、俺の武勇伝をおもしろおかしく話して過ごした。

—●—

武流&なのは「「おふあよ」」
桃子「おはよう、二人とも。あら、すごく眠たそうね？」
なのは「うん、ちよつとね…」

昨日、なのはに武勇伝を聞かせてたら深夜4時を過ぎてた；
気づいて寝始めたら…2時間しか眠れなかった；

武流「ほんと、寝不足だ」

がた

恭也が立ち上がる。

恭也「なのはにはまだ早い！」

なのは「なんのこと!？」

武流「安心しろ。小学生は相手にしないから。」

美由希「え!？　じゃあ、中学生は相手にするんですか!？」

武流「なんでそうなる!」

まあ、1度だけありますが；

士郎「賑やかだね」

桃子「ええ。こんな生活がずっと続けばいいですね」

フエイト「八尋、早く」

八尋「こらこら、そんなに急ぐと転ぶぞ」

今日は、海鳴市という地球の街に八尋と一緒に出かけにきています。

アルフも誘ったんだけど、「二人で行ってきな」と言ってお留守番。

お母さんも、大事な研究があつて時の庭園からでられないって言うてた。

でも、八尋と一緒に出かけるのは初めてだからうれしいな♪

・・・あれ？

フエイト「八尋？」

周りを見渡してみても、八尋がいない。

・・・そうか！ はぐれたんだ！

フエイト「まったく。八尋ったら」

八尋「まったく。フエイトは…」

フエイトが迷子になったので、プレシア達に買っていく予定のケーキは後にして迷子探しの途中だ。

しかし、フエイトとプレシアは最近よく話し合つようになってきた。

なにかと理由を付けては一緒にいさせる機会を多くしたりなどの努力の賜物だろうな。

そうそう、笑顔も見erようになった。やはり女性は笑ってるときが一番だな。

八尋「…あいつらを見ていると、昔の自分を思い出してしまっな」

愛する者のために全てを捨てて走ってきた。だが、結果的に自分は彼女のことをなにも知らなかった。彼女がただ、自分と暮らしていればよかったと言ってくれるまでは…。

八尋「あいつらにもそんな人生は歩ませたくないものだ」

まあ、まずはフェイトを見つけなければな。

――

フェイト「あの〜」

武流「ん？ なんだい？ 売り物ならそこに置いてあるけど」

ツインテールの金髪の子が品を挟んでいきなり声を掛けてきた。値下げならお断りだ。これ以上安くできるか；

フェイト「お母さんにプレゼントしたいんですけど、どの宝石がいいんでしょうか？」

あ、宝石言葉を聞きたかったのか。

お母さんか…。

武流「お母さんに…か。じゃあ、このネックレスがベストだ」

そう言って、透明感があり中に黒模様が入っている宝石と白い宝石が付いたネックレスを指差した。

フェイト「これですか？　どんな宝石なんですか？」

武流「2つ付いてるが、1つはボツワナアゲートっていう宝石だ。アゲートっていう宝石の一種だ。宝石言葉は喜び、母親、守護、再生、成長、安心だ。ただな、大事なのは宝石言葉だけじゃねえ。アフリカだと母親の身や心を守る宝石と言われているんだ。もう1つはムーンストーンだ。月の石って意味だが本当に月の石じゃないかな；　宝石言葉は女性らしさ、感受性、喜び、調和、決断力だ。これはマイナス思考を取り除く効果があつてな、簡単な話、悩み事を解決する宝石だ」

こんなところだな。母親にプレゼントしたい人のために作ったネックレスなんだが；　ちよつと高くなってしまったのがな；　

フェイト「うん。これならお母さんにぴったりかも。これください」
武流「はいよ。だけど高いぜ？　；　お譲ちゃんに買える額じゃ；　；　」
フェイト「お金ならあります。はい」

；　海鳴市の子供は全員金持ちか？　；　

武流「；　そうだな。お譲ちゃん」

フェイト「なんででしょう？」

武流「おまけ」

ばいっと、商品の1つを投げてよこす。

フェイト「これは？」

武流「イエロージャスパーっていう宝石だ。ま、もっていきな。御代はただでいいから」

フェイト「！　ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げて人ごみへと消えていった。

なんとなく、あの宝石が会いそうだったから渡してしまった；

ま、売り上げは大黒字だから問題ないけどな。

――

フェイト「あ、八尋――」

八尋「フェイト！　どこにいつていたんだい？　いきなりはぐれたから心配したじゃないか」

フェイト「ごめんなさい。でも、お母さんにいいプレゼントが見つかったから」

八尋「ほう、それはよかったな。きっとプレシアも喜ぶだろう。さ、アルフ達にもお土産を買って帰ろうか」

フェイト「うん」

そして、月日は流れていく。

7話（後書き）

うん。

明るくなったフェイトの喋り方がわからない；

今回でてきた宝石についてはいろんなサイトを参考にしました。最後に出てきた”イエロージャスパー”は調べてみてください。武流が言っていた「合いそう」の意味がわかると思います。

これでプロローグ編は終わりです。

次回からやっと原作介入です。

さてさて、原作アニメを見てこなければ；

ではまた次回ノシ

番外編1（前書き）

…すみません；

次回、原作介入とか言っておいて番外編です；
遅くなった上にこの状況、ごめんなさい；

では、布石の番外編1、始まります。

番外編 1

なのは「おはよう。すずかちゃん。アリサちゃん」

すずか「おはよう。なのはちゃん」

アリサ「おはよう。なのは」

玄関からでてきて、なのは様が久しぶりにお嬢様たちの名前を呼んでおります。そして、お嬢様たちもなのは様の名前を呼びます。

鮫島「おはようございます。なのは様」

なのは「おはようございます。鮫島さん」

礼儀正しくわたくしめにも挨拶してくれました。

なのは「じゃあ行ってきます。武流さん」

武流「おう、いつてらっしゃい。きいつけてな」

なのは「はい」

玄関に立っていた青年がなのは様を見送る中、なのは様を車に乗せ、学校に向けて出発させます。

なのは「久しぶりの学校だね」

すずか「うん。秋休みはあまり遊べなかったからね」

アリサ「二人とも、ちゃんと宿題やった？」

なのは「&すずか」「もちろん、できてます」

アリサ「ならばよし。これでまた遊べるね」

なのは「&すずか」「うん」

アリサ「&すずか」「で、なのは」

なのは「ふえ？」

アリサ&すずか「「なんであの人がなのは（ちゃん）の家に居て玄関で見送りしているの！！？」」

なのは「みゃー！；」

アリサ「さあ、白状しなさいなのは」

すずか「なんで私達を助けてくれたあの人がなのはちゃんの家にいるの？」

なのは「えとね、かくかくしかじか（マンガもアニメも便利だけど小説も便利だね）」

アリサ「なるほど。あんた、間違った事してないでしょうね？」

なのは「なんのことかわからないよ？；」

すずか「ずるいよ、なのはちゃん！ 私だって、まだお友達どまりなのに！」

なのは「だからなんなの！？；」

アリサ「まってなのは。すずか、それどうゆうこと？；」

すずか「……………ぽ」

なのは&アリサ（ズガンー！！）

なのは「ちょ、ちょっとすずかちゃん！ あの時なにやってたの！？」

アリサ「あの時！？ なにやってたの！？」

すずか「普通にお茶会だよ！；」

キヤーキヤー

鮫島（今日も元気ですな）。昔に比べてさらに元気になられた。誘拐から守ってくれたという青年のおかげですかね？ 一度お話ししてみたいですな）

豪華な車は秋休み明けの学校へと向かう。

なのは「じゃあすずかちゃん、アリサちゃん。また明日ね」
すずか「ばいばい。なのはちゃん」
アリサ「またね」

これから習い事に行くのでなのはと別れた私達。
塾に向けて途中まですずかと一緒に歩く。

アリサ「しかし驚いたな。あの人がなのはの家にいるなんて」
すずか「本当、羨ましいよね。ああ、私が先に大橋に行ったら私の家に来てくれたかな？」

アリサ「そうだね・・・」

すずか「？ どうしたの？ アリサちゃん」

アリサ「ん。なんでもないよ。・・・すずか」

すずか「なに？」

アリサ「私と居て楽しい？」

すずか「な、なに突然言ってるの！？ 楽しいに決まってるじゃない」

アリサ「そ、そうだよね・・・」

すずか「一体どうしたの？」

アリサ「ううん。なんでもないんだ・・・」

???『悲しいのだ』

アリサ「え？」

すずか「？ どうしたの？」

アリサ「なにか聞こえなかった？」

すずか「うん。なんにも」

???『悲しいのだ』

アリサ「やつぱり！ 幻聴じゃない」

すずか「ふえ？」

アリサ「こっちだ！」

すずか「あ、アリサちゃん！」

道の脇の茂みの奥に向かって走り出す。なんで走ってるかはわからなかった。

後ろからすずかが追ってくるのがわかる。

????『悲しいのだ』

アリサ「あつた！」

土の中から金の装飾が生えていた。それを掘り起こす。指先ほどの大きさのアオイライトを中心に作られたネックレスだった。

アリサ「きれい」

ただ、そのネックレスは不気味なほどに綺麗だった。不気味なほどに…

????『悲しいのだ』

声はそこから聞こえた。

アリサ「な！ 宝石が喋るなんて…」

????『悲しいのだ。友が自分を愛してくれているのか』

アリサ「え…」

それは自分の悩み。

「??? 『わからんだ。遊んでくれているのは上辺だけではないのか』」

前から、今でも思い続ける悩み。

アリサ「違う！　すずかは私と居るのが楽しいって…なのはだって…」

「??? 『思ってしまうのだ。自分は笑われているだけではないのか』」

その言葉が鍵となった。心を閉じる扉の…

アリサ「あ…」

音が聞こえた。

――

もう。アリサちゃんったらいきなり走り出すんだもの。びっくりしちゃいました。

すずか「あ、いた。アリサちゃん、どうしたの？　急に走り出して」
アリサ「…違う…私は…笑われて…楽しいって…」
すずか「？　アリサちゃん？」

返事が無いから肩に手を置いてみた。そして…

ギン

すずか「！　アリサちゃん…その眼…」

赤かった。血のように赤く、太陽のように光っていた。

アリサ「すずか…」

すずか「アリサちゃん…どうしちゃったの…」

アリサ「私は…笑われてない…楽しいって…上辺じゃ…」

???『思っただ。ならば、示してみようではないか』

すずか「!?!」

アリサちゃんがいつのまにか持っていたネックレスから声が聞こえた。

その中に引きずり込まれそうな綺麗さ、不気味さがそれにあつた。まさか、武流さんが言ってた魔石!?　なんでアリサちゃんが…

アリサ「コール。侵食鬼　インベーター」

侵食鬼『キョー——————!!——!!』

すずか「!?!」

アリサの掛け声と共に、アリサを包み込むように黒い靄が辺りに噴出した。

すずか「アリサちゃん!?!」

アリサ「・・・」

返事はなかった。

生気の無い瞳が虚空を見つめていた。

侵食鬼『思いついたのだ。主がこの子を友として愛しているのならば、共に我が腹に収まってくれるだろう？』

すずか「!;」

【武流「ジュエルガイストは感情が最も高い生物、人間を食う」
その言葉が脳裏に浮かぶ。

食われる； 私だけでなくアリサちゃんも!;

すずか「武流さんには呼べっていわれてたけど…。そんな暇はない…。なら、自分で!」

ッポ

吸血鬼としての莫大な身体能力で地を蹴る。

すずか（アリサちゃんをあれから引きずり出せば!）

触手状になった黒い靄が降り注いでくるがその全てを避ける。

武流さんが言ってた長寿ジュエルガイストじゃない！ これならアリサちゃんを連れて逃げ切れる！

コンプレックスを抱いていたこの力に、今だけは感謝した。

すずか「はああ!」

バン

ズガガがガガが

跳躍した後の場所に触手状の靄が突き刺さる。
アリサの周りの靄に向かって蹴りを放つ。

すずか「やああ！」

ドパ

黒い靄が吹き飛び、アリサが地面へと落下する。

すずか「アリサちゃん！？」

地面に叩きつけられる直前でなんとかキャッチする。

すずか「つく」

そのままアリサを抱えて逃げ出そうとする。だが…

すずか「！　アリサちゃん！？」

アリサがいきなり抱きついてきた。この状態では走って逃げられない。

すずか「アリサちゃん！　今はこんなことしてる場合じゃ…」
アリサ「どこにいくの？　すずか。やっぱり私のこと、嫌い？」
すずか「！　そんなわけないでしょ！」

今のアリスがジュエルガイストに操られているとはすずかは気づかなかった。

そして、

すずか「！　しまった！；」

触手状の黒い靄に捕まってしまった。

本体である場所が大きく口を開けたように見えた。

すずか「あ……」

食われる…。

そう思った。

そして黒い牙が…

ザシュ　ブシャー――――――

栗色髪の女性「ふう」

今日は休暇をもらったので、ちょっとした買い物に來てます。
今は商店街で今晚の材料を探してます。

栗色髪の女性「あ。この鶏肉安い」

肉屋の店長「お。いらっしやい。100g90円だよ」

栗色髪の女性「じゃあ、この鶏肉200gください」

肉屋の店長「あい、まいど！」

ずしり

ずしり？

肉屋の店長「姉ちゃん、美人だからおまけしたよ」

栗色髪的女性「わあ。ありがとうございます」

肉屋の店長「しかし、姉ちゃん見ない顔だね。引っ越してきたのかい？」

栗色髪的女性「いえ。仕事で出張してきてるんです。知り合いに泊めてもらって」

肉屋の店長「そうかそうか。仕事がんばれよ」

栗色髪的女性「ありがとうございます。では」

ん、このお肉をどうやって処理しようかな？

まさかサーブスしてもらえとは思わなかったので、予想以上の量になってしまった。

???2『だから100gにしときなさいって言ったのに。あなたはモテるんだから』

栗色髪的女性（ええ、モテないよ。実際、高校の時はいじめの対称だったし）

???2『眼鏡かけて三つ編なんかしてればいじめも受けるわ。今みたいにコンタクトでロングにすれば嫉妬受けるだけですんだのよ？』

栗色髪的女性（それってどっちにしろ、いじめを受けることに変わりなくない？）

だが確かに、今の彼女は出ているところは出ていて腰はスラリと細い。

道歩く人は皆、足を止めて見とれている。

唯一、肩に背負っているバットケースが違和感であるが、気にしている者はいない。

???2『ね？』

栗色髪の女性（ううゝ； 恥ずかしいよゝ；）

ピクン

栗色髪の女性（！ この気配、ジュエルガイスト！？ でも歪みはないし…それにこんな真昼間に…；）

???2 『ジェルマスターがいるんでしょう。とにかく放っておけないわね…行くわよ！』

栗色髪の女性（うん！）

その眼が紅く光ったことに気づいた者はだれもいなかった。

—●—

栗色髪の女性「！ あれね…」

あの場からオリンピック選手顔負けの速度で走ってきて、自然公園の森の奥にきた。

眼前に少女二人を捕まえている黒い靄が存在している。それがジュエルガイストだろう。

???2 『いくわよ！ 真珠^{しんじゆ}！』

真珠「うん！ アル！」

鶏肉が入ったバックを地面に置き、胸ポケットの中から術式が彫られたコインを取り出し、空に投げる。

“人払い”の魔術が発動する。

真珠（これで半径2キロメートルの人は外にでてくれた。鏡面界転移ができれば物凄く助かるんだけどね； 今度、武流さんに教えて

もらおう)

さらに懷から魔石“無銘の華”を取り出す。

真珠「コール！ 薔薇姫 アルラウネクイーン！」

薔薇姫『はああああ！』

呼びかけと共に、美しい美女が現れた。ただ、やはりジュエルガ
イスト。その髪と肌は植物のように艶のある緑色だ。足は付け根の
部分からつるが無数に伸びており、なぜか途中から大きくなってい
た。

薔薇姫『いきなさい！』

無数にあるつるのうち、数本が伸びて黒い靄を切り裂いた。

ザシュ ブシューーーーーー

薔薇姫『あら、実体が無いと思ったけどあるのね。』

黒い靄が切り裂かれたので少女達が落ちてくる。
つるで器用にキャッチし、真珠に渡す。

薔薇姫『気絶してるね。真珠！ この子達、頼むわよ！』

真珠「うん！」

黒い靄は分が悪いと思ったのか、飛んで逃げようとする。

真珠「！ アル！ 空に逃がしちゃダメ！ 人払いの魔術が発動し
てても森を出ちゃったら遠くの人に見られちゃう！」

薔薇姫『わかってるわよ！ それ！』

薔薇姫のつるが黒い靄を捕らえて動けなくする。

薔薇姫『そら、なぶり殺しだよ！』

余ったつるで黒い靄を貫く。

ツトツトツトツト バシャシャ

アリス「っがふ」

少女の一人が血を吐いた。

真珠「！ だめ！ 薔薇姫！ この子がジェムマスターだわ！」

薔薇姫『な！？ だつてさっきそっちの子と一緒に捕まって……くそ、操られてるいるのか！』

真珠（どうする； このままじゃ、あのジュエルガイストに止めがさせない； だからといって、このまま放置できないし；）

薔薇姫『きゃ！』

真珠「！」

見れば、薔薇姫のつるに捕まっていた黒い靄が小さくなっている。
いや、つるに侵食しているのだ。

真珠「薔薇姫！ 切り落として！」

薔薇姫『っぐ、この！』

ツガ

躊躇することなく、薔薇姫は侵食されたつるを切り落とした。

真珠「うぐー！」

真珠の体に激痛が走る。

薔薇姫が受けた痛みとダメージが返ってきたのだ。

黒い靄は、浸食したつるを中心に形態を変えてきた。

薔薇姫「！なるほど……」

真珠「な！」

そこには薔薇姫と瓜二つの薔薇姫がいた。

違うところはすべてが黒く塗りつぶされており、薔薇姫が切り落としたつるは元のままだった。

薔薇姫「仕方ないわ。そのこが死なない程度にこいつをなぶり殺す！」

真珠「そんな！」

薔薇姫「だけど他に方法なんてないでしょ！？」

真珠「でもせめて、動きを封じれば時間は稼げる！その間にあの子とジュエルガイストのリンクを切る魔術を行えば……」

薔薇姫「なに言ってるの！また侵食されるがオチよ！動きを止めるなんて不可能よ！」

真珠「それは……。あつた！」

薔薇姫「！なら私はどうすればいい」

真珠「あいつの動きを一瞬でいいから止めて。そして……」

薔薇姫「……なるほど。わかったわ。それでいきましょー」

薔薇姫が黒い靄に向けて突進する。

それに反応して黒い靄がつるで反撃してくる。

薔薇姫『当たり前くはないわね。っは』
侵食鬼『!』

さすがに黒い靄も驚いたろう。あの容子で薔薇姫が跳んだのだから。

真珠「はあ!」
侵食鬼『?!』

薔薇姫に気を取られているところを真珠は見逃さなかった。
黒い靄の周りにコインをばら撒く。つるとつるの間の隙間などに
入り込んで奥へと落ちていく。

真珠「凍てつけ!」

起動キーとなる言葉が発せられ、コインに彫られていた魔術が発
動する。

ピキン

侵食鬼『!?!』

薔薇姫を模したその体の下半身が周りの大気を巻き込んで凍りつ
いた。

薔薇姫『余所見していいのかしら?』
侵食鬼『!』

跳んでいた薔薇姫が重力によって地面へと落下する。
落下地点は黒い靄の頭上。

薔薇姫『っは！』

落下しながらつるを黒い靄に降ら…さず地面へ突き刺し、そのまま落下軌道を調整して元の落下地点から遠くへと着地する。

黒い靄は薔薇姫の行動が理解できなかった。

真珠「薔薇姫にも言われたでしょ？ 余所見しちゃだめですよ？」
侵食鬼『！』

ババババ

凍ったつるの上に立ち、こちらを見つめている真珠に気づいた黒い靄は、凍らなかった数本のつるで真珠を串刺しに…できなかった。いつのまにか、真珠の手には細身の木刀が握られており、その木刀で残ったつるを全て切り落とされたのだから。

真珠「お休みなさい」

真珠はそういい残しバック宙返りをしながら後退する。コインを撒き散らしながら。

侵食鬼が最後に見たのは、真珠の不気味な笑顔と、紅く光る緋石眼だった。

—
—
すずか「ん」

真珠「あ、起きちゃった?」
すずか「ふえ?」

すずかが眼を覚ますと、自分の額に手を置いている女性の顔が見えた。

すずか「あ、あなたは?」

真珠「私? うゝん、通りすがりのお姉さんじゃだめ?」
すずか「?」

気絶(寝ていた)してたのだ。起きたばかりでこの様な言葉を言われてもなにも理解できないだろう。

だが、すぐに先程の出来事を思い出す。

すずか「あ、あの! ここに金髪の女の子がいませんでしたか!」
「

真珠「え? ああ、その子なら君の横で寝てるよ」

すずか「へ? あ...」

アリサはすずかのすぐ横で気持ちよさそうに寝ていた。

すずか「よかった」

真珠「寝てるだけだから。そのうち眼、覚ますよ」

すずか「...あのゝ、もう1つ聞きたいんですけど」

真珠「なにかな?」

すずか「黒い靄がありませんでしたか?」

真珠「んゝ、わたしが来たときはそんなのなかったよ? 夢でも見てたんじゃないの?」

すずか「...いいえ、夢じゃありません。だって、あなたがそのネットレスを持っているから」

すずかは、真珠が持っている少し汚れたネックレスを指差した。

すずか「それって魔石っていうんです。すごく危ないので手放したほうがいいですよ？」

真珠「！」

ギン

すずか「きゃ！ むぐ」

すずかの言葉に真珠は危機感を持った。この子がなぜ魔石のことを知っているのか。

数年前にシンジケートを裏切った者達の残党かもしれないと思った真珠は、すずかの口に手を当て頬を挟むように掴み、もう片方の手を首に当て押し倒す。

すずか「うぐ」

そのまま腹、子宮の真上に膝を乗せる。

真珠「ごめんなさい。あなたがなぜそれを知っているのか聞かなくてはいけないわ。まあ、話の内容によつては私の気持ちも変わるかもしれないよ？ 答えて、あなたは誰からその言葉を教えてもらったの？」

口を掴んでいた手を離し、首を掴んでいる手に脅し程度の力を入れながら真珠は問う。

緋石眼所持者だ、とすずかは確信した。この力と太陽のように光るその眼がなによりの証拠だ。

すずか（緋石眼所持者なら、もしかしたら武流さんの仲間かもしれない）

真珠「答えて。じゃなきゃ…」

ぎゅう

首を掴んでいる手にさらに力が加わる。

すずかはさすがの思いで答える。

すずか「た、武流、さんに…」

真珠「え？」

首を掴んでいた手の力がいつきに緩んだ。

すずかは逃げようとしたが、お腹に乗つけられている膝のせいで動けなかった。

すずか（やつぱり、武流さんの仲間？）

真珠「武流さんの知り合い？」

すずか「はい。数ヶ月前に教えてもらったんです」

真珠「…名前教えてもらっていいかな？…」

すずか「月村すずか、です」

真珠「…みゃーーーーー！」

すずか「ふえ！ ど、どうしたんですか！？」

いきなりすずかの上からどいたと思ったら、大量の涙を撒き散らしながら暴れたした。

真珠「ど、どうしよう； オッペンハイマーさんの交流相手に手えだしちゃった； そもそも、こんな女の子に緋石眼の力使っなん

てゝ；」

すずか「あ、あの。気にしてませんよ？」

真珠「ぐす、…ほんと？；」

幼さを残す顔に涙を浮かべて懇願するような下から目線、これをやってるのが美女なのだ。男でなくても

すずか（か、かわいい／＼／ 綺麗な人って思ったけど、かわいさが目立つな／＼／）

と、思ってしまうすずかであった。

すずか「本当ですよ。それに、助けてもらったみたいですし、ありがとうございます」

真珠「ええと； はい、どういたしまして」

くすくすくすくすくす

薔薇姫『真珠。楽しんでるところ悪いんだけど、私を出してくれないかしら』

真珠（え？ なんて？）

薔薇姫『そこのお譲ちゃんとお話がしたいの』
わかった

真珠

真珠「すずかちゃん」

すずか「なんででしょう？」

真珠「ちよつと君に会いたいわって人がいるんだけど…会ってくれる？」

すずか「？ いいですよ」

真珠「じゃ、コール。薔薇姫 アルラウネクイーン」

呼び声と共に薔薇姫が現れる。

すずか「わあ、綺麗」

薔薇姫「うお！ そういつてもらえるのは久しぶりだね」

すずか「私にお話って？」

薔薇姫「君、ヴァンパイアでしょ？」

すずか「！」

薔薇姫「やっぱり！」

抱きついた。

すずか「わひゃ！」

薔薇姫「なつかしいな。久しぶりに同族に会えたよ」

すずか「え、じゃああなたも吸血鬼？」

薔薇姫「ランクは君よりすぐく上の存在だけどね。ジュエルガイストになってからは吸血しなくて生きていられたから。懐かしい匂いに誘われてね」

すずか「…（うぎゅ／＼／＼）」

真珠（うわ、親子みたい）」

そんなこんなで時間がすぎた。

アリサ「う、まさかあんなところで寝てしまうなんて； 塾、完全にサボりじゃん」

すずか「あはは、仕方ないよ。なにがあつたか二人とも覚えてないんだから」

すずか（アリサちゃんの記憶は魔石の力で消しといたって真珠さんが言ってたから問題はないと思うけど…。でも、アリサちゃんがあ

んな悩み持ってたなんて； あんなこと二度と思わせないようこれからもういっぱい遊ぼう）

真珠（どうだった？ 久々に同族に会えた気分は）

薔薇姫『ものすごく嬉しいよ。あの子は人として生きてきたみたいだから、ちよつと違うんだけどね。でも、本当に嬉しかったよ』

真珠（それはよかった。さ、帰ろうか。明日も早いから）

薔薇姫『だね。…ねえ、真珠。今日も一緒に寝ていいかしら？』

真珠（あはは。アルは甘えんぼさんだね）

時は静かに進む。

番外編 1（後書き）

やばいよ；

無印編の原作介入してからの話がまったく浮かばない！；

最終話とかもう妄想で完成しているというのに！

A・S編の話もだいたいまとまってるのに！

ストライカー編もできてきてるのに！

なぜだ！ なぜ無印編の話が浮かばない！

早く考えねば！

というわけで、また次回に ノシ

8話（前書き）

遅くなつてすいませんでした！；

先週学校行事があつたので、忙しかったもので；
遅れた分、いつもより字数多いです。

では、原作介入にて原作の1話に該当する8話、始まります。

8話

朝6時 海鳴市に朝日が昇り、高町家のカーテンが閉まった窓に光が差し込む。

走るゝ走るゝ ♪ 俺ゝたゝち ♪

ピンク色の携帯から、女の子が聞く歌なのかわからない名曲が流れる。

なのは「うゝんゝ」

もぞもぞ

カチャ ピ

なのは「にゃゝ？」

バサリ

高町家が次女、高町なのはが目覚める。

キョロ

客室、今は居候の葦原武流が居座る部屋で目覚める。

ベットの上、なのはの隣には未だ眠り続ける青年、葦原武流が眠っていた。

半裸（上半身裸）で。

なのは（なんで寝るときは裸なのかな？／＼／＼）

そんな男の寝室に、こっそりと添い寝に来るのもどうかと思われるがな。

なのは（着替えてこなきゃ）

そう思って、なのははベットを降りて（掛け布団などは掛けなおして痕跡を消す）武流の部屋を後にする。

自分の部屋に戻ると、タンスから学校の制服を取り出し着替える。着替え終わると、寝巻きを綺麗に畳んで決まった場所に置く。自室を出て、再度、武流の部屋を訪れる。

コンコンコン

なのは「武流さん、朝ですよ」

ノックをして声を掛ける。返事はない。

なのは（あつたらあつたで困るんだけどね）

彼女は毎朝、この為に早起きをするようになった。

返事の無いドアの取っ手を捻り、中へと入る。

もちろん、ターゲットは寝ている。

近づいて…

なのは「武流さん、朝だよ。朝ごはん食べそびれちゃうよ?」

ゆさゆさと、武流の体を揺さぶるが、一向に起きない。

なのは（仕方ない。いつものごとく最終手段）

ばさり

武流「うを…」

掛け布団を取り除くとうめき声上がる。
そのまま、窓に向かって移動する。

なのは（とどめの…）

カーテン全開である。

暗かった部屋がいきなり明るくなり、寝人のまぶた越しの目を刺激する。

武流「うう…まぶし…よ、なのは…」

なのは「眩しくしてるんです！ 早く起きてください！」

と言いながらまたまた、武流の体を揺さぶる。

武流「わかった、わかった！ 起きるからどいてくれ！」
なのは「はい」

これが、ここ1年間の彼女の朝の日課だ。

私、高町なのは。私立聖祥大附属小学校3年生。

ここ、高町家においては3兄弟の末っ子さんです。

なのは「おはよう」

桃子「あら、なのは。おはよう」
士郎「おはよう、なのは」

この2人が、私のお父さんとお母さん。

桃子「はい、これ。お願いね」
なのは「はい」

そう言つて、数個のコップが載つたお盆を渡される。それをリビングのテーブルまで持つて行き、コップの1つをお父さんに渡す。

士郎「ちゃんと一人で起きられたなー。偉いぞ」

こちら、お父さんの高町士郎さん。駅前の喫茶店、翠屋のマスターさんで一家の大黒柱さん。

桃子「朝ごはん、もうすぐできるからね」

で、お母さんの高町桃子さん。喫茶、翠屋のお菓子職人さん。綺麗で優しい、なのはの大好きなお母さん。

ちなみに、翠屋は、駅前商店街の真ん中にあるケーキとシュークリーム、自家売店工が自慢の喫茶店。学校帰りの女の子や近所の奥様達に人気のお店なの。

なのは「お兄ちゃんとお姉ちゃんは？」
士郎「ああ、道場にいるんじゃないか？」

――

美由紀「っは、ふん、でえい、ふん」

がら

家の離れの道場の引き戸を開ける。

なのは「お兄ちゃん、お姉ちゃんおはよう。朝ごはんだよ」

恭也「おはよう」

美由希「おはよう、なのは」

なのは「はい」

そう言いながら、持ってきたタオルをお姉ちゃんに投げ渡します。

美由希「ん、ありがとう」

この二人が、私のお兄ちゃんとお姉ちゃん。

恭也「じゃあ、美由希。今朝はここまで」

お兄ちゃんの高町恭也さんは、大学一年生。お父さん直伝の剣術家で、お姉ちゃんのお師匠様。

美由希「はい。じゃあ、続きは学校から帰ってきてからね」

で、お姉ちゃん。高町美由希さんは、高校2年生。

— ● —

恭也+美由希「おはよう」

士郎「おお、おはよう」

桃子「おはよう。朝ごはんできたから並べて」

3兄妹「「はい」」

テーブルの上に、台所に並べられた朝ごはんを並べていきます。
そこへ…

武流「おはよう！」

恭也「おはよう、武流」

美由希「おはよう、武流さん」

士郎「おはよう、武流君」

桃子「おはよう、武流さん」

なのは「おはよう、武流さん」

そして、居候の葦原武流さん。1年前、誘拐されそうになった私とその友達を助けてくれた人。ちよつと抜けた所はあるけどかつこよくて強い、なのはの大切な人。

旅の休息として1年前から高町家に居候している暇人さん。その実体は、秘密ジュエリーシンジケート・我がカルテルの派遣ジェルマスターさん。海鳴市に散らばっているという特定の魔石、21個の回収のために来ているのですが、未だに見つかからないようです；それでも働きながら任務をこなすしっかり者さんです。あ。この事を知っているのは私だけです。

武流「おゝ うまそうだな」

桃子「ふふ、ありがとうございます。でも、食べたいなら手伝ってくださいね？」

武流「もちろん！」

現在の高町家一同が揃ったところで、朝ごはんです。

一同「「「「頂きまーす」」」」」

士郎「ん、今朝もおいしいな、特にこの、スクランブルエッグが」

桃子「ほんと？ トッピングのトマトとチーズと、それからバジルが隠し味なの？」

士郎「ふふふん。皆、あれだぞ。こんな料理上手なお母さんを持つて幸せなんだから、わかってんのか？」

美由希「もう、わかってるよ。ね、なのは」

なのは「うん」

桃子「は、もうやだ、あなたつたら」

うふふふ あはははは

高町家の両親は、まだ新婚気分バリバリです。

恭也「美由希、リボン曲がつてる」

美由希「え？ほんと？」

恭也「あ、ほら、貸してみろ」

で、お兄ちゃんとお姉ちゃん仲良しで、愛されてる自覚はとってもありますが、この一家の中ではなのは、もしかしたら微妙に浮いてるかもしれません。

でも、それも1年前までの話。

武流「なのは。どした？ そんな浮かない顔して」

なのは「ううん、なんでもないよ」

今では、武流さんがいますから。

つぶつぶ

ガシャ

なのは「おはようございまーす」

運転手「おはよう」

今日は学校の日。スクールバスに乗って学び舎に向かいます。

すずか「なのはちゃん」

なのは「ん？」

アリサ「なのはー。こっちこっち」

最後尾の席に私のお友達、すずかちゃんとアリサちゃんが手を振ってました。

なのは「すずかちゃん、アリサちゃん」

アリサ「おはよう」

すずか「おはよう。なのはちゃん」

なのは「おはよう」

笑顔で挨拶を交わし、アリサちゃんが空けてくれた席に座ります。同時にバスのドアが閉まり、発進します。

アリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃんの2人とは、1年の頃から同じクラス。今年からは同じ塾に通ってるの。

—●—

あつというまに夜です。

なのは「うゝ； まさか、皆して熟睡しちゃうなんて；」

学校が終わって塾の時間。なぜか塾内の人、全員が熟睡するという事件（？）が起きた。

なのは（ん）、ジュエルガイストさんの所為かな？ でも食事をした痕跡はなかったし…。なんだったんだろ？

おかげでもうすぐ20時になるというありさまです；

アリサちゃんが車で送ってくれるって言ってたけど、塾から家までは民家郡があるので、この前みたいな事があっても叫べば誰かが気づいてくれるはずだと言って断りました。

なのは（お守りもあるしね）

首にぶら下がっているネックレスの先に付いているダイヤを手に載せ微笑む。

1年前、武流さんと会ったときにプレゼントしてもらった物です。学校以外では常に付けています。（風呂は例外）あの時もこれを付けてたから武流さんが助けに来てくれたと思うと、本当にお守りだと思えたから。

なのは「あれ？ なんだか…景色がおかしいような…」

ふと、上を見上げると空が微妙に歪んで見えます。

色彩も紫色のようなものが混ざってるようにも見えます。

なのは「じゅ、ジュエルガイストさん？；」

武流さんは空間が歪んだらその場を離れろ、って言ってました。ジュエルガイストが現れる前兆とのこと。でも、それにしても規模

が広すぎるし、半球ドームみたいな膜にも見えます。

ツドガン

なのは「つきゃ！ な、なに？」

大きな音と共に地面が揺れました。

なのは（ば、爆発！？ 違う。何かが、建物が壊れるような音だった。）

音のした方角を見ると、砂ほこりが舞っていました。
曲がり角でゆっくりと顔を出して見てみます。

ツズガン

なのは「っひ！」

石垣が破壊されたでしょう。破片が降り注いできます。
そして…

「???1」！ 大丈夫ですか!？」

オコジヨがいました。

なのは「オコジヨ？」

オコジヨ? 「違います！ 僕をどっかの少年先生のエロ使い魔と一緒にしないでください！ ついでに、この体はフェレットです！」
なのは「喋った!？」

フェレット「で、こんなことしてる場合じゃないでしょ！ という

か、なんでここにいますか！」

なのは「ええ！ 普通に塾の帰りだよ！ だいたい、ただ帰路を歩いているだけでなんで責められなきゃいけないの！？」

フェレット「違います！ 僕が言いたいのはそうゆう事じゃなく…」

ドドン

その爆発音（倒壊音？）は後ろから聞こえました。
気になって振り向いたら、

なのは「； なに？； この子；」

そこには、真っ黒な物体が佇んでいました。

なのは（こんな生物、聞いたことがない； ジュエルガイストさんとは…違う！？ 武流さん！！；）
フェレット「逃げて！」

小さなダイヤが輝いた事を、この場の者は気づかなかった。

武流「なんだこれ？」

異変を感じ取った武流は民家郡の一角に来ていた。

ただ、この気配が今まで感じたものではないことには気づいた。

黒龍王『どうした？』

武流「いや、なんか結界みたいなものが張られてるみたいなんだ」

そう、武流はなのは達が丁度中に居る結界の外壁の前にいるのだ。しかし、結界と言っても何も無い、ただの道と民家が羅列しているだけだ。

黒龍王『？ 何も見えんが？』

武流「あれだ。鏡面世界なもんを造って、転移したようなものだ」

黒龍王『だとしたら結界と言わんし、結界の気配も無いだろ』

武流「そうなんだよな； なんか、俺が知っているもんとは別物みたいなんだ」

黒龍王『で、どうする』

武流「侵入するさ。結界の気配があるんなら、穴を開けて入れるはずだ」

そう言いながら、武流は、手を伸ばす。もちろん、なにも触れるものは無い。

黒龍王『そう言うが、虚空に穴を開けることはできんぞ？』

武流「この感じ、魔力で造った結界だろう。基本に則って穴を開けるさ」

武流が言う基本とは、いくつかある結界破りの基本のことだ。

その基本中の基本。魔力で造られた結界は、その結界に注がれた魔力を上回る結界をぶつける事。

黒龍王『まあ、おまえならできるだろうな。だが、何かを封印している結界だった場合はどうする？ こんなところで暴れられたら大変だぜ？』

武流「な〜に。うまく穴を開けるだけに留めるよ」

武流が行おうとしているのは“結界破り”ではなく、“結界に穴

を開ける”ということだ。魔力の加減や操作を誤れば、結界を壊してしまう。

この結界が封印のためか、魔術師同士の戦いを隠すためのものかわからないため、穴を開けるだけに留める。事がすめば、結界を再度構築するか、破壊するかを決める。まあなにせよ、閉じ込められたわけではないので、大抵は穴を開けてから事を決める。

武流は、人払いの魔術を発動した後、

武流「さて、鬼がでるか猫が出るか…勝負！」

構えを取り、

右の義手に魔力を乗せ、
振りかぶり、

武流「殴る！」

ツガツシャーン

ガラスが砕けたような音がし、何も無いはずの虚空に穴が開いた。

武流「成功」

黒龍王『それじゃあ、とっとと入って、なにがあるか見てこようぜ』

武流「はいよ」

結界の穴の奥に向けて走り出した。

――

ツドガン

タタタタタ

なのは「ハア、ハア、なんなのあれ；」

走りながら腕の中のフェレットに話しかけます。

フェレット「あれはジュエルシードが具現化させた願いの塊です」

なのは「ジュエルシード？；」

フェレット「それ…うわ！；」

ッズドン

いつのまに回り込まれたのか、願いの塊が民家を壊し、地面にクレーターを作り佇んでいます。

なのは「そんな…；」

なのは（人がいたのに； あれ？ でもなんで誰も避難しないの？；
）

周りには人影はなく、願いの塊と私達だけが取り残されたようにこの場にいます。

願いの塊『ゴーーーーー！ーーーー！』

なのは「っひ！； ここはとにかく、逃げなきゃ；」

とにかくひたすら走りました。

民家の倒壊音が遠のくを聞きながらひとまず休憩します。

なのは「しばらくは大丈夫かな？；」

フェレット「でも、放っておくと外に出してしまう。どうにかしないと」

なのは「え？ 外？」

フレット「今、僕達がいる場所は、僕が造った結界の中なんだ」
なのは「…不思議と違和感を感じない；」

フレット「この結界は魔力を一定以上持つ生物だけを閉じ込めるものなんです」

なのは「…その話からすると、私は魔力を一定以上持っているってこと？；」

フレット「そうなりますね。最初、君がここにいることを疑問に思ったのは、魔力を持つ人がこの世界ではまったくいなかったからなんです。すみませんが、君の力を貸してくれませんか？」

なのは「え！ な、なんで？；」

フレット「今、君の魔力量を調べた。君の魔力なら具現化された願いの塊を倒して、ジュエルシードを封印できる！」

なのは「ま、まって； 私、ジュエルシードっていうのもわからないし、封印の仕方わからないし、なにより…怖いし；」

フレット「大丈夫。君の魔力量なら傷1つつかないはずだ。封印の仕方、このレイジングハートが教えてくれる」

そう言つて、フレットさんの首に下げられた宝玉を差し出してきます。

フレット「お願いします。本当なら、僕がやらなきゃいけないことなんです…今の僕には封印に必要な魔力すら残っていないんです；

お礼は必ずします！ どうか、力を貸してください！」

なのは「でも…」

どう言えばいいかわからなくなりました。

自分にそんな力があつたとしても、あの願いの塊の目の前に立つて戦う自信が無いです。小さなジュエルガイストさん相手にも怯える私に、あんな大きな生物とは戦えない。

そう考えていたら。

願いの塊
ゴ— — — — — !

なのは「!?!;」

フレット「しまった!」

いつのまにいたのか。願いの塊が、形の不安定な腕を振りかぶっていた。

なのは「あ」

なのは（武流さん）

前にも、こんな事があつたなと思いました。そして、

武流「なのは！」

再び、希望の光が見えました。

武流「なのは！」

なのはに対して、腕を振り下ろそうとする異形に接近する。

振り下ろされる腕に跳びまわし蹴りを叩き込み、粉砕する。

怯んだところを見逃さずに、右手の義手からスター・オブ・シエ
ラネオーネを取り出した。

武流「コール！ 黒龍王 シグルトバルム！」

黒龍王 「グオオオオオオオオオオオ———」

黒龍王は異形を、強靱な腕で掴み、武流達から離れさせる。

武流「なのは！ 大丈夫か！？」

なのは「うん、ありがとう。また助けられたね」

武流「おお、助けてやったぜ。さ、俺が来た方向に穴を開けた。そこから外に出てる。俺はあの異形を片付けてくるからよ」

なのは「うん、わかったの。気をつけてね」

武流「あいよ」

そう言い残し、武流は異形と黒龍王がいる場所へと駆ける。

武流「黒龍王！ 大丈夫か！？」

黒龍王「ふん、誰にものを言っている。俺がこの程度に苦戦するわけ無いだろ。ぬん！」

ツブン ドッパアン

黒龍王が腕を力いっぱい振るうと、異形の体積4割ほどが抉れた。

願いの塊「ギャアアアアアアアア！」

抉れて無くなった体から、青い何かが光り輝いていた。

武流（あれは！？）

黒龍王「うるさいぞ、クズが！ その口、塞いでくれるわ！」

ツブン ツグシャ

黒龍王はその腕を縦に振り、異形を縦に潰し、文字通り口を塞いだ。

願いの塊『！？』

黒龍王『貴様の顔は見飽きた！』

そう言った黒龍王の口から熱気が漏れ出す。

見るものに、感じるものに死を連想させる紅き炎。

黒龍王『灰も残らず消えろ！』

ツゴオ

その口から燃え盛る熱の塊が発射される。

ツズツドオオオオオン

異形に着弾すると同時に爆発し、天高く火柱を走らせる。

黒龍王『ふん、他愛も無い』

武流『まで！ 黒龍王！ なにか変だ！』

黒龍王『あん？』

そう言った武流の目先には、燃え盛る火柱の中で青光りする宝石があつた。

黒龍王『おまえの目的の魔石じゃねえか。それがどうした』

武流『よく見てみる』

火柱が燃え尽きて消えると、青光りするひし形の宝石が一際強く光を放つ。

すると、

黒龍王『！？「冗談じゃねえぞ」』

武流「現実だよ；受け止めるしかねえ」

そこには、焼き消されたはずの、異形が佇んでいた。

黒龍王『どうする？…』

武流「あの魔石が生み出しているようだな。破壊はできないだろうから、手に入れて制御するしかないな。時間稼ぎよろしく！」

黒龍王『あいよ！』

なのは「そんな！；それじゃあ、武流さん達に勝ち目なんて…；」
フェレット「ジュエルシードの蓄積されている魔力が尽きればこの戦闘も終わる。けど、それには何年待たなきゃいけないんだ！」

フェレットから聞いた事実。

それは、ジュエルシードは触れた生物の願いを歪んだ形で具現化させるということだ。しかも、具現化された願いはジュエルシードが毎時蓄積する魔力が尽きるか、封印するかのも二択でしか収まらないのだ。でなければ、魔力が尽きるまでその願いを叶え続けるというのだ。

フェレット「あの願いの塊がどんな願いによって生み出されたかはわからないけど、ジュエルシードを封印しなければ止まる事はありません！今それができるのは…」
なのは「…私だけなんだね」

フェレットは肯定するように首を縦に振る。

フェレット「さっきの人が効率はさらに上がるだろうけど、準備している間は無防備になってしまいます。それなら、あの人が願いの塊を抑えている今の内に、あなたが準備を済ませてしまえば……」

この場において、もっとも効率が高い作戦をフェレットが説明する。

その説明を受けなのはは、

なのは「……なのは」

フェレット「え？」

なのは「私、高町なのは。まだ名前言ってなかったよね」

自分の大切なものを守るため、戦う事を選んだ。

フェレット「……僕の名前はユーノ。ユーノ・スクライアです。よろしく、なのは」

なのは「よろしく」

ユーノは首に下げていた紅い宝石、レイジングハートをなのはに差し出す。

ユーノ「僕のが起動キーを読み上げるから、なのはは僕の後になんを詠唱して」

なのは「う、うん」

レイジングハートを受け取り、祈祷するように腕を会わせる。

ユーノ「我、使命を受けし者なり」

なのは「我、使命を受けし者なり……」

ユーノ「契約の元、その力を解き放て」
なのは「えと； 契約の元、その力を解き放て」

手の中で、鼓動のようなものが聞こえた。

ユーノ「風は空に、星は天に」
なのは「風は空に、星は天に」

もう、不安はありませんでした。

ユーノ「そして、不屈の心は」
なのは「そして、不屈の心は」

自分にも、大切な人達を守る力があるとわかったから。

ユーノ&なのは「この胸に！！」

なにかが弾けて、体が軽くなります。

ユーノ&なのは「この手に魔法を！ レイジングハート、セット
アップ！！」

天に掲げたレイジングハートから桃色の光が空へと駆け上ります。

なのは「ふええ； な、なにがおきてるの？」
ユーノ「な、なんて魔力だ」

そして、頭の中に女性の声が響きます。

レイジングハート『始めまして、新しいマスター。私はレイジング

ハート。あなたの手となり足となる物です。さあ、まずはあなたが使う杖と、あなたを守る魔道服を想像してください」

なのは「え！？ ええと； じゃあ、とりあえずこれで！」

レイジングハート『了解。魔道士へと変身させます』

――

武流「レギオン！ たたッ切れ！」

ガシヤ ツバ ツザン

武流が召喚したレギオンが、願いの塊を両断する。

武流「まだまだ！」

ズザザザザザザザザ！

剣を振る腕が見えなくなり、願いの塊が魔石を残して塵となる。

武流「今だ！ レディースパイド！」

蜘蛛神『あいよ！』

蜘蛛神 レディースパイド。上半身は人間の女性、下半身大蜘蛛のジューエルガスト。大蜘蛛 ヴァルトスパイドの上位種。

蜘蛛がそのまま巨大化したヴァルトスパイドとは違い、数多の魔術と、知識を備えている。

蜘蛛神『食らいな！』

蜘蛛神は、口から白い塊を吐き出した。

その塊が、願いの塊の塵に触れると破裂し蜘蛛の巣を作り出した。その蜘蛛の巣が、生きているかのように糸が伸び、願いの塊だったものを捕まえる。

武流「うし！ 肉片と肉片が離れてればくつついて再生することはできねえだろう」

と、思ったのもつかの間。

蜘蛛神
・
・
・
ごめん；
武流；

武流「なんだ？」

蜘蛛神 無理っぽい。

ブチチ

願いの塊の破片が蜘蛛の巣を破りぬけ、再び再生する。

武流「どちきしょー！ 像が3頭で引つ張つてもびくともしない筈なのー！」

蜘蛛神「注ぎ込んでる魔力が半端ないってことだね；　どする？」

武流「なぜか封印できないし； 消し炭にしてもすぐに再生するし；

黒龍王「ぶつ壊せばいいじゃねえか」

武流「ああ、俺もそれは考えた。こんな物、組織に持つて帰るわけにもいかなえから、現場判断でぶつ壊そうと思ったさ。でも、あの魔力量だ；ぶつ壊したら暴発は確實、結界なんか紙屑どうぜんで辺り一面焼け野原だ；」

蜘蛛神「死者が出るのは必須だね」

武流「ちきしょー！！！！！！」

それだけは許されない。

打つ手が無い。そう思ったとき、

????1「シュート！」

武流「ん？」

空から声がしたと思ったら、桃色の光が降ってきた。

ツズドン

その閃光は願いの塊に直撃した。

武流「なんだ？！」

????1「武流さん！」

武流「なのは！？」

びつくりしたさ。だって、

武流「おまえ、こんな時にコスプレか？！」

なのは「予想してたけど言われると痛い！！」

なぜなら、ゲームに出てきそうな杖。んでもってふわふわな服。
コスプレとは思えない。

蜘蛛神『武流。そんなことよりあれをどうにかしよう』

武流「あ、ああ。そうだな」

なのは「待って！」

武流「どうした、なのは； 危ないから下がってろ」
なのは「私を見て言うことは？」

武流「？ かわいいのはいつものことだ」

なのは「／／／それはうれしいけど！　よく見て！」

武流「？」

蜘蛛神『！　武流！　そいつの足元を見る！』

武流「？　浮いてるな…。なんか目線が俺より高かったから違和感あったけど、なるほど」
「……………は？」

なのはの足元を見る。地面についてない。浮いてる。

武流「なに……………！！！」

なのは「やつと気づいた！」

そう、浮いていた。いや、飛んでいた。

武流「飛ぶ魔術なんてあったっけ？」

蜘蛛神『いや；　キヤスターは神代の魔術で飛んだから…。無くはないか？』

黒龍王『なんだ？　空を飛んでるぐらいで驚くのか？』

武流達が驚くのは無理も無い。なぜなら、神代の魔術は現在では実現不可能な大魔術。それなのに、なのはは飛んでいるのだ。人類が夢に見た“空を飛ぶ”ということを実現しているのだ。

というか、なのはは魔術師だったのか？

1体だけ、驚かないのもいだが；

なのは「武流さん。私、あの宝石を封印できる」

武流「は？　おまえ、なにいつて…！」

蜘蛛神『武流！　その子は今、空を飛ぶっていう大魔術ができるんだ。嘘をついてるとは思えない』

武流「違う！　俺が言ってるのはそうじゃねえ！　危ないからって言ってるんだ！」

なのは「大丈夫だよ。この服が守ってくれるから」

武流「そんな薄っぺらな服にそんな能力なんてねえだろ！」

なのは「だ、大丈夫だもん！；ちゃんと攻撃、防げるから；」

武流「寝言いつ…」

ツバチコン

武流「いた！；」

武流の後頭部に激痛が走った。

その原因は、

蜘蛛神『そこまでにしときな。だったら、私たちがその子を守ればいいじゃないか』

蜘蛛神のゲンコツだった。

武流「それはそうだが、だからってなのはを危ない目に遭わせられるか！」

蜘蛛神『どうせ、あれを止められなかったこの街は終わりだ。そして、その子も終わりだよ』

武流「…っち；わかったよ」

蜘蛛神『そうそう、いい子だね』 なのはって言ったね。会ったのは、初めてだね。私は蜘蛛神。あんたの背中は私たちが守ってあげるから封印、頼んだよ？』

なのは「あ、はい。高町なのはです。よろしくお願いします」

蜘蛛神となのはの自己紹介が終わった瞬間、武流がなのはの両肩を掴んだ。

武流「なのは」

なのは「はい？」

武流「封印は任せる。だが、危なくなったら逃げろよ」

なのは「はい／＼」

黒龍王『ラブコメやってるとこ、悪いんだがとつととしてくれ。もうめんどくさい』

いい雰囲気をぶち壊したのは、ず~~~~~~~~と願いの塊を押さえつけていた黒龍王であった。

武流「あ、わりい；忘れてた！」

なのは「ありがとうございます。黒龍王さん」

蜘蛛神『そんじゃ、とつとと終わらせますか』

蜘蛛神が背伸びし終わると、その場の空気が変わる。

武流、蜘蛛神、黒龍王、レギオン達から尋常ではない殺気が出る。その雰囲気、なのはは恐怖を感じたが、今、自分が認められた高揚感と失敗するかもしれない恐ろしさで、レイジングハートを握る手に力を込める。

武流「コール！ 騎魔 レギノス！ 行け！」

火蓋を切ったのは武流。

レギノスを数体召喚し、走らせる。

黒龍王が願いの塊を投げた瞬間、レギノス達が加速する。

ツドオドドオドドドオドドド

その眼を真っ赤に光らせ、音速を超えて願いの塊を削っていく。だが、削られた部分を再生しようと、今まで以上の速度で再生し

ていく。

蜘蛛神『再生が早すぎる！』

武流「だったら、数等分に切り刻んでやるよ！ レギオン！」

ッダン

武流の命を受けてレギオンが跳んだ。

なのは「飛びすぎじゃない！；」

武流「これでいいんだよ」

30メートルを越えた所で上昇が止まり、重力に引つ張られ落下が始まる。願いの塊に向けて。

レギノス達が瞬時に離脱する。願いの塊もその場を逃げようとするが、

黒龍王『悪いな。もう少し付き合え』

願いの塊『！？』

後ろに回りこんでいた黒龍王が、両サイドから願いの塊を掴む。剣の軌道が通る縦を邪魔しないように。

ズシャーーーーーー！

重力加速により威力を上げたレギオンの剣が願いの塊を両断する。そして、俺となのはと蜘蛛神から見た両断した願いの塊の片方に、

なのは「あ、青い宝石！」

ジュエルシールドが顔を見せていた。

武流「黒龍王！ 魔石は左手の方だ！」

黒龍王『おう！』

そう武流が教えるとすぐさま回転を行い、一周する前に武流達から見て左の方向に右手に握られているジュエルシールドが入ってない願いの塊の肉片をブン投げた。

ツブン ヒュン

すぐに点になった。

なのは「え、なんで片方だけ投げるの？」

武流「さっきまで再生を見てて気づいたんだ。あいつは再生するとき、あの魔石をに向かって再生しようとする。このとき、魔石は一切動かない。だからわざわざ魔石だけを取る必要はなく、」

そして、黒龍王が左手に握っていたジュエルシールドが入っている肉片を、武流達から見て右側、真逆にブン投げた。

武流「奴を両断してその二つを離れさせる！ 蜘蛛神！」

蜘蛛神『あいよ！ なのは！ しっかり掴まってな！』

蜘蛛神が何も理解していないなのはを抱き上げ、ジュエルシールドが入っている肉片に向けて駆け出す。

なのは「へ？ にゃーーーーー！」

もちろん、長寿ジュエルガイストの彼女は音速を超える。

武流はすぐさま黒龍王の場所まで跳躍し、手のひらに乗り、

武流「向こうを頼むぜ」

黒龍王『あいよ！』

ツブン ヒュン

ジュエルシードが入っていない肉片に向かって投げられる。

武流「行くぜ！」

その後、黒龍王はジュエルシードが入っている肉片へと向けて飛ぶ。

ツバガン

このとき、飛ぶための跳躍で地面が陥没する。（布石ではない）

――

しゃっかかかかかかか

なのは「なんで私、蜘蛛神さんに抱っこされて移動させられてるの？」

景色が高速で変わる中、なのはは蜘蛛神に疑問を投げつける。

蜘蛛神『あの願いの塊はね、常に再生を行っているんだが体がある程度破壊されると完全再生するまで攻撃の手を休めるんだ。だから、その間に魔石を封印しちゃおうってわけ』

「なのはどうでも、まだ願いの塊を二つに分けて離れさせる理由がわからないよ。」

蜘蛛神「あんた； 案外頭の回転遅いね。」

なのは「小学3年生に無理言わないでください！」」

蜘蛛神「理由は簡単。こんだけ離れさせとけば、魔石に向かつて再生しようとしても時間が掛かる。その間に残った肉片を剥ぎ取って魔石を封印しようってわけ。sの状態なら攻撃はしてこないからね」

なのは「でも；あの再生の早さだと、すぐに戻ってくるよ？」

蜘蛛神「そこで、武流の出番だ」

なのは「え？」

蜘蛛神「あいつには肉片が戻ってくるのを防ぐ。ま、時間稼ぎ役だ」
 なのは「それって大丈夫なの！？； 戻ってこようとする塊にぶつ
 かったら……；」

蜘蛛神「大丈夫。あいつには奥の手があるから」

なのは「奥の手？」

蜘蛛神『ま、なのはは封印がうまくできるように心配してな』
 なのは「う、うん」

武流「お、戻ってきたな」

黒龍王に飛ばされた武流は今だ飛行中（横に落ちてるだけ）。

その前方に、魔石の方へ再生しようとしてきた肉片が見えた。

このままだとぶつかって、ミンチにされるだろうが、

武流「ミンチになるのはお前だ！ コール！ 人工人機 ファースト！」

ウオオオオオオオオオオオオー……ン！

その呼びかけに、人間の女性と人型ロボットがばらばらのツギハギでできたような全長3メートル強のジュエルガイストが現れた。

ロボットの部分は紫色に光沢を放っており、人間の部分は真っ白な肌をさらしている。

武流と同じように飛行（横に落ちる）する。

願いの塊の肉片がもう数メートル前に迫った瞬間、

武流「A・T・フィールド！ 全開！」

ウオオオオオオオオオオオー————ン！

ツパキーン

ファーストが吼えると同時に甲高い音がし、前方にオレンジ色の波紋が広がる。

願いの塊の肉片はその波紋に阻まれ、こちら側にこれない。さらに、A・T・ワールドの力か、波紋に触れている箇所から肉片が少しずつ消滅している。

武流（つつつても、電子レベルからでも再生したからな；早くしてくれよ、なのは）

なのは「あ、黒龍王さん」

なのは達の後ろから、蜘蛛神を上回るスピードで飛んでくる黒龍王が見えた。

そのまま抜かれる直前、

黒龍王『俺が魔石を取り出す。奴が再生するまでに封印してくれよ』
なのは「…はい！」

なのはの返事を聞いた黒龍王は、速度を上げて飛行中（しつこいけど、横に落ちてるだけ）の願いの塊の肉片を掴み、ジュエルシールドと肉片を取り分け、肉片だけをブン投げた。

ツブン

その真逆、なのは達の方へとジュエルシールドを投げた。

ツブン ツガ

地面に刺さった。

蜘蛛姫『お、いい所に落とすね。なのは、頼むよ』
なのは「はい！」

速度を落とし、なのはを降ろす。
ジュエルシールドの傍に駆け寄ろうとすると、

黒龍王『砕ける！』

ツドパン

なのは「へ？」

黒龍王が今さっき投げた肉片を黒龍王が拳で粉碎していた。
だが、ベクトルは変わらず、ジュエルシールドに向かってくる。

なのは「きゃ！」

蜘蛛神『させないよ！』

蜘蛛神は、瞬時に蜘蛛の糸の塊を吐き出す。

その塊は、肉片の前で止まり爆発する。

先程使ったものとは違い、物理攻撃を防ぐ、魔力が編みこまれた特別製だ。

肉片を全て受け止める。

蜘蛛神『なのは！』

なのは「はい！ リリカルマジカル。ジュエルシード、封印！」

なのはの言葉に、レイジングハートが答える。

レイジングハート『了承。モードチェンジ、シーリングモード』

レイジングハートの先端からやや下の方に、桃色の翼が3枚出現した。

その翼から、紐状の魔力の塊が数本出現し、ジュエルシードに纏わり付く。

炙り出されたように、ローマ数字で21と浮かび上がる。

レイジングハート『ジュエルシード、ナンバー21、封印開始』

さらに魔力の塊が増加し、ジュエルシードを包んでいく。
そして、

レイジングハート『封印完了』

願いの塊の肉片が消滅した。

蜘蛛神『封印…できたってことかな?』

レイジングハート『はい。封印は完璧です』

黒龍王『やつと終わったか』

なのは「ふう、とかつた〜」

蜘蛛神『やるじゃないか。なのは』

なのは「ううん。レイジングハートがやったんだよ」

レイジングハート『いえ、全てはマスターの魔力があつたからこそです』

蜘蛛神『そうだよ。自信もちな。ところで、その杖…喋るの?..』

レイジングハート『はい、喋ります』

黒龍王『ほう、ケスカトリポカみたいだな』

なのは「ケスカトリポカ?」

蜘蛛神『ああ、気にしない気にしない。さ、武流を迎えに行こう』

武流「もう来てるよ」

蜘蛛神『うを! 早いな;』

武流「肉片が消えたからな。結果を聞きに来たんだよ。で、どうだった?」

なのは「ばつちしです♪」

武流「そうか」

黒龍王『ではなのは。俺達は魔石に戻るから、結界を解いてくれ』

なのは「あ、それは私じゃないです」

蜘蛛神『え? あんたが発動したんじゃないのかい?』

????2「結界は僕です」

武龍&蜘蛛神「『へ?』」

戦いの余波に巻き込まれないよう、隠れてたユーノが出てきた。

なのは「ユーノ君」

武流「オコジヨ？」

ユーノ「オコジヨじゃないです！ フェレットです！」

武流&蜘蛛神「『喋った！！』」

ユーノ「僕はユーノ、ユーノ・スクライアです。話は後でします。

まずはジュエルシードを回収してこの場を離れましょう。なのはのご家族も心配しているでしょうから」

なのは「あ！ 塾の帰りだったの、忘れてた！」

武流「ジュエルシード？ あの魔石の名称か？」

ユーノ「と、とにかく； なのは、ジュエルシードをレイジングハートの先端で触れてみて」

なのは「あ、うん」

なのはは、魔力を放出しなくなったジュエルシードの傍に行くと、レイジングハートの先端で触れた。
すると、

レイジングハート『収納』

レイジングハートの宝玉部分に沈むように消えた。

なのは「消えちゃった」

ユーノ「レイジングハートが中に収納したんです」

武流「てことは、後でも取り出せるんだな。んじゃ、お前ら、ごくろうさん」

蜘蛛神『あいよ。じゃあね、なのは』

なのは「は、はい。お休みなさいです」

蜘蛛神がなのはと別れの挨拶をした後、ジュエルガイスト達は武流のスター・オブ・シエラネオーネの中に戻っていった。

ユーノ「それじゃあ、結界を解きます」

ユーノが小さな魔方陣を出現させ、なんらかの呪文を呟くと、

ガッシャーーン

ガラスが碎ける音と共に、景色が元の色彩を取り戻した。

武流「おお、戦闘跡も直ってるな」

ユーノ「直ったわけではないんですがね； ええとですね…」

なのは「ああ！ 待って待って、それは家に帰ってからにしよう」

ユーノ「え？」

なのは「こんな所でそんな話してたら武流さんの所の組織に殺されちゃうから；」

ユーノ「ええ！？；」

武流「んじゃ、帰るか」

なのは「うん。ユーノ君もいこ」

ユーノ「え、あ、はい。お世話になります」

武流「さて、遅くなった理由をどう言い訳するんだい？ なのは」

なのは「あう； …この前のように；」

武流「はいはい」

ユーノ「？」

――

武流達が立ち去った後、武流達が戦っていた場所に人影が下りた。

フェイト「ジュエルシールド、先に取られちゃった；」

八尋「プレシアの容体が悪くなったんだ。一旦戻っていた理由がそれでは仕方ないさ」

フェイトと八尋であつた。

フェイト「今から盗りに行く」

八尋「やめところ。もう遅い。今日はもう休んで、明日を待とう。盗る機会はまたくるさ」

フェイト「八尋が言うなら」

八尋「それに、初日から成果があつたのだ。十分さ」

その手には、青く光るひし形の宝石、封印されたジュエルシードがあつた。

その宝石は、先程、なのはが言っていた塾にあつたのだ。

彼女達は、ジュエルシードの反応を感知し、すぐさま回収に行ったのだ。

八尋「しかし、まさか歪んで叶えた夢が“寝たい”とわな」

フェイト「眠たい時にジュエルシードに触れちゃったんだね。でも、もう少し遅かったら、あの人達全員危なかった」

八尋「ああ、具現化されたのが“永遠の眠り”とは、驚いたよ。これがジュエルシードの力か」

フェイト「うん、お母さんが欲しがっている物。全部集めなきゃ」

八尋「そうだね。さ、帰ろう。アルフが心配する」

フェイト「うん」

フェイトは飛べない八尋の手をとり、そのまま拠点にしたマンションへと戻る。

八尋（武流、強くなったな。俺を殺せるぐらいにはなっていてくれよ）

ジュエルスオーシャンのOPソングをお流ししてください。

8話（後書き）

レイジングハートは英語で喋っていると思っていてください；

作者に英語能力は皆無です；（この前も同じこと書きましたね；）

話の最後にジュエルスオーシャンのOPソングを流してくださるよう書かれておりますが、好きな歌でも構いません。

途中、F a t eのキャスターの名前が出てきましたが、接触があったとお考えください；

いつか、接触話でも書きますね。

人工人機 ファーストの正体、わかりましたよね？ 名台詞も言っちゃってますしw

今後、こんな風にいろいろだしてみます。

誤字、脱字、名称の間違いがありましたら教えてください。
すぐに直します。

では、また次回にノシ

9 話（前書き）

無印編の途中の話はできてないのに最終話や別の作品の物語が頭のなかで完成しつつある状況です；

説明だけの9話、始まります。

9 話

ジュエルシードを封印し終えた俺らは高町家に戻っていた。

なのはの帰りが遅くなった理由は、いつもの誘拐されかけたという事で収まった。事実この1年間で7回は誘拐されかけたのを助けている； 今までよく生きてこれたなと思うよ；

で、今はある問題を家族会議中だ。その内容は、

なのは「と言う訳で、このフェレットさんをしばらく家で預かれな
いかな」と；

士郎「んゝ、フェレットかゝ」

なのはの腕の中にいるフェレット（ユーノ）を見つめながら士郎
さんが腕を組みながら真剣な表情で考え込む。

答えを期待するように少し前屈みになりながら士郎さんを見るな
のは。

この時、なのはとテーブルに挟まれたユーノの苦しみは想像を絶
するだろう。

そして、士郎さんの口から出てきた言葉は、

士郎「ところでフェレットってなんだ？」

ずっだーん

盛大にこけた。テーブルに突っ伏した。漫画のごとく。

この時、なのはとテーブルに完全に挟まれえたユーノの痛みは人
知を超えただろう。成仏してくれ。

恭也「イタチの仲間だよ、父さん」

美由希「大分前からペットとして人気なんだよ？」

と、わかりやすく二人が説明してくれた。

実のところ、俺も知らなかった。そかそか、イタチの仲間か。イタチもよく知らんがな；

桃子「でも、そんなに小さいなら籠の中に入れておけば大丈夫じゃないかしら？」

皿洗いを終えた桃子さんが戻ってきて席に着く。

なのは「ほんと!？」

テーブルから顔を引き剥がして、桃子さんの言葉に喜ぶなのは。ユーノのライフはもう0のようだ。ぐったりだ。

桃子「ただし、なのはがちゃんと面倒を見るのよ？」

なのは「もちろん!」

士郎「桃子の許可も出た。お前ら、いいか？」

恭也「俺は特に依存は無いけど」

美由希「あたしも」

桃子「武流さんは？」

え!？

武流「なんで居候に聞くんですか?」

桃子「あら。武流さんはもう家族も同然よ」

//

武流「まあ；別に動物アレルギーがあるわけでもないですから；別にいいですよ」

士郎「と、いうわけだ。よかったな、なのは」

なのは「うん、ありがとう」

士郎「籠は明日買ってくるから、今日は風呂に入って寝なさい」

なのは「はい」

美由希「あ、なのは。そのフェレットは私が風呂に入れるから、武流さんとゆっくり入ってきなよ」

なのは「え？でも；」

美由希「いいからいいから、私こうゆう動物大好きなんだよね」

と、ライフ0のユーノを無理やりなのはから奪い取って自室へと消えていった美由希。

なのは「お姉ちゃんつたら。ほんと、強引なんだから。じゃ、武流さん。先に風呂に入ってるから」

そう言つて自室に寝巻きを取りに行くのは。

1年前から一緒に（強引に）風呂に入られているのだが、これに違和感を持つのは俺だけなのか？；なのはの年頃ならお父さんとまだお風呂に入るのはわかる。だが、居候の青年男性と入るものなのか？；おかしい；

ぼん

いきなり後ろから肩を叩かれる。士郎さんだ。

士郎「娘を、頼んだよ」

・・・おかしい；今、婚姻を認めた父の顔をしていた；いや、

気のせいだ； きっと、風呂で怪我をしないように頼んだんだろう。
うん、そうに違いない。

士郎「これで店に専念できるな」

桃子「あら、なのはの事嫌いだったの？」

士郎「そんなわけないだろ？ ただ、武流さんになら任せられと思うんだ」

恭也「父さん、気が早すぎるよ」

上記3人「「あははっはははっはは」

高町家の全員が俺となのはをくつつけようとしている気がする；
まだ小学生の頃に許婚をさせようつてのか？； いや、この場合は許婚ではなく婚姻まじかの雰囲気だ； なぜだ、まだ入居1年の居候青年にそんな重役を任せられる； いや、無理やりか；

桃子「あら？ 武流さん、そんな所にいないで早くお風呂に入ってきたらいかが？」

武流「は、はい；」

頭が真っ白な状態で寝巻きを持って風呂場に行く。いつも回避しようとするフラグはまた繰り返された。

—●—

ユーノ「では、始めましょー」

武流「ああ」

なのは「うん」

現在俺の部屋。

床の上で正面にユーノが、ベットの上になのはが座っている。俺

はユーノと同じく床の上。椅子は無いからな。

ユーノ「数日前、僕は自分がいた世界である物を発掘しました」

武流「それがジュエルシードってやつか…」

ユーノ「はい。それを時空管理局に届けようと次元空間移動艦で移動していた途中…」

なのは「まって。その管理局ってなんなの？」

本腰が折られた； とつと終わらせて寝ようと思ったんだが、長くなりそうだな；

まあ、気になってたんだけどな。

ユーノ「…ミッドチルダという世界から始まった機関、時空管理局。世界を渡る術を手に入れ、数多の世界を管理する魔法機関。まあ、科学も混じっているんですけどね」

武流「管理…ね」

その世界のトップ、生物の承諾しての事かそれとも…。

ユーノ「あ、でも科学が発展しても魔法が存在しない世界は対象外みたいですけどね」

なのは「てことは、私達の世界も管理下に入るの？」

ユーノ「そうですね。今までこの世界は魔法が確認されなかったのですが、魔法が確認されたのですから登録されるかもしれませんね。でも…魔法を魔法と言っているのでしょうか…」

確かにな。

武流「魔術師の間では魔法は奇跡を起こすものと言われている」
なのは「奇跡って？」

武流「簡単な話、死者蘇生が代表的だな」

なのは「ふえ」

武流「そんなこと、お前さんが言う魔法でできるか？」

ユーノ「できませんね。…そんなことは」

武流「じゃあ簡単だ。お前さんが言う魔法と魔術は同じものだな。

ただ、仕組みや系統が違っただけだ」

ユーノ「なるほど。根本的には同じと言うわけですね」

なのは「強引にまとめたような気がする；（よくわからないけど；）

」

武流「で、話の本腰折っちゃったけど、送り届けようとして、どうした？」

ユーノ「あ。そうでした。管理局に届けに行く途中で艦の目の前に女の子が現れたんです」

武流&なのは「女の子？」

ユーノ「金髪でフリルが付いたドレスを身にまとっていました。絵本等に出てくるようなお姫様みたいな子でした。そういえば耳がとんがっていたような…」

あれ？；　なんか知り合いに該当する奴が…；

ユーノ「その子がいきなり指輪が付いた手を掲げた瞬間、白い龍が現れたんです」

同一人物でした；

ユーノ「その龍が格納庫に穴を開けてしまい、次元のはざまに、この世界のこの区画に落ちたんです。僕は見失っではいけないと思ってジュエルシードを追って穴から飛び降りたんです」

なのは「ふえ」。そんなことがあったんだ。あれ？　武流さんどうしたの？」

武流「な、なんでもない；」

なのは「そういえば、この子はなんなの？」

そうゆいながらレイジングハートを取り出したなのは。
でも、そんなことは気にしていられない俺。

ユーノ「それも発掘した物なんです。最初は宝石かと思ったんですが後ほどデバイスだとわかったんです。デバイスというのは簡単に言うと魔導士の杖です。魔法に必要な詠唱をやってくれたり出力の上げ下げを手伝ってくれたりなどしてくれる魔導士のパートナーです」

なのは「へえ、すごいんだね。レイジングハート」

レイジングハート『はい、私達の自慢です』

なのは「ふふ」

いいな、悩みが無いって；

ユーノ「落ちたジュエルシードは発見された物、全部で21個です。内1つは回収。残り20個も集めなきゃいけないんですが、なのは、手伝ってくる？」

なのは「うん、これを封印しないと多くの人が大変な目にあうなら、それを知った私の義務だね」

ユーノ「ありがとう、なのは」

戦いの恐ろしさをイツ知るかな？ あ、もう知ってるか；

ユーノ「それでは武流さん。この世界の魔術師の事とあなたの組織について教えてもらえますか？」

おっと、あの子の事は一旦おいとこ。今はこっちだ。

組織について喋るの大丈夫かな？；　なんか最近、秘密主義って事忘れそうだ；

武流「ああ、まず魔術師についてな。魔術師は生涯をかけて研究を行う奴等だ」

ユーノ「研究？　なぜそのような事を？」

武流「さっき言った奇跡にたどり着きたいからだ。魔術師は自分の全てを研究の材料にして魔術を、魔法を作り上げていく。ただ、一人の代で終わるようなものじゃないからな。自分の一族にバトンリレーのように回していき、完成させようとするんだ」

ユーノ「なんのために？　名誉？」

武流「そんなもんじゃない。ただの自己満足、知識欲みたいなものだ。ま、そのためならなんでもするってのが奴等の怖いところだ」

ユーノ「・・・自己満足のために他人を巻き込むと？；」

武流「そんな所だな。ま、巻き込むのは同じ魔術師か身内だ。一般人はまず巻き込まない。ルールもあるしな」

ユーノ「ルール？」

武流「そ。魔術というものが存在するんだ。小さい物ならともかく、大きいものだと思事とかに利用されちゃう。実際は自分の研究の成果を他人に教えたくないだけだけど；　とにかく、一般人にばれてはいけないというのがルールだ」

ユーノ「・・・さっき同じ魔術師なら巻き込むとか言っていましたけど、どうゆうことですか？」

武流「そうゆう意味だ。生贄」

ユーノ「そんな事までして；」

武流「そんなものだ。俺らだってモルモットを踏み台にして科学を発展させてきただろ？」

ユーノ「；」

武流「ま、現在じゃく他人を生贄にしようとすることは少なくなってきたがな」

ユーノ「？ どうゆうことですか？」

武流「一番多く生贄が必要な大魔術があつたんだが、もうなくなつたからだ」

ユーノ「？ まるで今まではあつたような言い方ですね」

武流「あつたんだよ。今までな。聖杯戦争っていう大魔術だ」

ユーノ「？ 戦争？ 戦争が大魔術なんですか？」

武流「戦争つつつても、その表現みたいなもんだ。まだ儀式の段階で、その過程で多くの生贄が必要になるんだ。条件が満たせば魔法が発動する」

ユーノ「！？ 奇跡が起きるんですか！？」

武流「正確には起こす、だ。ま、俺の知り合い達がこれ以上の犠牲を出したくないとのことで、その儀式の中心を破壊した。もうその大魔術は行われない」

ユーノ「そうですか。・・・武流さんも魔術師なんですか？」

武流「いや、俺はジェルマスターだ。魔術は戦闘の術の1つで、知識として知っている程度だ。魔術関連はその知り合い達に教わった」

ユーノ「なるほど。ところで、ジェルマスターってなんですか？」

武流「簡単な話、ゲームでいう召喚士だ。めっさ強力な、な」

ユーノ「そんなレアスキルを！」

レアスキル？

武流「そ、ジュエルガイストっていうモンスターを呼び出す専門家だ。俺の組織はこの力を使って魔石という宝石の回収とジュエルガイストの一般への情報漏れを防ぐのが仕事だ」

ユーノ「ジュエルガイスト？」

武流「簡単に説明すると、生物の感情が生み出した魔物。その感情を食料となる生物の天敵だ。存在数と感情の激しさから人間が9割方狙われる。歴史の途中からうちの組織がジュエルガイストに関しての全ての情報と存在を隠蔽してきた。人類がここまで平和な生活

を送れるのは俺達のおかげと言ってもいい。ま、いないならいないで同種争いをしてるような有様だがな；」

ユーノ「生物を襲う魔物を従えてるんですか？」

武流「ああ。そのような過程で生み出されたかはわからないが、魔石という特殊な宝石で操る事ができるんだ。本来は操るだけだが、中には自主的に手伝ってくれるやつもいる。条件付きというのが痛いかな；」

ユーノ「なるほど、この魔石がか。ロストログアというわけですね」

武流「ロストログア？」

ユーノ「正体や構造がわからない物体を管理局を中心に管理世界の人達がそう呼んでるんです。それだけならかつこいいんですけどね；

」

武流「なのは「へ？」」

ユーノ「あ、こつちの話です；」

武流「ふゝん。あ、そうそう。俺の任務についても話しく」

ユーノ「任務？」

武流「ああ。組織からの任務でな1年前に言われた。この町で21個の青いひし形の魔石を回収しろ。だとさ」

ユーノ「え。それって；」

武流「そ、ジュエルシードの事だ」

ユーノ「そんな！； だって、ジュエルシードがこの町に落ちたのはほぼ2日前ですよ！？ なんでそんなことを1年前から知ってるんですか！？」

武流「ま、それは俺も気になってたんだ。なんで俺の上司がそれを知っていて落ちる1年前に場所の特定まで知っていたのか物凄く気になっていた。が、そんなことは今確かめられねえからあんま考えないようにするわ；」

ユーノ「え？ 上司に連絡すれば・・・」

武流「言い忘れてたが、一応うちの組織は秘密主義なんだ。電話の番号はなぜか毎回違うんだ； 向こうから連絡が無い限りこつちか

らは質問すらできない。だから忘れてくれ；正直他にもいろいろ考え事があつてな、あんま思ひ出させないでくれ；」

ユーノ「わ、わかりました；・・・秘密主義と言つてましたが、僕が他の人に喋つたらどうなります？」

武流「知つた人共々永遠にさようなら」

ユーノ「・・・喋らないと誓います；」

武流「そうしてくれ。じゃ、これでお互いの世界の裏事情（？）がわかつたな」

ユーノ「そうですね」

武流「じゃあ寝るか。なのはも自室に戻つて・・・」

ベツトの方に視線を向ける。寝てます。警戒心0で。

武流「途中から声が聞こえなくなつたと思つたら寝てたのか；」

ユーノ「；」

武流「はあ；仕方ない。俺は床で寝るか」

そう思つて掛け布団を綺麗にかけて寝られそうな床まで行くことすると、

なのは「ん」

寝巻きにがちりと掴まれています；

ユーノ「・・・ほどこないんですか？；」

武流「それやつたらなぜかジャンピングホールドがきた事がある；」

ユーノ「・・・」

武流「・・・」

ユーノ「お休みなさい」

武流「あいよ；」

そう言ってユーノはその場で丸くなる。

俺はベットの空いているスペースに横になる。

・・・このままでは一夫多妻フラグが立つような気がしながら夢の中へと赴く。

その日の夢には妹が出てきたよ；

9 話（後書き）

・・・相変わらずの駄文で見にくい文の配列です；

次回は八尋サイドでの説明ですね。原作の2話後半はもうちょっと
まっけてください；

ではノシ

10話（前書き）

すみません、遅くなりました；

趣味って時間潰しますよね；

久々にバ〇オ4をマシンプistol（+ナイフ）だけでクリアしよう
かと思っています。

上記の気持ちを胸に込めて書いた10話、始まります。

10話

10話

八尋「まったく、寝ていてくれと言った筈だ；ロードピラードの回復魔術を弱くして永続的に行っているとしても、動かれると体力の消費が一層増してしまう」

目の前の、先程、無理に体を動かして研究をして倒れたプレシアに注意する。

まったく；魔法の組み立てを急ぐ事もあるまいに；私の頃とは違って時間はあるのだから。

プレシア「ごめんなさい。でも、失敗は許されないから。今まで前例が無いのだから、何が起きるかわかったものじゃないわ。少しでも効率を上げなければ；」

そう言うプレシアの顔は疲労と体力の消耗がわかるようにでていた。

時間があると思ったが、こっち《・・・》がないか；

八尋「わかった；できるだけジュエルシードの回収は急ぐよ。研究をするときはロードピラードを複数召喚しとくからその時に回復魔術を頼んでくれ」

そう言って、ロードピラードを数体召喚する。

何事？と言いたげに首を傾げてくるが、命令を与え待機させておく。

食事はプレシアの漏れ出した感情を勝手に食べるだろう。

八尋「では、私は高町家に戻るとするよ。何かあったら連絡してくれ」

プレシア「ええ、ありがとう。八尋。・・・そうそう」

八尋「なんだい？」

プレシア「フェイトにありがとうと言っておいてちょうだい」

八尋「・・・わかった」

プレシアが寝ているベットのすぐ隣のテーブルの上にある回収したジュエルシード（１つだけ）とフェイトが持ってきたケーキを見ながら退室する。

フェイト「あ、八尋。お母さんどうだった？」

八尋「無理をしたから疲れただけさ。ロードピラードを数体待機させといたから緊急時も問題ないだろう」

フェイト「そう、よかった」

八尋「そうだ、プレシアからの伝言だ」

フェイト「え？」

八尋「ありがとう。だそうだ」

フェイト「／／／ うん」

ふむ、プレシアも丸くなったものだ。１年前まではフェイトの事をただの使い捨て道具としか見ていなかったのに。これも私の苦勞の賜物だな；

二人にそれぞれ風呂に入るように言っただけで鉢合わせさせたり、寝込んでいるプレシアを看病しているのを俺と思わせてフェイトにやらせたり、料理を運ぶのを代わりにフェイトにやらせたり、ただやるのではなくプレシアが油断していてご機嫌がいいタイミングを狙うのが大変だったな。

プレシアのフェイトに対する意識が変わってきたのは確実だ。

八尋「さ、食堂へ行こう。リニス達が食事を用意してくれているの
だろう？」

フェイト「うん」

――

八尋「デバイス？」

食事が終わって皿洗いを手伝っていたらリニスがいきなり話しかけてきた。

リニス「はい。あなたの魔力量をそのままにしておくのはもったいないと思いましたから、あなた用のデバイスを作りました。それに、デバイスを持っていればフェイトがいなくてもジュエルシードを封印できますし」

八尋「それを取りに来い？」

リニス「ええ、あなたの戦闘方法はリスクが高すぎますからね。魔法を使えるようになっても損はないですよ。それにフェイトの近接とあなたの遠距離攻撃、とっても相性がいいと思いますよ？」

八尋「・・・接近戦は俺の方がいいと思うんだが」

リニス「あら、あの子を直接指導してるのは八尋、あなたでしょ？
1年前に比べて物凄く上達してますよ？ 少しは自分の教え子を信用なさいな」

八尋「ふう、わかった。皿洗いも終わった事だし、行こうか」

手に持っていた最後の洗い皿を拭き終わらず。

リニス「はい」

― ● ―
八尋「これが俺のデバイスか・・・」

目の前にはカプセル内で待機しているナイフがあった。

リニス「はい、名前はアポカリプスです」

八尋「それはまたたいそうな名前を！」

確か地上の王国の滅亡を記した書物だったかな？

リニス「八尋の魔力量なら小さな国くらい一夜もしないで滅ぼせる
と思つてつけました」

八尋「俺の魔力はそんなに高いのか？」

リニス「普段はアーミーナイフとして携帯できます。魔力をデバイスに送りながら始動キーを口にすればＢＪと一緒に杖が出現します。ＡＩを搭載しているのでわからない場合は彼に聞いてください」

アポカリプス「始めましてマスター、アポカリプスと申します。これからどうぞよろしく願います」

八尋「ああ、よろしく。なぜ携帯時がナイフなのかはわからんが；
まあいい、試し撃ちをしてきてもいいかな？」

リニス「どうぞ、でも空に向けて放ってくださいね？ 空間の狭間に撃たれたらどこかの世界に被害がでしてしまうかもしれませんから
八尋「わかつているよ」

そう返事をしてリニスの研究室を退室する。

リニス「ふう、まともに顔を見る事ができなくなってきましたね！」

八尋が来てからテストロッサ家は変わりました。

プレシアは現実と向き合い始めフェイトを受け入れてきています。アリシアの事は諦めないのは変わらずですが、もう止める気も起きませんよ； いい意味で。

フェイトは笑顔をよく出すようになりましたね。母であるプレシアが自分を受け入れてくれた事が嬉しいのですね。八尋と一緒にいる時が一番笑顔を多く見えますがね。

アルフも罵詈雑言を言っていますが、前に比べて物凄くご機嫌ですし。

リニス「そんな風に私達を変えてくれたからアポカリプスの名を付けたんでもありますがね」

そう、私も・・・／／／

時の庭園内部裏庭

八尋「ふむ、では始めるとしようか。始動キーを教えてくださいアポカリプス」

アポカリプス「それはマスター達、ジェルマスター達が口にする言葉です」

なるほど。わかりやすい始動キーだ。では、

八尋「コール！ 破滅杖 アポカリプス！」

ナイフ状のアポカリプスを翳しながら魔力を送り込み始動キーを

唱える。

視界が白一色に染まる。

晴れたとき、その手にはナイフの代わりに長さ2メートルほどの杖があった。英雄クーフリーンの宝具、ゲイ・ボルクを思わせるが刃の変わりに円筒状の宝石があった。

八尋「ほう、なかなかいい姿をしているな」

アポカリプス「ありがとうございます。この姿ならば棒術もできまずから距離を選ばずに戦闘を行えます。必要ならば魔力を流してもえれば刃もです」

八尋「なるほど、懐に入られてもグラムがあるからとこのように作られたか。しかし、なぜ服は変わらんのだ？ B Jになるのではなかったのか？」

アポカリプス「マスターの戦闘スタイルでは魔道服は邪魔になつてしまふと思いましたが、勝手ながら現在の服装にそつて防御魔法を張るだけにしました。性能はB Jと同じくマスターの魔力がそのまま防御力になるので問題はありません」

八尋「ふむ、すばらしいよアポカリプス。これなら確かに戦闘がやりやすい」

アポカリプス「どういたしまして」

八尋「では、魔法の遣い方を教えてもらつていいかな？」

アポカリプス「わかりました。と言っても、マスターがやることは簡単です。詠唱や魔方阵の展開はこちらで行いますので、マスターは私に登録されてるものの中から使用したい魔法を頭に思い浮かべながら魔力そ私に送っていただくだけです。なお、登録されている魔法は以下のとおりです」

そう言われた後、頭の中にアポカリプスに登録されているであろう魔法の名称とその効果が流れてくる。

八尋「ほう、これほど強力なものばかり集めるとはリニスも気合を入れたものだ。では、これを試してみよう」

頭の中に流れてきた魔法の内1つを選択する。

八尋「頼むぞ」

アポカリプス『了解』

八尋「ブレイクバスター」

アポカリプス『ブレイクバスター』

アポカリプスの本体であろう宝石を空に向けて構える。
宝石が輝いた瞬間、杖の先端から魔方陣が展開される。
魔法陣から人の頭程の大きさの光球が数個出現する。

八尋「デット・エンド・シュート」

キュガ ッピュン

光球が旋回しながら一点に集まるように前進し、重なった瞬間に前方へ発射された。

軌跡を描きながら進むそれは雲に穴を穿いたのが見えた。発射から着弾まで1秒ぐらいだろう。

自分が知る魔術とは大違いだ。
消費された魔力が比較できないほどだ。

八尋「さすがに強力だな」

アポカリプス『防壁や結界を安易に貫通することができます』

八尋「そうか、では戻るとしよう」

自室に戻ろうと足を動かす。

アポカリプス『他の魔法は試されないのですか？』
八尋「あれは体にどれほどの負荷が掛かるか実践しただけだ。残り
はイメージトレーニングでやる。できるのだろう？」
アポカリプス『はい。脳内での空想訓練が可能です』
八尋「ではそうしよう」

—●—

アポカリプス『マスター』
八尋「なんだ？」

自室でイメージトレーニングを終えてナイフ形態に戻ったアポカ
リプスが声をかけてきた。

アポカリプス『ジュエルシードを1つ回収されたようですが、その
ときはどのように封印されたのですか？ リニスに聞いた話ではジ
ュエルシードは暴走していたそうですね。まだ私にはそのときのデ
ータがインストールされてません。今後のジュエルシード回収のた
め、お聞かせくださいませんか？』
八尋「ふむ、あれはだな・・・」

—■—

八尋「プレシア、何用だ？ いきなり呼び出して」

自室でグラムの手入れをしていたとき、いきなりプレシアから通
信で呼び出された。

プレシア「アルハザードへいく手段が見つかったわ」

八尋「なに！？」

ついに見つけたか。しかし、見つけれられるとは計算外だ。

死者を生き返らせることは無いに等しいと気づかせるためにフェイトとの溝を無くしたりなどしていたのだが；あと少しというところで；こうなれば計画変更だな。アリシアを生き返らせてからテストロッサ家に平和を謳歌してもらおう。

八尋「では今すぐにでもとりかかるか？」

プレシア「いえ、無理よ。アルハザードへ行く方法はほとんど賭けに等しいの。その方法を行うにしても莫大な魔力が必要だわ」

八尋「賭け？ ということだ」

プレシア「アルハザードへ行くのには次元振動というものを起こして次元の狭間を開くの」

八尋「なに！？ 次元の狭間など開いたら消滅してしまうぞ！」

プレシア「アルハザードは数多の次元の1つの世界、そこにいくための1つのラインを造れば安全にいけるわ」

八尋「・・・その手段は？」

プレシア「私を作るわ。あなたにはフェイトと一緒に探してもらいたい物があるの」

八尋「どんな物だ？」

プレシア「これを見て」

プレシアが機械を操作すると空中に映像が出現する。

八尋「戦艦？ いや、輸送艦か」

そこには時空の庭園の周りと同じさまざまな色が溶け合っている空間を進む輸送艦らしきものが写っていた。今思えばこの空間が次元の狭間の一端なのかもしれない。

プレシア「この輸送艦にはある物が積まれていたの」

過去形？

八尋「その物体は？」

プレシア「ジュエルシード。ある世界に埋まっていたものよ。なんでも莫大な魔力を秘めているとらしいわ」

八尋「らしい、とは随分曖昧だな」

プレシア「発掘されたのがつい最近なのだから仕方ないでしょ。まだその使い方すらわかってないのだから。この情報を手に入れるのにも苦労したのよ？」

八尋「そうか。で、私達はこれを奪ってくればいいのか？」

プレシア「いえ、実は行方不明になったの」

八尋「行方不明？」

プレシア「ええ。輸送中に突如現れた女の子に保管庫に穴をあけられたのよ。そこからジュエルシード合計21個が次元の彼方へ消えたの」

なるほど。だから先程過去形だったのだな。しかし次元の彼方に消えたとなると世界間移動しなければいけないということか？

苦労するな；

しかし、女の子？

プレシア「どこの世界に落ちたかはもうわかっているわ」

八尋「早いな」

プレシア「でも急がなければいけないわ。管理局が見つけ出す前に回収して頂戴」

八尋「わかった。早々に準備をして出発しよう。」

プレシア「ジュエルシードがある世界の情報はバルディッシュに送

っておくわ」

八尋「わかった」

ジュエルシードを探すために準備をするため、自室に戻りフェイトのところに行かなければな。

自室に戻りグラムを懐にしまい退室。

フェイトの部屋にいき扉にノックする。

コンコン

フェイト「いいよ」

返事を確認してからドアを開ける。

八尋「フェイト、出かけるぞ」

フェイト「うん、わかってる。今、お母さんから通信がきたから」

八尋「ではいくか」

フェイト「うん。あ、アルフも連れて行っていい？」

八尋「かまわんさ」

フェイトの部屋を退室した後、通路で出くわしたアルフに事情を話つてきてもらった。

玄関を出て空間移動できる場所へ向かうとリニスがいた。

八尋「リニス。なぜここに？」

リニス「転送の用意をしておきました。魔力は私を使います。フェイトは向こうでいきなり戦闘になると大変でしょうから座礁位置をいれるだけでいいですよ」

フェイト「わかった。ありがとう」

リニス「八尋、2人をお願いね？」

八尋「もちろん」

アルフ「私だつてフェイトを守ってみせるさ！」

リニス「では行つてらっしゃい」

3人「「行つてきます」「」「」

挨拶を終えると、魔道士へと変身したフェイトがバルディッシュを構えて呪文のようなものを唱えると、

バルディッシュ『転移』

視界が真っ白になったと思ったら、景色が変わっていた。

フェイト「着いたよ」

八尋「ここは・・・」

そこはフェイトに初めて出会った場所であり、自分が生まれ育った世界であった。

因縁か・・・。

今いる場所とはあるビルの屋上みたいだ。空がオレンジ色に染まっている事から見て夕方だとわかった

アルフ「フェイト、ジュエルシールドはどこに？」

フェイト「ここからまっすぐに行つたところにある。すぐ近くみたい」

アルフ「そうか。なら早いとこ、早く手に入れようぜ！」

八尋「待て」

アルフ「なんだい？」

フェイト「どうしたの？」

この感じ、フェイトが言った場所に歪みがあるようだ。

八尋「二人とも、気をつけていくぞ」

フェイト「え？ うん」

アルフ「なんだい、今更」

そうゆう二人を残して跳躍する。

フェイト「八尋！」

アルフ「な！； 結界ぐらい張るの待てよ；」

周りの景色が変わるのを見るとアルフが結界を発動させたのだらう。

数度、跳躍と着地を繰り返すと目的の場所の目の前についた。なぜか塾だった。

続いてフェイトとアルフも到着した。

アルフ「いきなり行くなよ！ 結界発動しなかったら飛び降り自殺に見えたぞ！；」

フェイト「八尋、どうしたの？」

八尋「…ジュエルガイズがいる」

フェイト「え！ 八尋が言ってたあの魔物？」

アルフ「確か、音速超えるんだっけ？；」

八尋「いや、この感じでは長寿ではなさそうだな。そんなに速くは動かんさ。ただ、基本的な強さは変わらない。気をつける」

フェイト「…うん」

バルディッシュを持つ手に力を込めながらフェイトの眼が険しくなる。

アルフ「おおさ」

アルフも拳同士をうちつけ気合を入れる。

八尋「では、いくぞ」

アルフが発動した結果は擬似的なフィールド（現実と同じ形）を任意の範囲で造りだし、そこに魔力を有するものを閉じ込めるものだ。これにより、魔力を持つ人間がいらないこの世界で誤認で境界に閉じ込められるのは魔術師のみ。中からは活動している存在はジュエルガイスト一体のみから考えて魔術師もないようだ。遠慮なくドアを蹴り飛ばす。

ツバガン ガッシャー
ン
ダダダ

塾内に入るとそこには、

フェイト「そんな！ 人がいるなんて！」

アルフ「魔力を持ったやつがこの世界にいたのかい！？；」

驚いた事にそこにいたのはジュエルガイストだけではなく、栗色髪のスインテール少女、黒髪（紫？）色のロングストレート少女、金髪のロングストレート少女が机に突っ伏して寝ていた。なぜ？

八尋「あれは・・・」

二人が人間がいる事に驚いてるのに対し、八尋はそこにいたジュエルガイストに驚いていた。

そこにいたのは、空中に浮かんだ成人男性程の大きさもある、赤

白の縦縞模様のパジャマを着た赤ん坊だった。

魔童鬼 タリスベイブ。

奴は薔薇姫などと同じく500年以上生きている長寿ジュエルガイストのはずだった。

だが、そこから感じられる気はまだ、5年程しかない。

と、いうことは俺が量産したやつの子残りか。

自分の負の遺産は目の前にあったご飯がいきなり数がなくなつた事に驚いてキョロキョロしていた。まだ3つもご飯が残っていたので気にしない事にしたのだろう。口から無数の長い舌を出し、少女達を捕食しようとした。が、

ザシュ ッボン ビシュシュ

フェイト「やらせない」

金色の閃光が栗色髪の少女に迫る5本の舌触手を切り裂き、

アルフ「敵を目の前にして食事とはいいい度胸だね」

オレンジ色の閃光が金髪少女に近づく3本を破裂させ、

八尋「その腹具合からして、ここ数日は何も食べていないようだな」

銀色の閃光が黒髪少女を襲うとする7本を霧散させた。

おぎゃーーーーー！

舌を傷つけられた痛みに悲鳴を上げる魔童鬼。

八尋「二人とも貞操を守れ」

アルフ＆フェイト「おう！」「うん！　って、え？」

いきなりの発言に戸惑う二人。

八尋「あいつは見た目とは裏腹にマザー（？）ファッカーだ」
アルフ＆フェイト「な！／／／」

びっくり発言である。

八尋「まあ、彼女達を守ってくれてればいいさ。あれは俺が殺るよ」
言われた言葉の意味に気づいて驚き戸惑う二人を置いて駆け出す。
駆け出して10メートル程の距離を詰め、魔童鬼の目の前にくる。
魔童鬼は瞬時の出来事に理解が追いつかなかったのか、驚いて動
こうとしない。

ズザザザザザザザザザザザザザザザザザザザ

八尋の閉じている瞼の奥の眼が紅く輝いたと同時に、グラムを持
った腕の肩から先が見えなくなり魔童鬼を切り刻んでいく。

おぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！

！！

胸から下が塵となって霧散してようやく動き出した魔童鬼。

その声自体が超音波となり八尋達の耳を通り脳に痛みを直接与える。

八尋「ツグ」

フェイト「あ」

アルフ「うぐう」

その声を聞いても起きない少女達を無視して八尋達に襲い掛かる超音波。

フェイトとアルフは両手で耳を塞ぎ、八尋は数歩下がってしまった。それを見逃さなかった魔童鬼は八尋を全力で殴り飛ばした。

ズドン

八尋「うぐ：」

机や椅子を巻き込んで壁へと激突する。

フェイト「八尋！　っきゃ！：」

八尋の安否を確かめようとした瞬間、魔童鬼がいつのまにか出していた舌触手がフェイトを捕らえる。

アルフ「フェイト！　っぐ：」

おぎゃーーーーー！

再度、魔童鬼が超音波を発生し、フェイトを助けようとしたアルフを足止めする。

フェイト「アルフ・・・：」

舌触手についていた唾液がフェイトの体を濡らしていく。

そして、もう数本舌触手を出しアルフを魔童鬼が捕らえようとした瞬間、

八尋「コール。騎魔 レギノス」

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

GRAMに付けられた魔石からレギノスが飛び出し、アルフを捕らえようとしていた舌触手を粉碎し、フェイトを捕らえていた舌触手を霧散させた。

落下するフェイトを八尋が抱きとめる。

フェイト「う； 八尋・・・」

八尋「レギオン。殺れ」

ツドス

ぎゃーーーーー！！

八尋の命令を聞いたレギオンが魔童鬼の頭を串刺しにする。

断末魔を上げた後、魔童鬼は動かなくなった。

アルフ「ハア…ハア…遅いんだよバカ；」

八尋「すまないアルフ。長年実戦をやっていたいなかったおかげで勘が鈍っていたようだ。フェイト、立てるか？」

フェイト「うん、大丈夫。ありがとうね、八尋」

そう言いながら、捕まるときに落としてしまったバルディッシュを拾い一振りする。

バルディッシュ『クリーン』

フェイトと八尋についていた魔童鬼の唾液が臭いごと消える。

アルフ「お、ジュエルシード見つけたよ」
フェイト「ほんと？」

アルフの足元にひし形の青い宝石が落ちていた。プレシアが見せてくれたジュエルシードの形と合致する。

八尋「これで1つ目回収だな」
アルフ「んじゃ、早いところこれもって次探しますか」

そう言いながらアルフがジュエルシードに触れると、

ばたり

倒れた。

フェイト「アルフ！」
八尋「！」

駆け寄り抱きかかえる。

八尋「・・・寝て、いるのか？」
フェイト「あ、そういえばあの子達も寝ているね」

腕の中にはすうすうと寝息を立てているアルフと、先程激しい戦闘があつたにも関わらず同じく寝息を立てている少女達。

バルディッシュ「ジュエルシードから魔法を探知。睡眠の魔法です」
八尋「睡眠？ なぜ・・・」
バルディッシュ「それはリニスに調べてもらいましょう。今は封印

を。直接触るとアルフのように眠ってしまいます』
フェイト「わかった」

バルディツシュを構えて杖の先っぽで触れるようにし、なんらかの詠唱をフェイトが唱える。すると、

バルディツシュ『ジュエルシード、ナンバー1、封印』

バルディツシュがそう言い、ジュエルシードから僅かながら光が消えた。

バルディツシュ『収納』

そして、吸収されるようにバルディツシュのコアに消えていく。

フェイト「これで1個目を回収できたね」

八尋「ああ。む！」

フェイト「え？」

ピキピキキキ

何かにひびが入るような音が聞こえた。

バルディツシュ『術者であるアルフが寝てしまったので結界がくずれようとしています』

八尋「なに!？」

バルディツシュ『大丈夫です。結界が解けても現界に戻るだけです。戦闘跡も消えるので心配はありません。ただ、死体もそのまま元の場所に帰ってしまいます。』

八尋「そうか、ならば・・・コール。魍魎鬼 アビスモール」

G程の大きさの黒い生物が無数に現れた。フェイトには黒い霧に見えただろう。

フェイト「その子達は？」

八尋「死体処理班さ。タリスベイブの残骸を頼む」

命令を受けた魍魎鬼達が魔童鬼だった肉塊に群がる。黒い塊として盛り上がったと思ったら徐々に縮んでいく。

そして、血の一滴すら無くなった。

フェイト「すごい・・・」

八尋「さあ、ここを出よう。現界に戻って立っているところに生物や物があったら大変だ」

フェイト「わかった」

八尋「アルフは俺が運ぼう。フェイトには重いだろ」

フェイト「うん、お願い」

魍魎鬼が魔石に戻ったのを確認し、アルフを抱き上げて玄関へと向かう。

外に出ると空全体にひびが入っていた。

バルディッシュ「結界崩壊まで40秒を切りました」

八尋「時間が無いな。一般人に見つかる前に先程のビルの屋上まで戻ろう」

フェイト「わかった」

その場を離れ、ビルの屋上まで戻ると結界が崩壊した。

八尋「間に合ったか」

アルフ「んゝ、ん？」

フェイト「あ、アルフ。おはよう」

どうやらアルフが起きた

アルフ「後5分ゝ」

わけではないようだ。

八尋「寝かせといてやろう」

グウオン

休もうと思つた瞬間、いきなり空中にモニターが出現した。
モニターに映っていたのは、

リニス『八尋！ フェイト！ アルフ！ 聞こえますか！？』

八尋「リニス。聞こえているよ。どうしたんだ」

リニス『プレシアが倒れました！』

八尋「何！？ゝ」

フェイト「お母さんが！？ゝ」

おそらく、アルハザードに行くためのラインを造ろうとしていた
のだろう。弱りきつた身体が悲鳴を上げたのだ。

リニス『八尋！ すぐに戻って治療を！』

八尋「わかった、すぐ戻る。フェイト、転移を頼む」

フェイト「う、うんゝ」

八尋「その後、着いてすぐに治療を始めた。おまえを取りに行く前に終わったよ」

アポカリプス「なるほど。・・・ジュエルシードの力はなんだったのですか？」

八尋「食事中に聞いたのだが、どうやら願望器らしい。それも狂った……な」

アポカリプス「願望器？」

八尋「簡単な話、願いを叶える力をもった万能アイテムだ。ただ、願いを歪んだ形で叶えるらしい。今回は“眠い”という思いを“寝たい”と捉えて叶えたらしい。“永遠の眠り”としてな」

まるで聖杯だな。

アポカリプス「ではその力に眠らされたアルフや子供達は？」

八尋「ジュエルシードの暴走が収まったからな、直に目覚めるそうだ。アルフはフェイトが見ている」

アポカリプス「そうですか。記録しときます」

八尋「好きにするといい」

ツピ

机のパソコンにいきなりリニスの顔が映った。通信のようだ。

リニス「八尋。ジュエルシード反応です」

八尋「ハア、・・・わかった、すぐ行く。フェイトを呼んでおいでくれ」

リニス「そのつもりです」

その言葉を最後に通信が終わった。

八尋「アポカリプス、行くぞ」
アポカリプス『了解』

ナイフ状のアポカリプスを懐にしまい退室する。
玄関を出てフェイトと共にジュエルシード反応がある場所へと転移する。

八尋はテストロッサ家を幸せにするための計画をこの１年間考えていた。

アリシアを生き返らせる可能性が見つかってしまったのは誤算であつたが計画に支障は無い。ただ、どうしてもこの計画には“管理局”が邪魔になる。

ブレシアを不幸に陥れた原因の１つとも言えるこの組織が、どう考えても計画の邪魔になつてしまった。

だが、この後に見つけた人物を計画に組み込む事で勝算がでた。
ただ１人の死亡を代償として。

10話（後書き）

相変わらず駄文な上にしめが無理やりになりました；

次回は武流達の話でなのは原作2話後半に該当する話を書きます。

・・・進みが遅いのは許してください；

誤字、脱字、名称の間違いなどがありましたら報告お願いします。
ではまた次回にノシ

11話（前書き）

うゝむ、やはり物語の中盤は考えるのが大変だ；

ちよいと原作の脇役キャラさんをいじめる11話、始まります。

11話

ある日の月村家。

今日は大切なお客がくることになっている。

コンコン

紅茶の香りを楽しんでいるとドアがノックされる。

ノアル「お嬢様、お客様がお着きになりました」

忍「入れて頂戴」

返事をした後、青いロープを頭から深く被った人物が

『お邪魔します』

と書かれた看板を掲げながら入ってきた。

以前、武流と話をした後訪問してきた人だ。

どうやら“我がカルテル”の下っ端の1人だという。名前は無い
と言って“サインボード”というニツクネームを名乗った。

ついでに言うと、その後ちよくちよく現れては話し相手になって
くれている。

忍「いらっしやい、よく来てくれたわね」

サインボード「いえいえ、私も楽しみにしていますから」

あら、嬉しい事を言ってくれるわね。

・・・書いてくれたわね、が正解かしら？；

忍「さ、座って」

サインボード「失礼します」

忍「まずは取引の方ね」

そう言いながらテーブルの上に膨らんだ小さな皮袋を置く。

サインボードは袋を開けて中身を見ると、『確かに』と書かれた看板を掲げる。

中身は魔石だ。最初に訪問してきた時にお互いが得をする条件を掲げてきた。

その内容は、“我がカルテル”は地球上のヴァンパイアハンターやモンスターハンター全員に月村家には手出しをしないように契約（どちらかと言うと脅し）をし、私達は魔石を発見しだい提供する、という事だ。

こちらとしても命を狙われる確立が大分低くなり、向こうも目的を果たす方法が増え、いい事尽くしである。

ただ、向こうは『この程度では我々に釣りが着すぎてしまう』と言ってきて、庭に侵入者に対して発動する魔術トラップを設置することを提供してきたのだ。そこまではいいと私達は遠慮したが、『じゃあ勝手にやる』と、数種類のトラップを仕掛けたのだ。

感情や気持ちを感じて発動すらしく、通常のお客様や身内には誤作動しないらしい。

むしろこちらに釣りが多くきた気がした；

サインボード『いつもすみませんね；』

忍『いいのよ。こちらこそ大助かりなんだから』

そして、いつものように世間話が続いて、恋バナになった。

サインボード『そういえば忍さんは恭也さんと付き合ってるんですね？』

忍『え？ ま、まあ…そうなるわね；』

サインボード『てことはあれですか！？ もうやつちゃったんです

か！？w」

忍「ちょ！？　な、なんて事聞くのよ！；」

サインボード「いいじゃないですかw　どうなんです？　気持ちよかったですか？w」

忍「ま、まあ、恭也優しいし、でも激しいとき…って何言わせてるのよ！；　そういうあなたはどなのよ！？」

サインボード「ふえ！？　わ、私は…；　その、好きな人はいますか；　ちよつと壁がありました；」

忍「壁？」

サインボード「それは、あの人が自分のこと嫌われ者だと思ってるんで；　なかなか告白できなくて；」

忍「そんな事気にしてたらラチがあかないわ！　アタックよ！」

サインボード「わかってるんですけど；」

そんな話をしていると、

P P P P P P P P P P

携帯のメールか電話を知らせる着信音が流れる。

私がポケットに手を入れるとサインボードも同じ動作をする。どうやら着信音は同じのようだ。

鳴っていたのはサインボードの携帯の方だった。

画面を見てサインボードの雰囲気が変わる。

返信のメールと思われるものを打ち、送信ボタンを押すとポケットにしまう。

サインボード「申し訳ありません；　どうやら仕事のようです；」

忍「そう。気をつけてね」

サインボード「はい」

そう言うと、窓へと走っていく。
窓が開け放たれる音を聞きながら、心から応援した。
次に聞こえたのは足を挫く音だった；

――
月村家に客が来た時刻。

別の場所で散歩をする男がいた

武流「俺だよ。」

そう、武流である。

武流「で、なのはと話をついたのか？」

ユーノ「ええ、本当は関係ないのに・・・手伝ってくれるそうです。
優しい子ですね」

武流「優しい子だよ。ま、どちらかと言うと自分の存在価値が欲しいのかもしれないがな」

ユーノ「え？」

武流「俺が来る前は、なのはは高町家の中では少し浮いていたようだ。小さい頃は色々あって、家で1人で過ごすことも少なくなかったらしい。んで、学校では今、将来の自分というテーマの話があるとか。そんな事から魔法少女としていることで自分の存在価値が欲しかったのかもしれない」

ユーノ「・・・辛かったんですね」

武流「人生色々あるからな。ま、そんな事を経験して本当の大人になっっていくんだよ」

ユーノ「そうですね。忘れ物という事態も経験していくんですね」
武流「学校に必要なはないが、ある意味忘れちゃあいけない物だな」
レイジングハート「本当です。魔法少女が杖を忘れるとは、何事で

すか」

今日の朝、なのはが出かけた後、ユーノが俺のところに来たのだ。その首にレイジングハートがぶら下がっていた。

ユーノが言うに、机の上に置いてけぼりにされていたらしい。

現在、レイジングハートを持ってユーノと一緒に散歩、基ジュエルシードの探索である。

武流「まあ、ジュエルシード探してるけどさ、見つかったとして封印はできるの？」

レイジングハート『できます。が、暴走されていたら不可能です』

武流「あれ？ ユーノ曰く俺の魔力量はなのはをも凌駕できるって言っていたが？」

レイジングハート『砲撃などの単純な攻撃魔法は可能ですが、封印や結界などの複雑なものは契約したマスターしか行えません』

武流「納得・・・と、言いたいが・・・ユーノは契約しないまま封印使おうとしてなかった？」

ユーノ「それはレイジングハートに契約者がいなかったからです。契約後は重要なものにプロテクトや効率低下などのブロックをかけるんです。通常通りに使えるのは契約者であるマスターだけとなります」

武流「なる、現在のマスターであるのは以外が使えば使用不可能。できたとしても効力や効率ガタ落ちね。で、封印は暴走していなければ可能と」

レイジングハート『正確には願いによる暴走です。使用者が死亡、又は意識不明なら封印は可能です』

武流「この状況で使用されていたらその“願い”を壊すか使用者を気絶させるってわけね； めんどくせ；」

レイジングハート『お手数かけます』

武流「ああ、レイジングハートは気にしないで。そういう風に作ら

れているのなら仕方ないさ」

レイジングハート『はい』

そんな話をしながらしばらく歩くと、

アヲオオオオオオオオオオオオオオオオウウウウウ
ウウウウン

遠くで獣の雄たけびが聞こえた。

「犬？」

レイジングハート『武流様の手持ちジュエルガイスト、人工人機ファーストと同一種のジュエルガイストかもしれません』

武流「いや、あのジュエルガイストは特殊で同一種はファーストを含めて7体なんだ。ファースト除いて全部保管されている。盗まれたり誰かに所持許可が出たなんて聞いてないしな」

ユーノ「では犬でしょうか？」

レイジングハート『いえ、ジュエルシード反応です』

武流「……お手数おかけられましたよ。」

ユーノ「がんばってください！」

レイジングハート「応援しています」

武流「……なけるぜ」

ジュエルシート反応があるのはどうやら現在位置から見てすぐ隣の階段を登った先の神社のようだ。

武流「近いな。跳ぶか」

ユーノ「跳ぶってウワ！」

ユーノを掴んで跳ぶ。

一飛びで数十段を抜かし、数度跳ぶと神社の前にたどり着いた。
そこには、

ユーノ「ッ!」

ツガツガ　グチャ

大型犬に腸を貪られている女性だった。

武流「遅かったか」

ユーノ「そんな；　僕の所為で被害者が」

武流「おまえの所為じゃねえよ！　レイジングハート、結界はれるか!？」

レイジングハート『無理です』

武流「わかりやすい回答ありがとう!」

懐から人払いの術式が書かれた札を数枚取り出す。

それを適当に放ると地面等に張り付く。

これで人払いの魔術は発動した。後は、あの女性の脳が死ぬ前に
身体を再生させなきゃな。

一連の行動に気づいた大型犬がこつちに顔を向ける。

武流「あれもジュエルシードが生み出した“願いの塊”ってやつか
？」

だが、前回は肉塊のようなぶよぶよしていた。今回ののはやけに形
が整いすぎてる。

大型犬と表現したが、大柄の人間が四本足で立っているようにも

見える。正確に言うのであれば、ゲームなどで登場する黒い獣人が四本足歩行をしている感じだ。眼もなぜか4つもある。

レイジングハート『はい。ですが原生生物を取り込んでいます。前回の願いの塊は魔力だけで存在していましたが、今回は実体を持っています。戦闘能力は前回の比ではありません』

武流「まじすか? ;」

前回よりも手ごわくなった上にあの再生能力があるのなら物凄く不利だ ;

レイジングハート『ですが朗報もあります。実体として形を固定してしまったので前回のような再生は行えないはずです』

武流「・・・」

前回でこずったのは再生能力があったからだ。それがなければ簡単に塵にできていた。

今回の願いの塊が前回以上の戦闘能力を持っていたとしても、再生が無いのであればダメージも傷も蓄積する。結果、

武流「楽勝じゃん」

そう言った瞬間、願いの塊がこっちに向かって走り出した。距離10m。

ユーノ「! 来ます!」

武流「ふん!」

ズドン

願いの塊「キャウン！」

ツド タタン

全力パンチが顎を捉えて弾き飛ばす。

一度バウンドした後綺麗に着地したようだ。

武流「・・・効いたのか？」

レイジングハート『はい、ですが再生能力がないと言えど、じょじょに傷は塞がっていきます』

武流「簡単は治癒魔法は使えるってわけね！」

これは短期決戦で終わらせた方がいいな。女性の脳が死ぬのもまじかだ。

レイジングハート『武流様のお考えはわかります。それでしたら私をお使いください』

武流「なに？ 使っても効力が落ちるのなら黒龍王達を呼んだ方が楽だぜ？」

レイジングハート『あの女性を巻き込まない自信は？』

武流「ねえな！」

レイジングハート『でしたら私をお使いください。魔法は使えなくても戦闘形態の杖になることはできます』

ユーノ「そうか！ 杖の形態も使用者が考えた物になるんだ！ 接近戦の武器を想像すれば！」

武流「なるほど。それならいい武器があるな」

レイジングハート『決まりですね。ゲスト登録として武流様を仮マスターと承認します。デバイスモードへ移項します。杖の形態を想像してください』

セイバーのエクスカリバーやランサーのゲイ・ボルクなどもいいな。

だが、俺が扱うには軽すぎる。

そう、あいつのような巨大な剣がいい。

愛する者を守るため、自らジュエルガイストとなった騎士の大剣。俺のオリジナルの大剣を！

レイジングハート『杖の形態が決定しました。デバイスモードへ変形します』

首から下がっていたレイジングハートから光が発する。

収まったときには目の前に巨大な剣が地面に突き刺さっていた。

金剛羅 百鉄鬼の剣、斬馬刀がそこにあつた。

ただ違うのは、刀で言えば唾に当たる部分にレイジングハート本体の宝玉が埋め込まれている事だ。

ユーノ「で、でかい；」

全長、武流の三倍程の大きさであつた。

武流「名前は斬馬刀って言うんだが、戦車も両断るんだぜ？」

ユーノ「こんな物、どうやって扱うんですか！？；」

武流「おやおや、お忘れかい？」

片手を無造作に掲げると斬馬刀が倒れ、柄がその手に納まる。

武流「俺は緋石眼所持者だぜ？」

緋石眼を発動させる。

眼が紅く発光し、全身に力が溢れる。

武流「こんな物、簡単に振り回せるよ！」

斬馬刀を地面から抜き取り、両手で構える。

百鉄鬼の必殺の構えを。

武流「真名解放。斬馬刀」

その刀身に淡い光が纏う。

それと同時に願いの塊が再び武流に向かって駆け出す。

武流「我が斬馬刀の錆にしてくれる。殺！」

ツブン

かの者の必殺の詠唱を口にし、身体ごと斬馬刀を横に振るう。

ザッバン

切った、というより粉碎したと表現した方が適切かもしれないが切ったのだ。ただ、あまりにも威力がありすぎてしまったために、斬撃によって生じた衝撃波が願いの塊を粉碎したのだ。

ユーノ「す、すごい！」

武流「どうよ？」

散らばった肉片ひ青く光る物があった。

武流「ジュエルシード発見」

ユーノ「武流さん、封印を」

武流「おう。レイジングハート、頼むぜ」

レイジングハート『わかりました。では呪文を』

武流「え？」

レイジングハート『前回、マスターなのはがジュエルシード封印時に発した呪文を読み上げてください』

それって、リリカルマジカルって言ってたあれか！？

武流「待て！ あの恥ずかしい言葉を言わなければいけないのか！？」

レイジングハート「はい。早くしてください。あの女性の脳の機能が停止するまで2分を切りました」

武流「ああ、わかったよ！ リリカルマジカルジュエルシード封印^{ボソ}」

レイジングハート『封印』

青色の光がジュエルシードを包み込む。

レイジングハート『封印完了。収納』

レイジングハートの本体である宝玉にジュエルシードが消えていく。

武流「これでよし！」

ジュエルシードが封印されたからだろうか。願いの塊の肉片が光り、収束すると一匹の子犬になった。

子犬「わん」

取り込まれていた原生生物とやらであろう。

ユーノ「武流さん早く！ あの人の体を再生できるんでしょ！？」
武流「おう、まってな。処理班いますかー！」

と、大声を出してみると、

ロープ少女1「はい、いますよー」

和むような返事がくる。

現れたのはいつもの3人組みだった。

武流「よろしく」

ロープ少女1「よろしくされましたー。じゃあ皆さん、がんばりましょうー」

そう言うとき残りの二人の内、1人は『はい』と書かれた看板を掲げ、もう1人は懷から倒れている女性と同じ服と下着を取り出す。

武流「じゃあ帰ろう」

レイジングハートを宝玉形態に戻しながらユーノに言う。

ユーノ「え！？ でもまだ何にもしてませんよ！？」

武流「彼女達がやってくれるさ。人体の再生も特殊な魔術でできるらしい。後は心臓を動かして全身に血を回してやれば復活ってね。再生魔術はめんどくさいから覚えてないの；」

ユーノ「なんて他力本願；」

武流「さっきまで戦ってたんだからいいの；」

そう言いながらユーノを掴み、その場を後にする。

武流「しかし、今日は早く終わったな。あのぶよぶよより強いって
いうからちよい本気だしたけど、あんま強くなかったな；」

ユーノ「武流さんが一撃で終わらせたから本来の力を発揮できなかったんじゃ；」

武流「それもそうだな。あ、そうそう。この事はなのはには内緒だぞ？」

ユーノ「え？ なぜですか？」

武流「あいつの事だ。今回は自分のせいで怪我人が出たとかって言うて落ち込むに決まってる」

ユーノ「でも、今回は学校にいたから無関係じゃあ・・・」

武流「そうだとしても、レイジングハートがあればすぐに駆けつけることができたとかって言うぜ。それに、もうあいつはこの事態に首を突っ込んだんだ。無関係じゃない」

ユーノ「・・・わかりました。なのはには今回のことは内緒にしておきます」

武流「素直でよろしい。レイジングハートも、ジュエルシードを1つ回収できた事意外は内緒だぞ？」

レイジングハート『承知しました』

武流「よし」と

レイジングハートの了承を得た後、階段の隣にある木の影に隠れる。

ユーノ「え？ まだ道路に出ていませんか；」

武流「違つよ。まあ、お前さんもこっちこい」

ユーノ「？」

納得しない顔のままこっちに来るユーノ。

数分後、

ユーノ「あ！ あの人はい」

武流「静かにしろ；」

上から女性が降りてきた。そう、あの倒れていた女性である。服も血の跡すらない。

両手の中には胸に埋もれている先程の子犬がいた。

ユーノ「本当に身体が治っているなんて；」

武流「再生魔術は相変わらず凄いな。さ、これで心置きなく家に帰れるな」

ユーノ「はい！」

女性が階段を降りきって道路を歩いていく。

それを確認してから再度、階段を降り始める武流達。

高町家へと足を運ぶ。

その後、神社で残念がる金髪少女と銀髪男性の姿は誰も見ていなかった。

11話（後書き）

本当なら、死んだという設定が良かったんですが；
殺せなかった；

心がめっさ痛みました；

だから生還ルートです。

ちよっとグロかっただけで原作道りに進んじやいました。

次回はやっと二人がご対面ですね。ではノシ

12話（前書き）

すみません； 今回も遅くなりました；

しかも、いつかのように長文ですらありません；

ほんとにすみません；

ではいつか書いたテストロッサ家の生活シーンの12話、始まります。

12話

八尋「ふむ、いい湯加減だ」

時の庭園の共有浴場として露天風呂がある。（これしかないのだが）

背景は夕暮れの山中と設定されている。

八尋はその風景を楽しみながら露天風呂を満喫していた。

八尋「ふう、裏庭といい、ここといい、よくこんな空間を造れるな；
プレシアが1人で造ったとしたら、なぜ管理局はあんな天才にありのない罪を被せたのだ？」

リニスから借りた資料によれば重大な実験の失敗の責任をすべて押し付けられたとあった。しかし、そのための微調整は全てその実験を発案した企業の社員がやったそうだ。

賄賂か？ それとも知られたくない事でも知られたか？ どっちにしろ、近いうちに報復してやろう。私腹を肥やすのならそれなりの覚悟があるのだからかな・・・

八尋「・・・まったく、プレシアがなにをしたと言うのだ。彼女はただたんにアリシアとの時間をつくろうと、アリシアを幸せにしようとかんばっていたただけだというのにまったく、法律を守る者が法律を破るとはなにごとだ； まあ、実際に責任者が責任をとるのは当たり前だが、どう考えてもプレシアは悪くないだろうに； だが、なぜこうもアリシアに責任の全てがくるのだ？ ブツブツ・・・」

まるで大事な子供を心配するような父親のようにブツブツと考え

込む。

ここに来てから１年以上がたった。

それまで時の庭園の内部はだいたい把握したが、ただ生活するためなら必要のない空間や部屋が多くあることに疑問をもった。

八尋「アリシア・・・か」

やはり、アリシアが外にでなくとも暮らせるように造ったのだろう。その思いがこの空間からも伝わってくる。

八尋「その思いがフェイトにも向けられたのは嬉しい限りだ」

フェイト「私になにかあったの？」

八尋「いや、なに。フェイトにも・・・」

・・・今、誰が返事した；

首を景色から入り口の方へと向ける。

タオルすら纏わないフェイトがそこに立っていた。

すぐに首を景色へと戻す。

八尋「フェイト、入り口に私が入っていると看板を立てていたはずだが；」

フェイト「うん。だから背中を流しに来た。」

だからと言って、タオルの一枚を身体に巻くとかしないのか？；

まあ、小さい頃は別に気にしないらしいが・・・流石にあの年で

親ではなく居候の前に出るものだろうか；

だが、ここです承したら大変だ； いろんな意味で；

八尋「いや、先程洗ったのでな。遠慮しておこう；」
フェイト「そうですか；」

寂しそうな顔をするフェイト。

だが、断らなければほんとに大変なのだ；

フェイト「じゃあ、今日一緒に寝てもいいですか？」

八尋「フェイト、背中を洗ってくれ」

夜に俺の部屋に入る所を誰かに見られたら終わりだ；特に現在のプレシアに見られたら死だ；

しかし、洗ってもらえる前に1つやらなければいけないことがある。

そのためにはフェイトに見られてはいけない。

八尋「フェイト、向こうを向いていてくれ」

フェイト「？ うん」

風呂（温泉）から上がり即座に横に置いてあったタオルを腰に巻く。

フェイトにはまだ見せてはいけないものを隠す。

そのまま洗い場に腰を下ろす。

八尋「では頼む」

フェイト「うん！」

振り返ったフェイトが嬉しそうに言ってきた。

しかし、なぜいきなり背中を洗いに来たのだろうか？

フェイト「八尋の身体ってすごいね。鍛え抜かれてるし、これは戦闘の傷？」

そう傷跡を触りながら聞いてくる。

その傷は生前、最後の戦いで受けたものだった。

八尋「・・・ああ、そうだよ。俺の努力の結果だ」

フェイト「そうなんだ・・・その努力は実ったの？」

フェイトが言った言葉は記憶を呼び起こし、心の傷を抉る。

愛した者を故郷に帰すためにどれだけの幸せを手放し、友を、仲間を利用した結果・・・

八尋「実らなかったよ。最後の最後で大事なピースをはめ忘れてたことに気づいたよ。最初のね」

フェイト「・・・そう」

フェイトの、背中を洗う手が僅かに強張る。

八尋「どうした？ フェイト」

フェイト「怖いんだ」

八尋「何が？」

フェイト「今までお母さんに褒めてもらいたくてがんばってきた。でも、いつも邪魔者を見るような眼で見られてきた」

以前までのプレシアか。そのころはフェイトはプレシアとアリシアの幸せを奪った奴等と同等に見られていたのだろう。辛かったのだろう。その言葉の端端から悲しみが伝わってきた。

フェイト「最近、やっと私を笑顔で見てくれるようになった。嬉しかったんだ。今までの苦労が実ったんだって。やっとお母さんに愛されるんだって。この前、実験の材料を集めるために、私を頼ってくれたんだ。嬉しかった。お母さんも笑顔だったんだ。」

俺の努力も無駄ではなかったか。

しかし、この思いは次の言葉で亀裂を生む。

フェイト「でも、その笑顔は私に向いてなかったんだ」

何？

八尋「どういうことだ？」

フェイト「まるで、遠くのずっと遠くの幸せ、私であって私じゃない人に向けられてたの」

アリシアか・・・；

今のプレシアならばフェイトも一緒に愛してくれると思うのだが・
・・・；

フェイト「でもね、別にいいんだ。お母さんが私を頼ってくれただけで。きっと、ちゃんと仕事を終わらせればまた褒められると思うから。でも、失敗したら・・・捨てられるかもしれない、そう思っちゃったんだ。」

！ いかん； プレシアの気持ちを変えることには成功したが、フェイトのメンタルケアを怠っていたか；

今まで相手にされなかったのに、急に説明もなく愛されたらフェ

イトのような賢い子なら疑問を持ってもおかしくはない；

今までの不安がここにきて爆発しかけているのか；

だが、テストロッサ家全員を幸せにすると誓ったのだ。ここでフ
エイトの心を折ってはいかん。

八尋「馬鹿だな、フエイト」

不安をできるだけ与えないよう、リラックス口調で言う。

フエイト「え？」

八尋「そう思うのならちゃんと成功させればいい。21個のジュエ
ルシードそ全て集めれば済む話じゃないか」

フエイト「でも、ちゃんと終わらせても・・・」

八尋「大丈夫さ。プレシアならちゃんと、おまえさんも愛してくれ
るよ。もちろん、ジュエルシード集めも俺が手伝うさ」

さて、反応は・・・

フエイト「うん、そうだね」 八尋もアルフもリニスもいるしね。
お母さんも・・・きつと」

どうやら立ち直ったようだ。

と、そこに

プレシア「私が何かしら？」

八尋「うむ、プレシアがな・・・」

・・・今、返事したのは誰だ？； 少なくともフエイトではない；
とすれば・・・

首を左へ、入り口に向ける。

タオルを纏わないプレシアが（以下省略

さらに、プレシアの後続にアルフとリニスもいあた。こちらもタオルを（以下省略

首を景色の方に戻す。

フェイト「あ、お母さん。リニスにアルフも」

プレシア「あら、フェイト、あなたなんでいるの？」

フェイト「八尋の背中を流しに来たの」

プレシア「そうなの」

プレシアの質問が終わったところで質問する

八尋「・・・なぜいる？」

プレシア「私は普通に風呂に入りに来ただけで、この子達はちょっと違うみたい」

リニス「お背中流しに来ましたよ」

アルフ「いやいや； 私も普通に入りきたよ；」

八尋「・・・背中を流しに来たりニスはともかく、プレシア、アルフ・・・脱衣所前に看板を立てていたはずだが？」

プレシア「あら、私の背中を洗うとき見たから別に大丈夫でしょ？」

どうして聞くの？ みたいな顔で答えてくれる。

な、なんてことだー！； 「動くのがめんどく」とか言っていた4日も風呂に入らなかったプレシアを無理やりに風呂を入れたときの事が裏目に出たか；

というかあの時は後姿しか見てなかったんだが；

先程、真正面をもろに見てしまったのだが・・・い、いかん；
落ち着くんだ、勲章よ； 腰にタオルを巻いているからといって守

れる範囲は限度がある； おちつけ；

八尋「・・・アルフは？；」

アルフ「いや、皆風呂に入るみたいだからあたしも入ろうと思つてw」

だからなんでお前らは居候相手にそこまで接せられるんだ！；
せめてタオルぐらいは身体に巻いてろ！；

フエイト「お母さん・・・」

俺の背中から離れプレシアに話しかける。

プレシア「どうしたの？ フエイト」

フエイト「あ、あの；」

ちらりと俺に賛否を問うような眼で見てくる。

八尋「・・・別に私はかまわんよ」

それを聞いて笑顔でプレシアの元へと歩いていく。

「背中を洗ってもいい？；」と不安げに尋ねる声と「お願いするわ」と心からの本心が聞こえた。

さて、上がるか；

この場から一秒でも早く立ち去るために腰をあげようとすると、

リニス「では続きは私がやりますね」

と、リリスが俺の背中を洗い始める。

八尋「上がろうと思っただが；」

リリス「なに言ってるんですか。ちゃんと身体を洗って温まってから上がってください」

身体はとくに洗い終わっているし、風呂にも入って温まっている。

フェイトが洗っていたところを見て誤解しているのか；

こうなれば、脱衣所に向かうのはリリスが洗い終わってからだな；

アルフ「さて、あたしも洗うかな」

そう言っ、右の1つ隣のシャワーを使い始める。

その様子が視線の端に写ったため、すぐに左へと視線を移す。

うゝむ、アルフもなかなかの容子・・・ではない！！； 早くここから出なければ気がおかしくなりそうだ；

リリスは気づいてないのか、む、胸が背中に当たっている；

おちつくんだ俺； 武術の達人は全身の血の流れを操作できるといではないか。百数十年、戦いの中で生きていた俺なら造作も無いはずだ！！； 一点に集まろうとする血を身体中に秒等に流すんだ； 間違っ、て顔に送るようならどこかの主人公のように鼻血で血の海を作るかもしれんからな；

そう、煩惱と戦っているリリスによる背中洗いは終わったようだ。

リリス「終わりましたよ」

八尋「そうか、ありがとう」

チャンスは今！　すぐに腰を上げて、

八尋「では、先に上がらせてもらっよ」

そう言っで脱衣所へと向かう。が、

左手を掴まれる。

そう強くないが弱くもない力で引っ張られる。

見れば、

フェイト「八尋も一緒に入るっ？」

フェイトが掴んでいた。

八尋「俺は先程入ったから遠慮しておこう」

フェイト「・・・皆と一緒に入れると思ったのに」

そう聞くからに、見るからにわかりやすくながつかりするフェイト。
風呂の方を見ればプレシア、リニス、アルフと、全員が湯に浸か
っていた。

アルフは気持ちよさそうに耳をたらししている。

八尋「・・・」

フェイト「一緒に入るっ？」

今まで叶わなかった「家族全員でお風呂」が今実現しようとする
フェイトの願い。

なぜか八尋まではいつているが、その夢が実現寸前なのだ。
今までのフェイトの辛さを考えれば協力しないこともない。が、

紳士である八尋にとってはある意味の地獄である。

フェイト「……」

今にも泣きそうな目で八尋を見つめるフェイト。その瞳に、

八尋「……わかった； 入ろう」

フェイト「……」

負けたのであった。

八尋よりさきに風呂に入るフェイト。それを追うように八尋も風呂の手前まで来る。

この時、八尋は重大な事に気づく。

女性組みは全員タオルを湯の外に出している。

共有の風呂ではタオルは湯につけてはいけないというのがマナーである。

家の風呂なら別に守らなくていいのだが、この状況でタオルを湯につけるのはなんとなく抵抗があった。

かといって、タオルをはずせばフェイトの衛生上、よくないものを見せる事になる。

しかも、なぜかフェイトを除いた女性組みが全員、八尋の一点を見つめる。

八尋「……」

じーーーーーーーーと、穴が開きそうなほど見られる。

そこで、八尋が取った行動とは、

八尋「！ ジュエルシードか！」

女性組み「「「なんだって！！？」」「」」

フェイトを含めた女性組みが全員、八尋から目を離す。

これを見逃さない八尋ではない。

すぐさまタオルを腰から外し、身体を湯に沈める。

八尋「いや、すまない。気のせいのようだ」

女性組み「……！」

フェイト以外の女性組みが「っは！」と気づいたときには遅かった。

八尋はその身を首以外、湯に沈めていたのだ。

風呂の湯は温泉に行けばありそうな白い湯であったため、湯に浸かっている部分は眼を凝らしても見れない。

女性組み「……っく……」

フェイト「？……」

女性組みはしてやられたとばかりに悔しがる。

純粹にして清潔なフェイトはこの状況と空気にまったく理解できなかった。

ふう； 俺は武流ではないからな； 女好きというわけではないが、早く出なければいろいろと大変だ；

この状況で出られない八尋が風呂から上がったのは、病弱で身体が弱いプレシアがのぼせる40分後の騒ぎの最中であった。

――

八尋「まったく； のぼせるほど浸かっていなくてもいいだろうに；

「プレシアをフェイト達にまかせて海鳴市でジュエルシードを捜索している八尋。」

現在のジュエルシードはまだ1つ。

プレシアが行おうとしている魔法に必要な21個には程遠い。だからと、少しでも目標数に近づこうとアポカリプスのセンサーを頼りに1人で捜索中だ。ちなみに、フェイトにはプレシアを看病するようにと言っておいた。少しでも2人の溝を埋めるためだ。

アポカリプス『対象の反応、未だにありません』
八尋「そうか」

だが、ジュエルシードのジの文字も見つからない。

これでは21個はどれだけ遠い事やら；

武流達が回収したと思われる2つを奪取できればいいのだが、それはもう少し後にすることにした。武流達が残りのジュエルシードを1つでも多く回収してくれば大分手間が省けるからだ。

まあ、武流に俺の存在を知られるのは困るからな。狙うのなら、あの少女が1人のときだな。

まるで誘拐みたいだ、っと思っってしまったが気にしないことにする。

と、そこに、

ドン

「??? あぶ! ;」

八尋「! む」

誰かとぶつかったようだ。
足に当たったようだ。

「??? あう ; 乙女の顔面が ;」

八尋「む、すまない ; どれ、見せてみなさい」

栗色髪のツインテールをした少女のようだ。

顔から手がどいた瞬間、その顔に見覚えがあった。

先程、ジュエルシードを奪取するのなら少女1人のときだな、と言っていた少女、なのはであった。

12話（後書き）

・・・ありのままに起こった事を話すぜ；

気がついたら今回のアップロードが2週間おきだった；

サボりとか、忘れてたとかじゃあ断じてねえ；

無印最終話を考えていたら途中話をまったく考えていなかったんだ；
ネタが無くなる恐怖の片鱗を味わった気がするぜ；

・・・ほんとなら、なのはとフェイトを合わせるつもりが、なんで
八尋と会わせてしまったのだろうか；

ジャイアントニャンコ事件はもう少し先かも；

次回は早く出せるよう努力するようします； ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2463w/>

魔法少女リリカルなのは ～宝石の海～（仮）

2011年11月21日17時25分発行